

# 障害者の スポーツキャリアを 考える

100人のインタビュー調査から見てきた  
選手の実態と特徴的な事例





## 発刊に寄せて

元 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団  
障害者スポーツ・プロジェクト アドバイザー  
河合 純一

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団の障害者スポーツ・プロジェクトにおきまして、これまでパラアスリート 100 名からのインタビュー調査を取りまとめ、ここに研究成果を発刊されますことを心よりお慶び申し上げます。

2025 年 9 月まで、私も本プロジェクトのアドバイザーとして 3 年半ほど関わらせていただきました。献身的な事務局のサポートの下、藤田先生をはじめとして 3 名の先生方に御尽力いただき、世界的にも稀な研究成果としてまとまったと考えています。

パラスポーツ全般の調査・研究においてよく言われることに、「障害が多様であり、個別性が高いため、n 数を集めることや研究としての質を担保することが難しい」というものがあります。

そのような中、長い年月をかけて積み上げてこられた本インタビュー調査は、障害、競技歴、性別、競技などを広く網羅したものとなりました。そこから見えてきた研究成果は、今後の障害のある方々、とりわけ子供たちに多くの示唆を与えるものとなったと感じています。

本研究成果が一人でも多くのパラスポーツ関係者、特に指導者の方々に届き、これからの活動に生かしていただけるものになれば幸いです。私も一人のパラリンピアンとして、本研究に基づく教育プログラムの開発等にしっかりと取り組んでいければと思っています。

スポーツ基本法が 14 年ぶりに改正され、スポーツ庁が新たなスポーツ基本計画(第 4 期)の策定に向けて動き出すタイミングでの発刊となります。スポーツから誰一人取り残されることなく、誰もが自分らしく生きられる社会を目指して、私自身、一つでも多くの課題解決方策が具現化できるよう引き続き取り組んでまいります。

本研究に際しまして、100 名のインタビューに御協力いただいたパラア

スリートに感謝を申し上げ、発刊に寄せての言葉とさせていただきます。

2025 年 12 月吉日

## はじめに

ヤマハ発動機スポーツ振興財団、障害者スポーツ研究プロジェクトは2012年から活動を開始した。「スポーツと深い関わりのある人間科学、スポーツ医学等の学術及び科学技術の振興を図り、併せて我が国におけるスポーツの普及・振興とスポーツ文化の振興・発展を図ることを目的」とした当財団の目的と、チャレンジする人々を応援するという財団のスピリットに沿う形で立ち上がったプロジェクトである。障害のある人のスポーツの普及・振興に寄与するとともに客観的データに乏しい後発の研究分野において後の研究の基礎となるデータを収集し、残すというまさにチャレンジングな研究プロジェクトである。

本プロジェクトでは2013年にパラリンピアン、そして2015年にはジャパンパラ(陸上競技と水泳)参加者に対してアンケート調査を実施した。その結果パラリンピアン調査では後天的に障害を持った人が約7割、これらの選手は受傷後スポーツを始めるまでに10年以上かかっていたこと、公共の一般のスポーツ施設で練習している人が3割と多いこと、スポーツ実施に当たっては、友人やトップ選手、監督、コーチの影響を受けている人が多いことなどが明らかになった。ジャパンパラに参加した選手の調査では先天的な障害者が過半数で、スポーツを始めたきっかけとしては家族の勧めが約3割と多いことなどがわかった。

これらの調査から障害のあるスポーツ選手のスポーツキャリアの特徴をある程度知ることができた。しかしながら、選手一人ひとりに目を向けると年齢や性別はもとより、障害の種類や程度、先天的障害か後天的障害か、生まれ育った場所や時代背景などが非常に多様である。このように多種多様な選手たちはどのようなきっかけや支援があってスポーツをすることが可能となったのか？どのような施策が障害者のスポーツ実施に有効なのか？をより具体的に知ることで、障害者のスポーツ実施に結び付けたいという動機から2019年に本調査を開始した。そして2024年度までに合計100人の選手のインタビュー調査を実施することができた。

まずは1時間～2時間のインタビュー調査に快く対応してくださった選

手の皆さんに感謝したい。ほぼすべての選手の皆さんは「オフレコ」なしで、生まれてこれまでの人生、スポーツを始めるようになった契機や周りの支援のこと、今後のスポーツの取り組みなどを丁寧に答えてくれた。先天的な障害があっても、子どものころから体を動かすことが好きでそのまま競技選手になった人。子どものころから、障害がありながら障害のない人と常に一緒にスポーツをし、後になって自分がパラスポーツの大会に出られることを知った人。事故で障害を持っても好きだったスポーツを続けたいという思いから自ら情報を集め、パラスポーツに親しむようになった人。偶然テレビでパラスポーツを見て関心を持った人。足の切断時に、スポーツがやりやすいよう切断部位を医師と相談したことが功を奏した人など。100人のインタビューでは100通りのスポーツとの出会い方や周りの支援や応援が語られた。可能であれば選手の皆さんが語ってくれた言葉をそのまますべて掲載したいところであるが、おそらく3000ページ近い報告書になるであろう。

今回の本報告ではスポーツ実施のための7つの視点と12のスポーツキャリアパターン(1章)、スポーツに対する関心の有無(2章)、スポーツキャリアパターンにみるスポーツ開始時のきっかけと継続(3章)、競技活動継続時の経済的支援・社会的支援(4章)、モチベーション(5章)、障害者のスポーツを取り巻く社会的環境の変化(6章)、本調査のまとめといくつかの提言(7章)について報告する。できるだけ各選手が多様であることを損なわないように執筆したつもりであるが、抜け落ちてしまった部分があまりにも多いことも事実である。2019年から2024年までの本研究プロジェクトの報告書には、やや詳しく選手のインタビュー結果が掲載されているので合わせて読んでいただくと幸いである。

お忙しい中インタビューに応じてくださった選手の皆さんに再度心からお礼申し上げる。これらの語りは読むだけでも楽しいし、障害のある人たちのスポーツキャリアがいかにも多様かということを教えてくれている。そして何より今後の障害者スポーツの施策を考える時の貴重な基礎資料となるに違いない。もっと多くの障害のある多くの人たちが日常的に普通のこととしてスポーツ活動に携われるようになることを願っている。そして、最後に100人もの選手のインタビューの日程や場所の調整、承諾書の

やり取り等をしてくれた本財団職員の皆さまにも感謝したい。間違いなく本報告は職員の皆さまと研究員の共同作品です。皆さまありがとうございました。

(藤田紀昭)

## ■目次

発刊によせて	i
はじめに	iii
序章 研究概要	1
1. キャリア調査の背景・目的	2
2. 調査概要・インタビュー対象者の属性	4
第1章 7つの視点と12のスポーツキャリアパターン	7
1. 障害のある人のスポーツ活動のための7つの視点(条件)	8
2. 12のスポーツキャリアパターンについて	12
第2章 スポーツに対する関心の有無	27
1. 傾向	28
2. スポーツに関心がある人、 好きだった人、嫌いではなかった人の事例	28
3. スポーツに関心がなかった人、嫌いだった人の事例	32
4. まとめ	35
第3章 スポーツキャリアパターンにみる スポーツ開始時のきっかけと継続	37
1. 情報提供者	38
2. 開始時重要他者	42
3. 開始場所	47
4. 継続時重要他者	51
5. クロス集計	56
6. まとめと考察	65

第4章 競技活動継続時の経済的支援・社会的支援	69
1. 報告概要	70
2. 競技活動継続時の支援の有無・支援元	70
3. 雇用先からの支援	71
4. 競技継続における「選手雇用」の実態	74
5. 障害種別にみた雇用先支援の実態	77
6. 自治体からの支援	80
7. まとめ	84
第5章 モチベーション	87
1. 傾向	88
2. 前章までとの関連性	88
3. 事例	89
4. まとめと提言	98
第6章 障害者のスポーツを取り巻く社会的環境の変化	101
第7章 本調査のまとめといくつかの提言	111
1. スポーツを始める前の状況(スポーツへの関心の有無)	112
2. 障害者スポーツに関する情報を得ている	113
3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある	115
4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある	117
5. 継続的なアクセス方法の確保	118
6. 社会的支援・経済的支援	119
7. モチベーションの維持	120
おわりに	122
執筆者紹介	124
附録	
キャリア調査インタビュー一覧	127
書籍および過去の報告書データ	163

序章.

研究概要

## 1. キャリア調査の背景・目的

障害者スポーツ選手のキャリアに関する実態把握を目的として、本プロジェクトでは、2013 年度に「パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査」、2015 年度に「障害者アスリートのスポーツキャリアに関する調査」を実施してきた。両調査の概要は図表序-1・2 のとおりである。

### 図表序-1 2013 年度キャリア調査概要

#### 「パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査」 (2013 年度実施)

##### 【調査対象・回収数】

2004 年アテネ、2006 年トリノ、2008 年北京、2010 年バンクーバー、2012 年のロンドンパラリンピックに出場した競技者 321 名(回答者数:200 名/回収率:62.3%)

##### 【調査結果要約】

- ・回答者の 73.5%が「中途障害」で、障害発症平均年齢は 18.8 歳、パラリンピック出場競技の開始平均年齢は 23.3 歳であった。
- ・競技を始めたきっかけは、「友人や知人のすすめ」(34.0%)が最も多く、「学校の授業やクラブ活動」(14.5%)、「家族のすすめ」(11.0%)が上位。
- ・練習頻度は「週に4～5回程度」(38.0%)が最も高く、「週に6～7回程度」(30.0%)、「週に2～3回程度」(26.5%)と続く。
- ・練習施設は「公共施設」(30.5%)、「障害者向け公共施設」(28.0%)の利用率が高く、「民間施設」(12.5%)と「学校施設」(12.0%)が続く。
- ・パラリンピック出場時の競技サポートを 75.0%が受けており、パラリンピック出場当時の職業は「会社員」(40.5%)、「公務員」(11.5%)、「学生・大学院生」(11.0%)の順であった。

## 図表序-2 2015 年度キャリア調査概要

### 「障害者アスリートのスポーツキャリアに関する調査」 (2015 年度実施)

#### 【調査対象・回収数】

2015 ジャパンパラ水泳競技大会もしくは陸上競技大会にエントリーした競技者 577 名(回答者数:218 名/回収率:37.8%)

#### 【調査結果要約】

- ・回答者の 52.3%が「先天性障害」で、「中途障害」は 35.8%、「無回答」は 11.9%であった。中途障害の受傷・発症時の平均年齢は 18.0 歳であった。
- ・学校体育とのかかわり方について「ほぼ参加した」が最も多く、小学校では 117 人(68.4%)、中学校では 124 人(68.1%)、高等学校では 140 人(74.5%)、大学では 17 人(47.2%)であった。
- ・競技を始めたきっかけは、「家族のすすめ」(33.9%)が最も多く、「学校の授業やクラブ活動」(27.5%)、「友達や知人のすすめ」(23.4%)が上位。
- ・練習頻度については「週に 2～3 回程度」(22.5%)が最も多く、「週に 4～5 回程度」(20.6%)、「週に 1 回程度」(13.8%)、「2～3 ヶ月に 1 回以下」(12.8%)と続く。
- ・出場経験のある国際大会は、「パラリンピック・デフリンピック」が 22 人(10.1%)、「世界選手権」が 32 人(14.7%)、「地域別国際大会」が 39 人(17.9%)、「それ以外の国際大会」が 53 人(24.3%)であり、国際大会未経験者は 115 人(52.8%)であった。

以上の調査は、パラリンピアンおよび国内選手のキャリア形成や競技活動の現状把握に有益なものであるが、選手個々のキャリアは、年齢、性別、障害種や程度、発生時期、学齢期の体育・運動経験、活動地域や人的・経済的支援の状況等、多種多様な条件によって規定される個別性の高いものであり、量的調査のみでは選手個々のキャリアを詳細に把握

することが困難であった。

そこで、多様な競技者に対する支援方策や各種施策を検討するための基礎資料を得ることを目的として、2019 年度から 2024 年度にかけて選手一人ひとりの個人史やスポーツキャリアに関するインタビュー調査を実施した。

## 2. 調査概要・インタビュー対象者の属性

本調査は、合計 100 名の選手に協力いただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ 1 時間～2 時間程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等を説明し、同意を得た上で調査を実施した。また、倫理的配慮として、日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号 18-11 および 22-001-01)を受けて調査を実施した。個人情報保護の観点から、対象者は本書籍において名前ではなく「識別番号」として表記した。この「識別番号」は、巻末附録のキャリア調査インタビュー一覧内「通し番号」及び「識別記号」の番号と同じ調査対象者である。番号は、インタビューを実施した順番である。なお、インタビュー調査はプロジェクトメンバー4 名を中心に実施し、日本福祉大学の安藤佳代子准教授ならびに兒玉友准教授の協力を得た。

主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。また、インタビュー対象者の属性は図表序-3 のとおりである。

### 図表序-3 インタビュー対象者の属性

#### 【障害発生年齢】

※0～5歳:51名/6～20歳:30名/21歳～:19名

※本調査研究では0～5歳で障害が発生した場合を先天的障害者としている。

#### 【障害種】

脊髄損傷・二分脊椎:20名/下肢切断・下肢機能障害:18名/  
上肢切断・上肢機能障害:8名/脳性麻痺:10名/  
視覚障害:27名/聴覚障害:8名/その他:9名

#### 【所属・雇用形態等(調査時)】

一般雇用:45名/※選手(アスリート)雇用:36名/大学生:7名/  
/その他:12名

※選手(アスリート)雇用については、以降「選手雇用」と表記する。

#### 【競技レベル(調査時)】

国内大会出場:17名/国際大会出場:9名/

国際大会入賞:32名/パラリンピック出場:8名/

パラリンピック入賞:20名/パラリンピックメダリスト:14名

性別については、男性が6割強を占めており、平均年齢は37歳で20代から60代まで幅広い年齢の対象者にインタビューを実施した。障害発生年齢についてみていくと、「0歳から5歳」が51名、それ以降の発生が49名となっており、先天的もしくは幼少期に発症した対象者と後天障害に該当する対象者がほぼ半数ずつとなっている。障害種については、脊髄損傷・切断・脳性麻痺等の肢体不自由の対象者が56名、視覚障害、聴覚障害等の対象者が44名となっている。

雇用形態については、一般雇用・選手雇用の選手が81名、大学生・その他の選手が19名となっている。また、競技レベルについては、競技別国際大会入賞、パラリンピック出場以上の戦績をもつ選手が74名となっており、本調査の対象者の多くは高い競技歴を有していると指摘できる。

(序章担当:河西正博)



# 第1章

## 7つの視点と

## 12のスポーツキャリアパターン

## 1. 障害のある人のスポーツ活動のための7つの視点(条件)

本調査プロジェクトで行った100人のインタビューからパラアスリートのスポーツへの社会化(どのようにしてスポーツをするに至ったか)および競技の継続に関して、ある程度共通する以下の7つの視点(条件)を見出すことができた。

1. スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)
2. 障害者スポーツに関する情報を得ている
3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある
4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある
5. 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている
6. 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)、経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある
7. 何らかの形(例:ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

インタビューに答えていただいた選手の皆さんはいずれもこうした視点(条件)がクリアされている。逆に言えば、これらの視点(条件)が整っていないければ、障害のある人がスポーツにアクセスし、継続することが難しいと言っても過言ではない。

これらの7つの視点(条件)の概略について説明する。

### 1.1 スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)

第1の視点(条件)は障害のある人がスポーツを始める前提条件といえる。障害のある人がスポーツを実施するためにはまず、スポーツに関心があることが条件といえる。スポーツに関心がなければ次の視点(条件)である障害者スポーツに関する情報を探そうとしないであろうし、情報もたらされたとしてもスポーツへ気持ちが向くこともないと考えられる。また、後天的障害者で受傷前にスポーツにまったく関心がなかった人やス

スポーツ嫌いだった人、が受傷後スポーツにすぐに関心を持つことは何か特別な機会がない限り難しいと考えられる。

障害者スポーツの普及を図るための第 1 の条件として、障害の有無に関係なく多くの子どもたちにスポーツを様々な形で体験させ、好きになってもらうことが必要だと考えられる。そのことで途中で障害を持ったとしてもスポーツに関心を持ってくれるであろうし、先天的に障害があったとしてもスポーツをすることが可能であることを知る人が増え、パラスポーツの普及に結びつくと考えられる。

## 1.2 障害者スポーツに関する情報を得ている

第 2 の視点(条件)は障害者スポーツに関する情報を必ず得ているということである。情報を自ら主体的に探し求めた人もいれば、何らかの機会に他者やメディアから情報を得たという人もおり、情報源は多様である。障害発生時期や障害種の影響があると考えられる。

情報の取得については選手が生まれた年が影響していることも考えられる。現在であればパラスポーツに関する情報はインターネット等で容易に手に入るが、インターネットが普及する前は情報を得るのは難しかったと考えられる。また、現在はリハビリテーションの保険適用期間が最長でも約 6 か月と制限されていることから日常生活、社会生活への復帰が第一義的な目的であり、その後の趣味や生きがいのためのスポーツ活動に関する情報や体験の機会は少なくなっている。リハビリテーション期間を長く有することができれば、リハビリテーションの最後にスポーツへの導入が図られ、スポーツへと導かれる可能性も高かったと考えられる、ゆえに次の視点(条件)である「障害者スポーツの場へのファーストアクセス」もスムーズに行われたことが推察できる。

## 1.3 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある

第 3 の視点(条件)は障害者スポーツの場へのファーストアクセスがなされていることである。障害者のスポーツへの社会化では情報が当該者に届いただけではスポーツ活動に結びつかない場合がある。障害者スポーツに関する情報があっても、どこに行けば活動できるのか、どのように

アクセスすればいいのかが分かり、そのアクセス方法が確保されなければスポーツの場には行くことができないからである。また、人によってはスポーツの場へアクセスすることに対する心理的な壁が高く、情報をもっていたとしても現場になかなか足が向かないことがあるかもしれない。さらに、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合もある。場合によってはスポーツの場へのファーストアクセスを情報提供者やその関係者が支援してくれるケースや先述のようにリハビリテーションの現場でファーストアクセスが可能なケースもある。

ファーストアクセスの場で多くの人を見るだけではなく、そのスポーツを体験し、面白さを知り、あるいはそこにいる人に勧められたり、勧誘されたりして継続的なスポーツ活動につながる場合が多々ある。まさに「はじめの第一歩」は非常に重要なのである。

#### 1.4 障害者スポーツを継続するための受け皿がある

4つ目の条件は障害者スポーツを継続するための受け皿があるということである。今回インタビューをさせていただいた選手には、全員スポーツ継続のための受け皿があった。多くの場合は当該競技のクラブやチームであった。個人で日常的にゲレンデを訪れ、スノーボードの練習をしている人や、自分で受け皿を作った人もいた。いずれにしても継続的なスポーツ活動の場があった。中にはスポーツ活動の場をいくつか持っており、多くの日を練習に費やしている人もいた。

スポーツ実施の受け皿がないことが障害のある人のスポーツ活動の障壁となっている。希望する競技のチームやクラブが存在しなかったり、諸事情で体育館を利用できなかったりして、近くに利用可能なスポーツ施設がない、あるいは次の視点(条件)で述べるスポーツの場へのアクセスが難しい場合なども、受け皿がないことの要因となる。

#### 1.5 継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法が確保されている

5つ目の視点(条件)は継続的な障害者スポーツの場へのアクセス方法の確保である。スポーツ活動を継続するためにはスポーツの場へのアクセス方法が確保されていなければならない。多くの場合、自分で車を

運転したり、公共交通機関を利用したりしてスポーツの場にアクセスしているが、スポーツの場へのファーストアクセスと同様に、障害の内容や程度、年齢によっては自分でアクセスができないため家族等に頼らなくてはならない場合がある。頸髄損傷や脳性麻痺、筋ジストロフィーなど重度の肢体不自由者の場合、公的な移動支援制度が自治体によっては存在するが、利用目的や回数に制限があるためスポーツの場へのアクセスを家族等が支援している場合がある。18歳未満で運転免許が取得できず、家族も仕事の関係で移動の支援が難しい場合、スポーツ活動が著しく制限され、運転免許取得後に本格的にスポーツを始めるといった例もあった。

## 1.6 競技レベルに応じた社会的支援(家族、職場などの支援)や経済的支援(海外遠征、合宿、用具の購入など)がある

6つ目の視点(条件)は競技レベルに応じた社会的支援や経済的支援が受けられていることである。スポーツ継続の重要な他者として、スポンサーを挙げた人もいた。パラリンピックに出場するためには世界ランキング上位にいたり国際大会予選を勝ち抜く必要があり、海外遠征や日本代表合宿に頻繁に参加する必要がある。選手雇用の多くの選手は経済面でも、練習時間の面でも会社からの支援を受けている。また、一般雇用の選手でも選手雇用とほぼ同じ条件で勤務している選手、経済的支援はないものの時間的な配慮や、職場仲間の支援がある選手もみられた。一般雇用の場合、海外遠征などは有給休暇や特別休暇を取得し、通常勤務時に人並み以上に働き、職場の理解を得て職場を抜けるような努力をしている選手もいた。

既婚者の場合、スポーツを続けることに対する理解や家族からの精神的な支援やスポーツにお金を使うことへの理解や練習・試合時の移動支援を得ている場合が多い。未婚の場合は父母から同様の支援を受けていることが多い。

## 1.7 何らかの形(例:ロールモデルの存在、指導者、ライバルの存在、パラリンピックなどの大会、目標となる記録や成績など)で競技に対するモチベーションが維持されている

最後の視点(条件)はモチベーションの維持である。スポーツを継続的に実施するためには、そのためのモチベーションが維持されなければならない。今回インタビューをした100名は様々な形でモチベーションを維持していた。インタビュー調査ではスポーツを継続することにおいて重要な人物は誰かを尋ねている。また、スポーツ継続のロールモデルとなる人を挙げる人もいた。さらに、今後の目標などについて尋ねた。これらの結果から、目標となる人物の存在、指導者、目標とする大会、チームメイトの存在を挙げる人が多かった。6番目の視点(条件)と明確に分けることは難しいが、各選手が何らかの支援や目標(大会や記録)を動機づけとしていることが明らかになった。

## 2. 12のスポーツキャリアパターンについて

100人の選手のスポーツキャリアパターンは千差万別であり、誰一人として同じキャリアをたどった人はいない。しかしながら、調査結果を積み重ねる中で、障害の発生時期やスポーツを始める時期などにより、図表1-1に示すとおり、おおよそ12のスポーツキャリアパターンがあることが明らかになった。これらはアンケートによる量的調査ではなかなか明らかにしにくい点であり、選手のスポーツキャリアを時系列的にたどるインタビュー調査だからこそ明らかにできたことだといえる。ここではその12のパターンの概要について説明する。

パラスポーツ選手のキャリアパターンは先天的障害者か後天的障害者かによって大きく二つに分かれる(A1~A6とB1~B6)。そして、それぞれはパラスポーツとしてスポーツを始める前に、スポーツ経験がないスポーツキャリアパターン(A1、A2、B1、B2)と、スポーツ経験のあるスポーツキャリアパターン(A3、A4、A5、A6、B3、B4、B5、B6)によってさらに二つに分けられる。次にパラスポーツとしてスポーツを始める前と同じスポーツをパラスポーツとして始めた人(A3、A4、B3、B4)と、違うスポ

ーツをパラスポーツとして始めた人(A5、A6、B5、B6)の二つに分類される。そして最後に、パラスポーツとして始めたスポーツを現在もやっている人(A1、A3、A5、B1、B3、B5)と、現在は違うスポーツを行っている人(A2、A4、A6、B2、B4、B6)に分けることができる。

もちろん、現在数種目のスポーツを同時に実施している人や、現在もパラスポーツの大会と障害のない人のスポーツ大会の両方に出場している人などこのパターンに綺麗に全て納まるわけではないが、おおよそこの12のスポーツキャリアパターンに分類することができる。

図表 1-1 パラスポーツ選手のスポーツキャリアパターン

先天的 障害者	A1		② パラスポーツを始める		現在	A1
	A2		② パラスポーツを始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A2
	A3	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	A3
	A4	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A4
	A5	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める		現在	A5
	A6	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A6
後天的 障害者	B1		② パラスポーツを始める		現在	B1
	B2		② パラスポーツを始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B2
	B3	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B3
	B4	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B4
	B5	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B5
	B6	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B6

## A1、A2

A1は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツとしてスポーツを始め、現在もその競技を行っている人である。

A2は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツを始め、その後他のスポーツを行うようになり現在に至っている人である。

A1に該当するのは識別番号 4、11、12、28、40、48、49、54、58、59、61、63、65、68、88、91、94の17名である。

このうち、識別番号 11は先天性脛骨形成不全で3歳の時に両膝下を切断した。子どものころから義足を使っており、友達と遊ぶことはできても体育の授業ではそのことがコンプレックスとなっていた。そのため、小学校・中学校・高校の体育はほとんど参加していなかった。子どものころは、自分が義足を使っているということを周囲に伝えておらず、「脚が

悪い」ということだけを伝えており、皆の前で義足を見せることや外すことは絶対にしなかった。義足であることを悟られないためにも体育に参加しないと自分の中で決めていた。父や兄がスポーツに親しんでおり、自分も何かスポーツに携わりたいと思っている一方で、なかなかチャンスがなかった。高校時代に陸上部のマネージャーとなり、スポーツに携わることができてとても嬉しかったと述べている。専門学校入学後、スキー教室に参加することができず、友人たちと一緒にに行けなかったことがとても残念で、「自分も一緒にスキーをしたい」と思うようになった。そのころに知り合いの義肢装具士に相談したところ、チェアスキーを紹介され、取り組むようになり、友人たちとスキーに行くようになった。その後、技術が向上するにつれ、よりチェアスキーが面白くなり、徐々に競技に移行していった。また、友人の紹介でアメリカのチームで練習を行うようになり、現在、現地のアメリカ人コーチに師事している。2001年からスキーを始めて、トリノパラリンピック出場時は仕事と両立しながら競技を行っていたが、その後トップ選手とのタイムが縮まってくる中で、海外で競技に取り組みたい、コーチに専門的な指導を受けたいと考えるようになり、2008年から選手雇用となった。

識別番号 63には先天的な視覚障害がある。高校までスポーツとは無縁だったが、高等部 1 年の終わりごろに、友人の誘いで国立リハビリテーションセンターのゴールボール活動に参加したことがきっかけで競技を始めた。幼児期から小学校低学年までは普通学校に通っていたことから、見えないことで劣等感が強く、目立ちたくないという思いがあり、体育にも消極的でよく見学していた。小学4年生から視覚特別支援学校に転校した。体を動かすというよりは、自分以外にも見えない人がいるということに、すごく救われた感覚があり、見えなくてもこれだけ動けるということで人生に前向きになった。周囲には見えなくてもこれだけ動ける、ということで人生に前向きになった。視覚特別支援学校の寄宿舎で生活していたので、体育館の使用が容易であった。朝食前後での朝練、昼休みも壁に向かって投球などゴールボールの自主練、放課後は部活や国立リハビリテーションセンターで練習、授業以外の全ての空き時間はゴールボールに費やしていた。日本選手権初出場の時から、パワーがあると代表

合宿に声をかけられ、上を目指して世界と戦っていこうと思った。家族が一番のサポーターであり、応援してくれた。何度も手術や、転移と失明の可能性という恐怖の中で育ててくれた両親に感謝している。

なお、視覚障害者の場合、盲学校において7つの条件のうち2、3、4、5が一度に満たされる場合が多々見られた。

識別番号 94 には先天的な聴覚障害がある。1 歳半よりろう学校に通い、ろう学校にいる時は聴覚障害の友達と遊ぶ。地元では遊ぶ人がおらず姉や妹や父と遊んだ。公園に行って遊具や芝生で走ったり、縄跳び、ボール投げ、野球等をして過ごした。幼少時にはシャワーの水がかかるとも苦手なくらい水が嫌いだった。沖縄出身で海が大好きな父親の影響で何度も海を訪れるうちに「泳げるようになりたい」と思うようになり、5 歳のころ近所のスイミングスクールに通い始めた。5 歳の時、地元のスイミングスクールを探した際、3 か所で聴覚障害者は前例がないと断られた。Sスイミングの店長が耳が聞こえない人とダイビングをしたことがあり、「耳の聞こえは関係ないから一緒に頑張りましょう」と言ってくれた。小学部 6 年で初めて出場した日本デフ水泳選手権大会で、デフリンピックの選手に出会い、「大きく鍛えた体がかっこいい」と憧れた。それから「自分も世界を」と夢を描くようになった。

A2に該当するのは識別番号 5、16、44、46、62、66、67、75、78、81、87、89、92、98 の 14 名である。

識別番号 66 には脳性麻痺の障害がある。母親が水泳のインストラクターをしていたこともあり、1 歳半から水泳をやっていた。水の中は浮力もあり、動きやすかった。スイミングは母親が勤めていた場所で、最初は母親と水遊びのようなことから始め、母親がそこを辞めてからは母親の同僚コーチが教えてくれた。一般のスイミングクラブだったので障害のない子どもたちと一緒に参加。泳ぐ時に自分の後に泳ぐ人との距離を空けるなどの配慮をしてくれていた。中学部に上がり、水泳をやめた後に、中学校 1 年の秋から陸上競技を始めた。母親は陸上競技のコーチもしていたので(母親は体育短大を卒業、陸上競技が専門、就職先のスイミングクラブで水泳も教えていた)、地域の小学生から高校生で構成される陸上のクラブチームに入った。地元の総合運動場で活動していた。短距

離(50m)や投てき(ジャベリックスロー)などをしてきた。高校 1 年の時(2016 年)、陸上競技大会開催時に人材発掘事業をやっており、そこで初めて自転車を経験した。この時、県障害者スポーツ協会の方が声をかけてくれて体験することができた。自転車には小学校低学年から後ろが二輪の自転車(いわゆるママチャリ)に乗っていた。これで通学もしていたので自転車なら乗れるかと思った。発掘事業で自転車を経験して 2 週間後、県のサイクルスポーツセンターでの体験会に参加した。ナショナルチームの監督やコーチ、トライシクルの選手が自転車の乗り方から、トレーニング方法まで指導してくれた。現在は、2028 年のロサンゼルスパラリンピックに出場したいと考えている。

識別番号 98 は先天性二分脊椎症で下肢に不自由がある状態で生まれた。5 歳の時に、合併症の影響で視力にも障害を負った。小学校・中学校・高校と肢体不自由の特別支援学校で過ごした。スポーツ歴は水泳(1996 年～2001 年)、パラ陸上(1998 年～2009 年)、トライアスロン(2003 年)、パラ・パワーリフティング(2022 年～)である。水泳は東京都障害者総合スポーツセンターが開催する水泳大会に中学・高校と参加していた。

パラ陸上に関しては車いすマラソンから始めたが、視覚障害の影響で競技に難しさを感じ、徐々に距離の短い種目を選択、最終的には 100 m 走に変更した。視覚障害がある中で肢体不自由のクラスで競技を続け、全国障害者スポーツ大会に加えて、ジャパンパラ競技大会、日本パラ陸上競技選手権大会にも出場した。トライアスロンはテレビ局の企画で 4 か月間取り組んだ。パラ・パワーリフティングは全日本パラ・パワーリフティング選手権大会優勝(2 連覇)、国際大会(ワールドカップ、ワールドパラ・パワーリフティングチャンピオンシップ)に出場している。

### A3、A4

A3、A4 は先天的に障害があるものの、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人であり、A3 は現在も同じスポーツ(パラスポーツ)をしている人で、A4

はその後違うパラスポーツをするようになり現在に至っている人である。

先天的な障害が比較的軽く、一般の中学校や高校などに進学し、そこで部活動などでスポーツを始め障害のない人とともに試合などに出場していたが、ある時点でパラスポーツとして同じ競技の大会にも出場するようになるというのが典型的である。

A3に該当するのは識別番号13、21、38、45、56、72、76、77、82、84、96、99、100の13名である。

このうち識別番号38には先天的な視覚障害(弱視)がある。すべて普通学校に通っていた。2歳ごろから地元のスイミングスクールで水泳を始め、中学校・高校時代は水泳部に所属し、大学入学後にパラ水泳のクラブでパラ水泳に出会い、現在もそのクラブを活動拠点として競技を継続している。体育に関して、小学校時代は周りの子どもたちとの運動能力の差がそれほどなく、球技の時に少し不自由さを感じる程度で同じように取り組むことができたが、中学校・高校と種目が専門的になるにつれて苦勞するようになっていった。水泳は、親の勧めで始めた。週に2回程度通っており、始めた当初は近所の友達と一緒に通うことが楽しかったが、級が上がるにつれて練習強度が上がり「習わされている」という感覚で、「泳ぐことは好きだけどスイミングの練習は嫌い」という思いを持っていた。中学校・高校と部活動で水泳を続けて、大学入学後は競技から離れて、指導に携わりたいと思い、地元のスポーツ施設で知的障害のある子どもたちのスポーツボランティアをしていた。そこで、大学1年生の秋ごろに、視覚障害のある子どもの保護者から、「視覚障害の水泳でパラリンピックを目指したら」と言われ、視覚障害の水泳は全盲クラスしかないと思っていたが、調べたところ弱視のクラスがあること、また、地元には障害者水泳のクラブがあることを知り、自ら問い合わせ入会したことがパラ水泳との出会いであった。パラ水泳を始めた時と同様に、競技を続けるにあたって所属クラブの存在がとても大きなものとなっている。このクラブは全国的に見てもとても規模の大きな障害者チームで、専門のコーチの指導が受けられ、定期的に練習できる環境が整っているため、このクラブがあるから引退せずに水泳を続けられていると思っている。

識別番号76は先天的な肢体不自由である。幼稚園・小学校・中学校・

高校と普通学校に通学、中学校の部活で卓球を始め、高校 2 年まで続けたが、体の不調などが重なり一旦卓球から離れた。一浪後、大学で卓球を再開。大学卒業後 2 年間フリーターで自由に過ごした後、市の職員に採用された。フリーターの時に障害者手帳を取得し、障害者の卓球大会に出場するようになったが、最初の大会で大敗したことに衝撃を受け、のめり込む。現在、練習や試合の多くは障害のない人と一緒に行い、障害者卓球大会にも併せて出場している。

識別番号 96 は先天的に聴覚障害がある。小学 4 年からラグビーを始め、中学校から地域のクラブで本格的にラグビーに取り組んだ。高校ではキャプテンを務め、ラグビーの強豪である大学に進学しトップレベルのラグビーに向き合い、公式戦出場を果たした。大学 4 年間はラグビーに専念し、卒業後にデフラグビーでの活動を再開、2018 年デフラグビー世界大会で日本代表キャプテンを務めた。現在はデフラグビーの普及、強化活動に取り組んでいる。

A4 に該当するのは識別番号 80、85 の 2 名である。このうち、識別番号 80 は先天的な聴覚障害がある。中学校(普通学校)ではサッカー部に入り、高校はハンドボール部に入って活動した。2025 年のデフリンピック東京開催が決定した。当時、日本はまだ一度もハンドボールでデフリンピック出場を果たしていなかった。東京開催を契機に「ハンドボール日本代表チームを結成する」機運が高まった。日本ハンドボール協会の中にデフハンドボール専門委員会が立ち上がった。識別番号 80 は大学の講義で「デフリンピック」や「デフスポーツ」を知った。日本開催のデフリンピックにハンドボールで出場するという目標ができた。その後、デフハンドボールのチーム設立に向けて動き出せる見込みが立ち、デフハンドボールプレーヤーとしての挑戦が始まった。

識別番号 85 には先天的な視覚障害がある。保育園・小学校・中学校・高校と普通学校へ通学した。小学校のころは放課後に野球をしたり、サッカーをしたり、町内のソフトボール大会に出たり、ほかの子どもたちと一緒にやっていた。小学校 5 年生の時、バルセロナオリンピックの古賀稔彦選手を見て柔道をやろうと思った。

中学校ではバレーボール部に入部した。体育館の光の関係でボールが

見にくい時はあった。体育の授業等は特に支障なく行っていた。柔道の町道場には引き続き通っていた。高校には柔道部があったので入部し、黒帯を取得した。高校卒業後視力が著しく低下した。21歳で盲学校に入学した。盲学校で柔道の専門の先生がいて何度も誘われしぶしぶ視覚障害者柔道大会に出た。初めて出た視覚障害者の柔道大会で準優勝したが、決勝で負けて、悔しくてきちんと練習をしようと思えるようになった。2008年にはパラリンピック北京大会に出場した。30～31歳のころ柔道の一線を退き、グランドソフトボールをやっていた盲学校時代の友達に誘われてグランドソフトボールをプレーするようになった。

## A5、A6

A5、A6は先天的に障害があるが、A3、A4と同様に、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツとは別のスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人で、A5は現在も最初に始めたパラスポーツを実施している人、A6はさらにその後違うパラスポーツを実施するようになり現在に至っている人である。なおA6に該当する選手は本調査においてはいなかった。

A5に該当するのは識別番号33、50、51、60、79、86、90の7名である。

このうち識別番号60は先天的に左手の手指が欠損している。5歳からラグビーを始め、器械体操、ボクシング、陸上競技、サッカー、卓球と様々なスポーツを行ってきた。それらは全てラグビーの役に立つということがその理由。大学4年生までラグビーをやっていた。大学に入ってラグビーをするために高校もラグビー部のある体育系大学の付属高校に進学。大学1年のころ、大学の障害者スポーツ専門の先生に声をかけられたのがきっかけで、アルペンスキーを本格的に始めた。高校時代にすでにスキー検定2級を取得していた。そして、大学3年の時、平昌パラリンピックで入賞、北京パラリンピックも複数種目で入賞した。大学院に進学、2023年3月修了。2021年からは選手雇用されている。

識別番号86は先天的な視覚障害。保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校・大学と普通学校に通った。小学校の時、サッカー(3日程度)、ミニ

バスケット(小学校 6 年の時 2~3 か月)をやったほかは、特にスポーツはやっていない。外で遊んだりするのは好きだった。遠近感がわかりにくいこともあり、あまり続かなかった。中学校・高校では、卓球部に入ったが遠近感がわからないことは変わりなかった。大学時代は様々なスポーツを楽しむ「スポーツ同好会」というサークルに所属した。一度就職したが、視力低下により退職し 30 歳で盲学校に通うことになった。盲学校では人数も少ないことからグランドソフトボールや柔道、陸上競技など様々な競技を経験した。盲学校卒業後、盲学校時代の先生に声をかけられグランドソフトボールを始めた。

識別番号 90 は小学校・中学校は難聴学級に在籍し、国語・数学・社会のみ難聴学級で授業を受けていたが、それ以外の科目に関しては普通学級で受講していた。小学校 5 年生からバスケットボールをしていたが、周りの音やチームメイトの音が聞こえず、自分が前に走るとボールの位置がまったく分からず、団体競技の難しさを感じていた。中学校・高校では個人競技をやりたいと考えて軟式テニス部に入部した。中学校 3 年からレギュラーに選ばれて、そこから楽しく活動することができた。ろう学校専攻科入学後、幼なじみから、「できたばかりの障害者バドミントンクラブがあるから一緒にやらないか」と声をかけられ体験した時に魅力を感じた。就職後、現在の障害者バドミントンクラブに入り、20 年以上活動を継続している。

## B1、B2

B1、B2 は後天的に障害を持つようになり、パラスポーツを行うようになるが、障害を持つ前は特にスポーツは実施していなかったパターンである。B1 は最初に始めたパラスポーツを現在も実施している人で、B2 はその後違うスポーツを始め、現在に至っている人である。

B1 に該当するのは識別番号 42、83 の 2 名であった。識別番号 42 は 31 歳で視覚障害が発生している。それまで、スポーツは嫌いというわけではなかったが、特に何もしていなかった。30 歳代半ばころから地元の視覚障害者用図書館でサウンドテーブルテニス(以下、STT)を始めた。2012 年の全国障害者スポーツ大会県大会の STT に初出場し 2 位

となり、その後、同大会に 4 度出場している。現在も競技を続けながら、STT のサークルを主宰している。

識別番号 83 は 10 歳の時の事故により、右上腕欠損となった。体育の授業は小学校・中学校ともにほぼ見学。高校ではマラソンのみ参加したが、「体育はできないもの」と思っており、スポーツとは無縁の生活を送っていた。結婚・子育てが一段落した 44 歳で乗馬を始めた。47 歳から競技としてのパラ馬術の大会に出場し、2016 年日本障がい者乗馬協会(JRAD)の強化選手に選ばれ、2018(平成 30)年度東京アスリート認定選手、パラリンピック出場を目指した。2017 年より選手雇用されている。

B2 に該当するのは識別番号 95 である。識別番号 95 は 15 歳の時に黄斑ジストロフィーによる視覚障害となった。小学校の時に見えにくくなって以降、部活動等にも入っていなかった。大学で視覚障害者柔道選手と出会い 20 歳で柔道を始めた。2016 年にパラリンピック東京大会出場を目指し、東京都パラリンピック選手発掘プログラムを経てローイング選手としてトレーニングを開始、着実に力をつけ、2021 年東京パラリンピック混合舵手つきフォアに出場した。同時にクロスカントリースキー選手として、2021 ジャパンカップ札幌大会、2022 年北京パラリンピックへの出場を果たし、夏・冬両大会に出場するパラリンピアンとして、現在もトレーニングを続けている。

## B3、B4

B3、B4 も後天的な障害者である。障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後に障害発生前と同じスポーツをパラスポーツとして行うようになった人で、B3 は現在も同じスポーツをしている人、B4 はその後、違うスポーツを行うようになり、現在に至っている人である。

B3 に該当するのは識別番号 2、9、18、20、35、36、53、55、71 の 9 名である。このうち識別番号 9 は 21 歳で脊髄損傷を負った。小学校低学年から父親の影響で水泳を始め、高校総体や国体にも出場した経験を持つ。障害発生後、体力回復とリハビリのために水泳を始めた。ちょうどアトランタパラリンピックが行われており、また水泳仲間からも勧めら

れ、シドニーパラリンピックを目指すことになった。現在も父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブで子どもたちに水泳指導をしつつ、自分の練習も行っている。

識別番号 18 は小学校・中学校とバスケットボール部に所属。中学校 2 年時に骨肉腫を発症し、右膝下から切断。高校時代は、女子バスケットボールのマネージャーを務める。部活動を引退した高校 3 年時に、地元の車いすバスケットボールチームに自ら連絡して練習に参加。入会后、大学に進学しながら競技を続ける。車いすバスケットボールのジュニア日本代表に選出され、世界選手権(25 歳以下)に出場した。

識別番号 20 は中学校・高校一貫の進学校の柔道部に所属、中学校 1 年時にキャプテンに任命され、そのまま 6 年間務める。高校卒業とともに柔道から一時的に離れる。浪人 1 年目に右目の緑内障を発症。右目の視力を失う。大学に合格して上京。大学 2 年時に左目の緑内障を発症。友達、家族、大学のサポートも受けながら卒業した。

当時付き合っていた人に、視覚障害者柔道を紹介されて、取り組み始めた。その後、世界選手権、北京パラリンピックに出場。2011 年に、起業する。事業も軌道に乗り、様々な団体・組織の理事をする傍ら、現在は複数の会社の代表取締役社長を務めている。

識別番号 36 は子どものころから家族でよくスキー場に出かけていた。小学校 5 年からスノーボードを始め、大学 2 年で本格的に競技をやりたいと思い、ニュージーランドのキャンプにも参加した。32 歳の時に業務中の事故により右大腿の 2 分の 1 以上欠損となった。事故で足が欠損しているのを見て、自分は義足になると思い、何ができると考えやはり「スノーボード」だと思った。入院中に調べていたら、ソチパラリンピックからスノーボードが種目として採用されることを知り、パラリンピックに出ようと思った。もともとプロスノーボーダーだったことと、義足のスノーボーダーの友達がいたことも影響した。

B4 に該当するのは識別番号 1、8、10、24、31、34、39、97 の 8 名である。このうち、識別番号 10 は 3 歳から 10 歳まで水泳をやっていた。13 歳の時骨肉腫により、右大腿部 2 分の 1 以上を切断した。切断してから学校の体育を含め一切スポーツをしてこなかったことから、自分に自信

が持てるものが欲しいと思い、フィットネスクラブに入会し、経験のあった水泳を自らやるようになった。通い始めたフィットネスクラブにはトライアスロンコースがあったが、当初はここで水泳だけを行っていた。当時、自分は右脚がないためトライアスロンはできないと思っていたが、海外では同じ障害でトライアスロンをやっている人が何人もいることを知り、トライアスロンにかかわるようになった。2012年のロンドンパラリンピックは水泳で出場を目指したが、かなわず、その後トライアスロンに転向した。リオデジャネイロパラリンピックにはトライアスロンで出場し入賞した。

識別番号 31 は小学校のころから運動好き。マラソン大会はいつも 1 位か 2 位。体力測定は常に 1 級だった。中学校は柔道部。顧問(担任)教師の強引な勧誘で柔道部に。3 年でキャプテン。柔道初段。高校ではペン習字クラブへ。スポーツはほとんどせず。高校卒業後、印刷会社に就職した。30 歳の時に視覚障害となった。障害者スポーツに関する情報を一所懸命探し、柔道ができるところを見つけたものの何度も断られた。以前柔道をしていた時の知り合いがその道場で指導していることが偶然分かりその人の仲介でようやく道場に通えるようになった。2000 年シドニーパラリンピック入賞。その後、自転車競技を経て陸上競技を行うようになった。現在は投てき専門の指導者に指導してもらっている。60 歳になったら投てき 5 種目で一般の大会にも出ようと思っている。105 歳までにマスターズで記録を残すことが目標である。

## B5、B6

B5、B6 は後天的な障害者で、障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後は障害発生前とは違うスポーツをするようになった人で現在もそのスポーツを実施している人が B5、その後異なったスポーツを実施するようになり現在に至っている人が B6 である。

B5 の該当者は識別番号 7、14、15、17、22、23、26、27、29、30、32、37、41、64、69、70、73、93 の 18 名である。このうち識別番号 29 が最初にやったスポーツは空手、そして中学校の時はバスケットボール部だった。中学校 3 年生の時に交通事故で右大腿切断になった。切断後、半年くらいで同じ切断の陸上競技選手が会いに来てくれた。車いす

バスケットボールをやろうかと思っていたがこの選手に強く陸上競技を勧められ、陸上競技をすることにした。最初は地元の義足の人の陸上競技クラブに入り、高校 2 年からは高校の陸上競技部に入った。高校 3 年生の時から企業と契約し、プロとして活動。大学 1 年次に 2016 年リオパラリンピックに出場した。陸上は自分の体が「あ、もう無理」と思うまでやりたい。東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそはと思っている。それが終われば、きっとロスこそはと考えていると思うとのことであった。

識別番号 69 は小学校・中学校・高校と普通学校に通う。小学校 4 年の時に網膜色素変性症を発症し、それ以降視力、視野が低下する。体育の授業では球技はボールが自分の視野の外にあるとどう対応していいかわからず、あたふたしてしまう。そういう姿をみんなの前で見せることが精神的にきつかった。小学校 1 年から高校 3 年までは剣道をやっていて、剣道 3 段。高校卒業後、関西の調理師学校に通い調理師免許を取得。その後、中華料理店に就職したが、視覚障害が原因で退職した。退職後すぐに、国立障害者リハビリテーションセンターへ入学し、ゴールボールと出会う。2017 年、国立障害者リハビリテーションセンターを卒業と同時に現在の会社に選手雇用された。東京パラリンピックに出場した。

B6 に該当するのは識別番号 3、6、19、25、43、47、52、57、74 の 9 名である。この内、識別番号 43 は小学校を卒業するまでは野球をやっていた。中学校入学前に骨肉腫で片大腿離断。その後中学校・高校・大学と普通学校に通うが、中学校・高校の体育はほとんどが見学だった。中学校 2 年の時、親が車いすバスケットボールチームを見つけてくれ、通うようになった。その車いすバスケの練習の場に、車いすテニスの関係者が来てくれ、車いすテニスの講習を受けた。しばらく車いすテニスと車いすバスケを並行して行っていた。中学校 3 年のころから個人でできる車いすテニス一本に絞って行うようになった。高校の間は親に送り迎えしてもらっていたこともあり、テニスはほとんどやっていない。高校を卒業し、車の免許を取得し、自分で移動ができるようになってからテニスを再開した。大学 4 年の時、国内トップになり、就職 2 年目にアトランタパラリンピックに出場した。この後のパラリンピックではメダルを獲得してい

る。

識別番号 57 は子どものころから体を動かすことが好きで学校でロードレースや長距離走、水泳、クロスカントリースキーやアルペンスキーなどしていた。小学校3年ごろ、周囲が視力低下に気づいた。小学校6年の2学期から高等部までの盲学校を経て短期大学に進学。在学中の 1994 年、盲学校時代の先生からの誘いで長野パラリンピックを目指してバイアスロンを始めた。長野パラリンピックではバイアスロンでメダルを獲得している。特別養護老人ホームに就職していたが、より練習しやすい環境を求めて企業就職(選手雇用)した。現在は引退し、日本障害者スキー連盟で障害者スキーの普及活動を行っている。

識別番号 74 は中学校は柔道部、高校はラグビー部に入った。高校卒業後は家業を継ぐとともに社会人チームでラグビーを続けた。34 歳の時、バギー(車体が軽量で最低限の構造を持ち、オフロード走行など悪路走破性に優れた小型の乗り物)のレース中の事故で脊髄損傷になった。入院中に会った車いすリース会社の人から誘いを受け、車いすバスケットボールを始めた。同じ年チェアスキーを体験しこれに熱中するようになった。その後 2006 年に車いすカーリングの体験会に参加し、翌年に車いすカーリングのチームを立ち上げた。2014 年には世界選手権に出場した。また、2016 年、2022 年に国内で優勝し世界選手権に出場した。現在車いすカーリングを週に 1~2 回、トレーニングの一環として車いすバスケットボールも行っている。

(第 1 章担当:藤田紀昭)



## 第 2 章

### スポーツに対する関心の有無

スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)

## 1. 傾向

第 1 の視点(条件)は障害のある人がスポーツを始める前提条件といえる。これについては、インタビューした 100 名のうち、7 名(識別番号 16、40、42、63、78、83、92)を除く 93 名がパラスポーツまたはスポーツに関心や興味があった、あるいはスポーツや体を動かすことが好きだった、もしくは嫌いではなかったとみることができる。このことから障害のある人がスポーツを実施するためにはまず、スポーツに関心があることが重要な条件といえる。スポーツに関心がなければ次の視点(条件)である障害者スポーツに関する情報を探そうとしないであろうし、情報もたらされたとしても、スポーツへ気持ちが向くこともないと考えられる。また、後天的障害者で受傷前にスポーツにまったく関心がなかった人やスポーツ嫌いだった人が受傷後、スポーツにすぐに関心を持つことは難しいと考えられるためである。

## 2. スポーツに関心がある人、好きだった人、嫌いではなかった人の事例

まず、スポーツに関心があったり、好きだったり、嫌いではなかったという人の特徴を先天的な障害者と後天的な障害者に分けて見てみる。

### 【先天的障害者 0 歳～5 歳で障害を負った人を含む】

先天的障害者でスポーツに関心があった人に見られるタイプを二つに分けることができる。一つは体を動かすことや運動やスポーツが好きだというタイプ、もう一つはスポーツにそれほど関心があったわけではないが嫌いでもないというタイプである。いずれも、スポーツを始めるにあたってスポーツ実施に対する心理的ハードルが低いことが共通点である。これらに関係する要因としては以下の 3 点があげられる。①スポーツの実施に向けて家族の後押し、支援がある、②普通学校に通っていた人は体育には可能な範囲で参加しており、さらにそこでは体を動かすことや他の

子どもと違う方法で参加することに対するコンプレックスが少ない、あるいはネガティブな体験があってもそれに勝るポジティブな体験がある、③子どものころから体を動かすことが好き

### ① スポーツの実施に向けて家族の後押し、支援がみられる

識別番号 11、12、13、50、51、56、59、61、66、67、77、87、94、99、100 がこれに該当する。先天的な障害があり、家庭生活や学校生活に関して親をはじめ家族が支援していることは当然のことであるが、その中で子どものスポーツの実施に際して有形無形の後押しをしている場合が多々あった。識別番号 11 は子どものころから義足で、そのことがコンプレックスとなり体育の授業にはあまり参加できなかったものの、父や兄がスポーツ好きで、彼らがスポーツをしているのを見て自分も関わりたいと考えていた。識別番号 13 は学校体育のすべてに参加していたが、これは親が学校側と協議して体育への参加を依頼していた。識別番号 50 は兄の影響で体操教室やスイミングに通うようになった。識別番号 51 は姉の影響で小学校 5 年生からハンドボールを行うようになった。識別番号 56 は兄の影響で柔道を始め、識別番号 59 は兄の影響でスイミングスクールに通うようになった。識別番号 60 はスポーツ一家で 2 歳からスキー、5 歳からラグビーを始めた。識別番号 61 は父親のスポーツが好きの影響を受けて卓球を始めた。識別番号 66 は母親がスイミングスクールのインストラクターで 1 歳半からスイミングを始めた。識別番号 67 は生まれて 5 か月目から療育を開始した。母親が療育のプログラムの様子を見てこの子は泳げると判断し、その延長でスイミングに行くようになった。識別番号 77 の父親はスイミングスクールのコーチで 3 歳から父親が勤めるスイミングスクールに通うようになった。識別番号 87 は様々なスポーツに挑戦しているが、常に父親がサポートを行っていた。識別番号 94 は父親が海好きで、一緒に海に行くことがあったことからスイミングに通うようになった。識別番号 99 は姉の後押しを受け、バドミントンを始めた。識別番号 100 は小学校の時、父親の勧めで軟式野球チームに入った。

② 普通学校に通っていた人は、体育や部活には可能な範囲で参加しており、さらにそこでは体を動かすことや他の子どもと異なる方法で参加することに対するコンプレックスが少ない。あるいはネガティブな体験があってもそれに勝るポジティブな体験がある。

まず肢体障害についてみる。識別番号 4、12、13、33、49、51、58、60、61、76、78、84、87 は体に障害があるものの学校体育には参加していた。このうち、識別番号 4、12、13、33、58、61、76、78、84 は脳性麻痺や、骨形成不全、二分脊椎などの障害であり、他の生徒とまったく同じようにはできないが、授業の中でできる部分に参加したり、同じようにはできないが工夫をして参加していた。また他の生徒との体力差が出てきたときには参加できなくなるものが増える場合もあったが(特にチームスポーツにおいて)、その際はそれまでとは違った工夫で参加していたり、特別支援学校に移ることでこれを回避しているケースが見られた。識別番号 49、51、60 は上肢欠損あるいは機能障害や手指欠損で工夫は必要だが体育やスポーツの参加の大きな障害とはなっていなかった。

先天的な視覚障害についてみる。弱視で普通学校に通学していた識別番号 38 は小学校から高校まで普通学校に通った。体育では特に球技系の種目で苦勞した。しかし、これとは別にスイミングスクールに通い、スポーツに関して自分の居場所があったといえる。識別番号 54、62、65 は小学校まで普通学校に通い、中学校以降は特別支援学校に通い、視覚障害に配慮した競技を実施することができている。識別番号 85 は高校まで普通学校に通学しているが、ある程度視力があつたため体育や部活動の球技種目であってもそれほど苦勞なく参加していた。識別番号 86 は大学まで普通学校に通学し、短期間ではあるが、サッカーやミニバスケットにも参加した経験がある。運動会でリレーメンバーに選ばれたとき「障害があるのに何であいつが選ばれるんだ」という友人の言葉を聞いてから運動やスポーツに消極的になったが、中学時代には友人と一緒に卓球部にも所属している。就職後、視力低下が著しくなつてから盲学校に入り、ブラインドソフトボールをするようになった。識別番号 89 と 91 は幼稚部から高等部まで特別支援学校に通学し、体育の授業でゴールボールなど視覚障害者用のスポーツを経験している。

先天的聴覚障害の人についてみる。識別番号 80 は小学校 3 年までろう学校、その後普通学校に転校し、中学校ではサッカー部、高校でハンドボール部に入りプレーした。そののち、デフハンドボールと出会っている。識別番号 81 は幼稚部から特別支援学校に通い、スポーツが大好きでバレーボールや陸上部に所属した。識別番号 88 は学校期にはスポーツには無縁だったが(自分にはスポーツは難しいと思っていた)、障害者水泳部員募集のポスターを偶然見つけ「自分がスポーツをやっているんだ！」と認識でき、水泳を始めた。この場合はスポーツが嫌いではないものの自分には関係のないものと認識していたようである。識別番号 90 は小学校・中学校・高校と普通学校に通いバスケットや軟式テニスに取り組んだ。ろう学校専攻科に入学後にデフバドミントンを行うようになる。識別番号 94 は小学校からろう学校に進み、水泳を始めている。識別番号 96 はラグビーを始めたのちにデフラグビーの存在を知る。そもそもラグビーが好きで、障害のない人とラグビーをしていた。識別番号 99 は幼稚部はろう学校、小学校からは普通学校に通い、そこでバドミントンと出会う。識別番号 100 はろう学校中学部でバレーボールチームに入っている。聴覚障害では、このようにろう学校でデフスポーツに直接出会う場合、普通学校でスポーツに出会い、その後デフスポーツに出会うケースが見いだせた。いずれにしてもスポーツに関心があり、始めていることが分かる。

### ③ 子どものころから体を動かすことが好き

識別番号 4、68、62、81、100 らがこれにあたる。スポーツを始めた経緯について聞いた質問に対して「子どものころから体を動かすのが好きだったと答えている。この資質がその後のスポーツ活動を促進させたことは想像に難くない。

### 【後天的障害者】

次に、後天的障害者の障害を持つ前のスポーツ実施状況(関心の有無)についてみていく。後天的障害者 49 名のうち 46 名(93.9%)は障害が発生する前に学校の部活動や民間や地域のスポーツクラブでスポーツを実施していた。つまり、スポーツに対して何らかの関心があり、障

害発生後行うスポーツと同じかどうかは別として日常的にスポーツを実施していたことになる。このうち 10 人は「最初はどのようにしてスポーツを始めましたか?」という質問に対して、「もともと、運動やスポーツ、体を動かすことが好きだった」という趣旨の回答をしている。今回インタビューした多くの後天的障害者の皆さんは、そもそも運動に親しむ習慣があり、障害が発生したのちもスポーツを続けていることがわかる。

ただし、このうち識別番号 95 は小学校時代、週 1 回程度、サッカーやテニス、スイミングなどに通っていたが、目が見えにくくなったため、中学校では運動部に入らず、その後の体育の授業も積極的には参加しなかったと述べている。その後、大学で同世代の柔道をやっている視覚障害者と出会い、本人も柔道を始めた。障害が原因でスポーツ活動に積極的ではなくなったものの、視覚障害者のためのスポーツに出会ったことでスポーツを再開している。

### 3. スポーツに関心がなかった人、嫌いだった人の事例

#### 【先天的障害者 0 歳～5 歳で障害を負った人を含む】

先天的障害者でスポーツや運動に関心がなかった 5 名についてみる。識別番号 16 は先天的に重い障害(脳性麻痺)があり、小学校(一般学校)において、体育の時間、同級生が勝ち負けにこだわるようになり始めてから、人間不信に陥り、スポーツに関心が持てなくなっている。

識別番号 40 は先天的な視覚障害であり、視覚特別支援学校で柔道に誘われるが、やり投げのように人を投げるイメージしかなく、断り続けていた。中学校 3 年の時にバンド活動の一環として腹筋強化が必要だと感じ、体育の授業で経験していた柔道が役に立つと思い柔道を始めた。視覚障害に起因するスポーツのイメージの乏しさがスポーツに関心を持てなかった背景にあったといえる。

識別番号 63 は先天的な視覚障害であり、高校まではスポーツは無縁の生活を送っていた。小学校低学年までは普通学校に通い視覚障害があることで劣等感が強く、目立ちたくないという思いがあり、体育の授業もよく見学していた。視覚特別支援学校に移ってから「自分以外にも見え

ない人がいる」ということに救われた感覚があり、見えなくてもこれだけ動ける、ということで前向きな気持ちが持てた。その後、高校時代に友達の誘いを受けゴールボールを始めた。

識別番号 78 は先天的な肢体不自由(骨形成不全症)である。小学校・中学校・高校と普通学校に通学していた。学年が進むにつれ、他の生徒と体力差が出始め、体育は別メニューで実施していた。さらに障害特性から骨折しやすく年に 1~2 回は骨折をしており、骨折することが怖くスポーツには関心がなかった。その後大学在学中にビームライフルを知る機会があり、練習をするようになった。障害に起因する骨折を恐れスポーツに関心がなかったものの、障害の影響を受けにくい競技との出会いがスポーツへの関心を呼び起こしたといえる。

識別番号 92 は 5 歳の時に目の病気にかかり、小学校 2 年生で急激に見えにくくなった。小学校から、高校までは普通学校に通ったが、体育は困りごとが多く、特に球技ではボールが当たってメガネが割れるなど怖い思い出しかなく大嫌いだ。しかし、大学で視覚障害者向けのスポーツを体験したことにより、「見えなかったからできなかっただけで、それほど極端に運動神経が悪いわけではなかった」と思えるようになり、それ以降体育がすごく楽しくなった。その後はマラソンや、クライミングにも挑戦した。当時、マラソンで伴走してくれた人が今の夫である。目が見えていたころ、芸人が社交ダンスをやっているのを見て憧れるとともに、やってみたいと思うようになった。結婚後、視覚障害者の社交ダンスがあることを友達から聞き、たまたま居住地に近いところにブラインドダンスのサークルがあり、体験に行った。現在も週 2 回程度レッスンを受けている。

これら 5 人に共通するのはスポーツや体育において何らかの否定的な感情を持っていたという点である。障害のない同級生たちと一緒に配慮なく参加することでケガをしたり、勝ち負けにこだわるあまり、疎外感を持つに至ったり、あるいは視覚障害があることで正しいスポーツの認識を持てなかったことなどである。インクルーシブ教育、インクルーシブ体育、インクルーシブスポーツは共生社会実現において重要な概念ではある。しかし、そこには適切な配慮がなされるという前提条件が不可欠である。

できるだけスポーツ嫌い、体育嫌いを生み出さないよう、適切に「アダプテッド」することで参加者に否定的な感情を持たせないことは非常に重要な視点だといえる。いったんスポーツが嫌いになったり、無関心となるとそうした人たちにスポーツに参加してもらうのは非常に難しいためである。

最後に、スポーツに関心はあったが、体育は見学が多く、好きではなかったという識別番号 5 に触れておく。彼はスポーツには関心があり、父親とキャッチボールをしたり、野球を見に行ったりもしていた。リハビリテーションを兼ねて3歳から6歳までスイミングクラブにも通っていた。学校体育も低学年のうちには他の子どもと一緒に参加していた。しかし、高学年になり、体力差やできることに差が出てきたころから見学が多くなり、運動会も見学したり、運動会当日は休んだりすることもあった。障害が原因で実施できない内容なのに、配慮もなく、成績も悪くつけられ、納得がいかなかった。運動やスポーツに関心があってもやりたいのに、配慮がないために参加する意欲が失せてしまったのではないかと推測される。高校卒業後に体力づくりのために以前やっていた水泳を再開し、その後、陸上競技に取り組むようになった。「学校時代もスポーツは嫌いではなかったがやれなかった」という言葉は悲痛な叫びとして響く。

## 【後天的障害者】

次に、障害発生前にスポーツに関心がなく、日常的なスポーツ活動をしていなかったにもかかわらず、障害発生後スポーツをするようになった2人についてみる。

識別番号 42 はスポーツが嫌いなわけではなかったが、まったくやっていなかった。31歳の時に網膜色素変性症を発生していることが明らかになった。30代半ばころに、視覚障害当事者のサークルの活動で地元の図書館でサウンドテーブルテニスをやるという情報をもらい、参加したのが最初である。この時、パラスポーツ指導員から指導を受けた。その後、交流大会に出場し、好成績を残すことができ、この競技に取り組むようになった。その後は全国障害者スポーツ大会や地区のサウンドテーブルテニス大会に出場している。競技を続ける中でいろいろな人と出会うことに楽しさを感じている。2026年に青森で全国障害者スポーツ大会が予定

されている。青森には行ったことがないので、ぜひ出場したいと考えている。

識別番号 83 は 10 歳の時事故により右上腕欠損となった。その後の体育の授業は小学校・中学校ともほぼ見学だった。高校ではマラソンのみに参加した。スポーツは嫌いではなかったが、「体育は自分にはできないもの」と思っていた。学校を卒業して、就職してからもスポーツには関心がなく、たまに同僚とスキーに行くぐらいだった。旅先で馬に乗ってハイキングをする「外乗」があり、興味があったが、片腕では無理だとあきらめていた。夫から障害者でも馬に乗れるらしいという情報もたらされ、障害者も受け入れてくれる乗馬クラブを見つけた。その後、週 1 回のグループレッスンを受けるようになった。現在では契約社員（選手雇用）となり、週 3 日～4 日のトレーニングを実施している。

#### 4. まとめ

肢体障害、視覚障害、聴覚障害が先天的な人たちに共通することとして、障害の程度とスポーツを実施する場の特徴がスポーツ経験の評価（ポジティブかネガティブか）に影響を与えていることがあげられる。障害の程度が軽く、障害のない子どもと混ざってチームスポーツに参加するのに支障がなければその経験がネガティブな経験にはなりにくく、参加に支障があった場合、ネガティブな経験となるケースがある。そして、障害の進行や周りの子どもたちとの体力差が大きくなることがその原因となっている例が複数見られた。また、障害が重くても適切な配慮があり、周りの子どもたちからもそのことに対する批判等がなければ障害のあることに対するコンプレックスやネガティブな評価になりにくいといえる。逆に適切な配慮がなかったり、他の子どもたちからの批判（心無い言動）などが障害のある子どもにとって、スポーツや体育がネガティブな経験となることが示唆されている。

さらに、各特別支援学校では障害に配慮された体育や部活動が実施されている場合が多く、ネガティブな経験にはなりにくいことが考えられる。このうち、視覚特別支援学校では陸上競技や水泳のような個人競技

は個人で練習に取り組みやすい。ゴールボールやフロアバレーボール・ブラインドサッカー・サウンドテーブルテニスなどは、視覚障害特有の競技であり、多くの視覚障害者は特別支援学校で初めて経験することになる。

聴覚障害の場合には障害のない人のスポーツと大きくルールが異なる競技は少なく、普通学校から特別支援学校への移行、特別支援学校から普通学校への移行、学校卒業後のスポーツ実施にスムーズにつながる可能性が高い。肢体障害は障害の内容や程度が非常に多様であり、一概にまとめることが難しい。多くの場合、学校外でのスポーツの場があることが継続の鍵になっていると考えられる。

後天的障害者で障害発生後もスポーツを続けている多くの人は、障害発生前に日常的にスポーツを楽しむ経験を積んでいた。そうした経験が障害発生後もスポーツに向かう気持ちにさせている可能性がある。また、スポーツにあまり関心がなかった人で障害発生後スポーツを行うようになった人は友達がスポーツに誘ってくれたことがきっかけになったり、障害に合ったスポーツを体験することで自分にもスポーツができるという認識が持て、スポーツ実施につながった人がいた。先天的な障害者と同様に、障害発生後、障害に配慮のない形で障害のない人とスポーツをすることでネガティブな経験をし、スポーツから遠ざかってしまった人もいた。適切な環境で、障害に配慮されたスポーツを実施することでスポーツに対するネガティブな意識を持たずにスポーツを継続的に実施できる可能性が示唆されている。

(第 2 章担当：藤田紀昭)

## 第3章

スポーツキャリアパターンにみる

スポーツ開始時のきっかけと継続

スポーツを始めたきっかけ、及びその後の継続に影響を与えた要因について検討する。

以下、4つの視点で概観した。

- ①情報提供者→パラスポーツに関する情報を提供した人
- ②開始時重要他者→パラスポーツ開始時に重要な役割を果たした人
- ③開始場所→パラスポーツを始めた場所
- ④継続時重要他者→パラスポーツ継続時に重要な役割を果たした人

## 1. 情報提供者

パラスポーツ選手や学校外の仲間、学校関連の指導者、パラスポーツ指導者や競技団体関係者などが情報提供者になっていることが多かった。

### 1.1 年代別

情報提供者を年代別にみると、50～69 歳では、パラスポーツ関係者（パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど）が多かった。40 歳代では、パラスポーツ関係者（パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど）やメディアが多かった。

〈事例〉

①〈識別番号88〉50 歳代女性。聴覚障害（先天的障害）。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツは水泳で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、所属している障害者水泳クラブのメンバーが提供した。

②〈識別番号33〉60 歳代女性。二分脊椎症（先天的障害）。スポーツキャリアパターンは A5。

ソフトボールを障害のない人と一緒にやっていた。その後、パラスポーツとしてパラバドミントンを始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、パラバドミントンのチームメートであり、会社の同僚から入手した。

③〈識別番号15〉50歳代男性。左上肢機能障害。障害発生年齢は10歳代後半。スポーツキャリアパターンはB5。

障害発生前はバスケットボールをしていた。障害発生後、パラ水泳に出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、パラ水泳の指導者から入手した。

20歳代、30歳代では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)や学校関係者(教師や学校仲間など)が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号21〉30歳代男性。右上腕欠損(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA3。

当初は、障害のない人とバドミントンをしていたが、その後、パラバドミントンに転向して、国際大会にも出場した。パラスポーツに関する情報はパラバドミントンの指導者が提供した。

②〈識別番号95〉30歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は10歳代後半。スポーツキャリアパターンはB2。

障害発生前はスポーツを実施していなかった。障害発生後、パラ柔道に出会ったが、その後、パラローイングに転向した。パラスポーツに関する情報は、大学時代からの友人であるパラ柔道選手から入手した。

③〈識別番号89〉30歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA2。

ブラインドサッカーに出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、特別支援学校小学部在籍時の担任教員から入手した。

## 1.2 障害種別

情報提供者を障害種別にみると、脊髄損傷や二分脊椎症、切断や機能障害ではパラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)が多く、視覚障害では学校関係者(教師や学校仲間など)が多かった。

### 〈事例〉

①〈識別番号82〉40 歳代男性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人とカヌーに取り組んでいたが、日本代表を目指すために、パラカヌーに転向した。パラスポーツに関する情報は、当時から交流のあったパラカヌー連盟の人から聞いた。

②〈識別番号1〉50 歳代男性。頸髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発生前は水泳をやっていた。障害発生後、ツインバスケットボールを始め、現在はパラ水泳に取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に通っていたリハビリテーションセンターの指導員から聞いた。

③〈識別番号91〉30 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ陸上で、その後も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校陸上部の先輩が提供した。

④〈識別番号34〉40 歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は、10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発生前はバスケットボール、バレーボール、柔道をやっていた。障害発生後、パラ柔道に出会った。現在はパラ柔道に加えて、柔術やグラップリングもしている。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校(盲学校)で入手した。

### 1.3 障害発生年齢別

情報提供者を障害発生年齢別にみると、0～5 歳では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)や学校関係者(教師や学校仲間など)、家族・親族が多かった。6～20 歳では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)やメディアが多かった。21 歳以上では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)が多かった。

#### 〈事例〉

①〈識別番号40〉30 歳代女性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツがパラ柔道で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、弟から聞いた。

②〈識別番号66〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳だった。現在は自転車競技に取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は母親が提供した。

③〈識別番号46〉20 歳代女性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツは車いすバスケットボールだったが、現在はボッチャに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校で聞いた。

④〈識別番号36〉40 歳代男性。右大腿半分が欠損。障害発生年齢は 32 歳。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前はスキーやスノーボードをしていた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に出会った義肢装具士が提供した。

⑤〈識別番号30〉30 歳代男性。片大腿切断。障害発生年齢は 21 歳。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はサッカーをしていた。障害発生後にパラ陸上に取り組んでいたが、現在はパラスノーボードに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に会った義肢装具士や切断パラリンピアン、通っていたリハビリテーションセンターから入手した。

⑥〈識別番号19〉60 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 23 歳。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前は野球をしていた。障害発生後、車いすバスケットボールに出会ったが、その後、車いすテニスに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に通っていたリハビリテーションセンターの理学療法士から聞いた。

## 2. 開始時重要他者

パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者、親・兄弟・祖父母、学校関連の指導者が開始時の重要他者になっていることが多かった。

### 2.1 年代別

開始時の重要他者を年代別にみると、20 歳代・30 歳代では、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者が多かった。多くの年代で、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。20 歳代では親・兄弟・祖父母、30 歳代では学校関連指導者が特に多かった。

〈事例〉

①〈識別番号4〉20 歳代男性。骨形成不全(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ卓球で現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、母親の友人であるパラ卓球関係者から入手した。パラスポーツを開始する際の重要他者は、母親に加えて、母親の友人であるパラ卓球関係者だった。

②〈識別番号68〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、都道府県パラスポーツ協会関係者から聞いた。パラスポーツを開始する際の重要他者は母親だった。

③<識別番号75>20 歳代女性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはチェアスキーだったが、現在は車いすカーリングに転向した。パラスポーツに関する情報は、当時のチェアスキーの指導者から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述のチェアスキー指導者と両親だった。

④<識別番号40>30 歳代女性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ柔道で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は弟が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、当時通っていた特別支援学校の体育教員と柔道部顧問だった。

⑤<識別番号81>30 歳代男性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはデフバレーボールで、現在は、デフ陸上とデフサーフィンに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時の特別支援学校高等部の教員が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者も、その教員である。

⑥<識別番号27>30 歳代男性。片下肢切断。障害発生年齢は 10 歳代中盤。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はサッカーをやっていた。障害発生後に、パラ陸上を始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害発生時に知り合った義肢装具士が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の義肢装具士と、当時通っていた高校(普通校)の体育教員だった。

## 2.2 障害種別

開始時の重要他者を障害種別にみると、脊髄損傷・頸髄損傷、二分脊椎などでは、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。切断や機能障害では、親・兄弟・祖父母、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関

係者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、義肢装具士や医師・看護師が多かった。脳性麻痺では、親・兄弟・祖父母が多かった。視覚障害は、学校関連の指導者やパラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者が多かった。

#### 〈事例〉

①〈識別番号33〉60 歳代女性。二分脊椎症(先天性障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

ソフトボールを障害のない人と一緒にやっていた。その後、パラスポーツとしてパラバドミントンを始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、パラバドミントンのチームメートであり、会社の同僚が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者も前述のチームメートと、当時通っていた地域のバドミントンクラブのコーチだった。

②〈識別番号50〉30 歳代女性。多発性関節拘縮症(先天性障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

障害のない人と水泳をしていたが、途中からパラ水泳に転向、現在はパラバドミントンに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は障害者スポーツセンターから入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、兄と当時診察してくれていた医師だった。

③〈識別番号26〉40 歳代男性。片下肢切断。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はハンドボールをしていた。障害発生後、パラ陸上に出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時診察してくれていた医師と、義足の調整をしてくれていた義肢装具士だった。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の医師と、当時担当してくれていた看護師、義肢装具士だった。

④〈識別番号67〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天性障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、その後、ボッチャに転向した。パラスポーツに関する情報は、療育機関の指導者が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、母親と前述の療育機関の指導者、スイミングスクールの指導者だった。

⑤〈識別番号91〉30 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツは、パラ陸上で、その後も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校陸上部の先輩が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の先輩と、当時通っていた特別支援学校(小学部)の担任だった。

⑥〈識別番号47〉30 歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前には野球、バレーボール、陸上を行っていた。障害発生後は、パラ陸上とグランドソフトボールに取り組み、現在は、ゴールボールに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校の先輩から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、当時通っていた特別支援学校の指導者だった。

## 2.3 障害発生年齢別

開始時の重要他者を障害発生年齢別にみると、0～5 歳では、親・兄弟・祖父母、学校関連の指導者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者が多かった。6～20 歳では、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者、学校関連の指導者、親・兄弟・祖父母が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号66〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、その後、自転車競技に転向した。パラスポーツに関する情報は母親が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者も母親だった。

②〈識別番号100〉30 歳代男性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人と軟式野球をしていたが、途中からデフバレーボールに転向した。現在は、デフビーチバレーボールに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校(中学部)の

担任教員と、デフバレーボールの日本代表監督だった。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の担任教員だった。

③〈識別番号12〉40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラアーチェリーで、現在もパラアーチェリーを継続している。パラスポーツに関する情報は、当時放送していたテレビ番組から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、パラアーチェリー選手と、療育センターのセンター長だった。

④〈識別番号83〉60 歳代女性。右上腕欠損。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B1。

障害発生前はスポーツをやっていなかった。障害発生後、40 歳代前半に初めて取り組んだパラスポーツがパラ馬術で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は夫が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の夫と、海外のパラ馬術選手だった。

⑤〈識別番号53〉30 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前は柔道をしており、障害発生後にパラ柔道に転向し、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、ゴールボールの指導者が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述のゴールボール指導者と、障害発生前から通っていた町の柔道場の指導者だった。

⑥〈識別番号39〉30 歳代女性。左下肢機能障害。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発症前はバレーボールをしていた。障害発生後、パラバドミントンに出会い取り組んでいた。現在は、シッティングバレーボールに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は広報誌から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、障害者スポーツセンターの指導員と母親だった。

### 3. 開始場所

学校スポーツ施設、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンター、スイミングクラブや道場などの民間施設、一般のスポーツ施設が開始場所になっていることが多かった。

#### 3.1 年代別

開始場所を年代別にみると、20 歳代はスイミングクラブや道場などの民間施設、30 歳代は学校スポーツ施設、40 歳代は一般のスポーツ施設、50～60 歳代では、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンター、スイミングクラブや道場などの民間施設が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号94〉20 歳代女性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、現在もパラ水泳を継続している。パラスポーツに関する情報は、母が提供した。パラスポーツを開始した場所はスイミングクラブ、パラスポーツを始める際の重要他者も当時通っていたスイミングクラブ関係者と母であった。

②〈識別番号55〉20 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前は水泳をしていた。障害発生後、パラ水泳に取り組み始め、現在もパラ水泳をしている。パラスポーツに関する情報は、当時同じ高校の水泳部に在籍していた上肢欠損の選手が提供した。パラスポーツの開始場所はスイミングクラブ、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の上肢欠損の選手と妹だった。

③〈識別番号56〉30 歳代女性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人と柔道をしていたが、その後、パラ柔道に転向、現在もパラ柔道を継続している。パラスポーツに関する情報は、大学時代の柔道部の先輩が提供した。パラスポーツの開始場所も大学の柔道場、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の先輩だった。

④〈識別番号17〉30 歳代男性。下肢切断・機能障害。障害発生年齢は10 歳代後半。スポーツキャリアパターンはB5。

障害発生前は野球をしていた。障害発生後、車いすバスケットボールに出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、インターネットで入手した。パラスポーツを開始した場所は特別支援学校の体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、車いすバスケットボールチームのメンバーだった。

⑤〈識別番号44〉40 歳代女性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA2。

初めて出会ったパラスポーツは車いすテニスで、現在はパラダイビングとパラ水泳に取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は車いす利用者が提供した。パラスポーツを開始した場所は公共の体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の車いす利用者だった。

⑥〈識別番号24〉40 歳代男性。片大腿切断。障害発生年齢は10 歳代後半。スポーツキャリアパターンはB4。

障害発生前はバレーボールとスノーボードに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組んでいたが、その後、パラ陸上にも取り組むようになった。パラスポーツに関する情報は、雑誌や理学療法士、教員、義肢装具士から入手した。パラスポーツを開始した場所は、パラスノーボードはスキー場、パラ陸上は公共の陸上競技場、パラスポーツを始める際の重要他者は、理学療法士と義肢装具士だった。

⑦〈識別番号33〉60 歳代女性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA5。

当初は、障害のない人とソフトボールをしていたが、その後、パラバドミントンに取り組むようになり、現在もパラバドミントンを継続している。パラスポーツに関する情報は、勤務先の同僚でもあるパラバドミントン選手が提供した。パラスポーツを開始した場所は障害者スポーツセンター、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述のパラバドミントン選手と地域のバドミントンクラブのコーチだった。

⑧〈識別番号43〉50 歳代男性。片大腿離断。障害発生年齢は10 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB6。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、車いすバスケットボールを始め、その後、車いすテニスに転向、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は両親が提供した。パラスポーツを開始した場所は福祉体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、両親と車いすバスケットボールチームのメンバーだった。

## 3.2 障害種別

開始場所を障害種別にみると、脊髄損傷・頸髄損傷・二分脊椎などでは、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターが多かった。切断や機能障害では、一般のスポーツ施設、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンター、スイミングクラブや道場などの民間施設が多かった。脳性麻痺ではスイミングクラブや道場などの民間施設が多く、視覚障害では、学校スポーツ施設、スイミングクラブや道場などの民間施設が多かった。

### 〈事例〉

①〈識別番号12〉40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラアーチェリーで、現在も継続している。パラスポーツに関する情報はテレビ番組から入手した。パラスポーツを開始した場所は障害者スポーツセンター、パラスポーツを始める際の重要他者は、パラアーチェリーの選手や療育センターの職員だった。

②〈識別番号19〉60 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、車いすバスケットボールに出会い、その後、車いすテニスに転向し、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、入院時のリハビリテーションセンターの理学療法士が提供した。パラスポーツを開始した場所はリハビリテーション病院、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の理学療法士、障害者スポーツ関係者だった。

③〈識別番号60〉20 歳代女性。左手指欠損(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

当初は、障害のない人とラグビーに取り組んでいたが、その後、パラスキーに転向、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害者スポーツを専門とする大学教授が提供した。パラスポーツを開始した場所は海外のスキー場、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の大学教授だった。

④〈識別番号37〉40 歳代男性。右上腕欠損。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はバレーボールに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害発生前に勤めていたアルバイト先の社長とその弟が提供した。パラスポーツを開始した場所はスキー場、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述社長とその弟、海外のスノーボード選手だった。

⑤〈識別番号68〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、都道府県パラスポーツ協会関係者が提供した。パラスポーツの開始場所はスイミングスクール、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の都道府県パラスポーツ協会関係者と母親だった。

⑥〈識別番号79〉50 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

当初は、障害のない人とゴルフをしていたが、その後、パラ射撃に転向し、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は特に入手していなかった。パラスポーツの開始場所はゴルフ練習場、パラスポーツを始める際の重要他者は、ゴルフを一緒に行う従妹だった。

⑦〈識別番号86〉40 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

当初は、障害のない人と卓球をしていたが、その後、グランドソフトボールに転向、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時在籍していた特別支援学校の担任教員が提供した。パラスポーツの開始場所は特別支援学校のグラウンド、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の担任教員だった。

⑧〈識別番号52〉20 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前はアイスホッケーや陸上競技に取り組んでいた。障害発生後、ゴールボールに出会い、現在もゴールボールを継続している。パラスポーツに関する情報は、ゴールボールの男子日本代表監督が提供した。パラスポーツの開始場所は、特別支援学校体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の男子日本代表監督と女子日本代表監督だった。

## 4. 継続時重要他者

パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者、配偶者・パートナー・子ども、親・兄弟・祖父母、職場(雇用先)関係者、学校関連の指導者、障害のない友人や障害のないアスリートが継続時の重要他者になっていることが多かった。

### 4.1 年代別

継続時の重要他者を年代別にみると、20 歳代では親・兄弟・祖父母、パラスポーツ指導者や競技団体関係者が多かった。30 歳代では職場(雇用先)関係者、親・兄弟・祖父母、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。40 歳代では障害のない友人や障害のないアスリート、配偶者・パートナー・子ども、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者が多かった。50～60 歳代では、配偶者・パートナー・子どもが多かった。

〈事例〉

①〈識別番号61〉20 歳代男性。上下肢機能障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ卓球で、その後もパラ卓球を継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はパラ卓球の日本代表選手、パラスポーツ継続時の重要他者は両親だった。

②〈識別番号77〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人と水泳に取り組んでいたが、その後、パラ水泳に転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は、スイミングスクールコーチでもある父親、パラスポーツを継続する際の重要他者は、父親と水泳部のメンバーだった。

③〈識別番号55〉20 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前は水泳に取り組んでおり、障害発生後はパラ水泳に取り組み、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は同じ高校水泳部にいた上肢欠損選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は妹だった。

④〈識別番号96〉30 歳代男性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人とラグビーをやっていたが、その後、デフラグビーに転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はデフラグビーの発起人、パラスポーツを継続する際の重要他者は雇用先だった。

⑤〈識別番号64〉30 歳代女性。頸髄損傷。障害発生年齢は 10 歳代半ば。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は柔道をやっていた。障害発生後は車いすラグビーに出会い、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は車いすラグビーのチームメート、パラスポーツを継続する際の重要他者は雇用先だった。

⑥〈識別番号28〉40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツは車いすバスケットボールで、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は母親、パラスポーツを継続する際の重要他者は競技が異なるがパラクライミング選手や車いすバスケットボールの健常の選手だった。

⑦<識別番号24>40 歳代男性。片大腿切断。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は、スノーボードに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は理学療法士、パラスポーツを継続する際の重要他者は健常の選手や教員だった。

⑧<識別番号12>40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラアーチェリーで現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はパラアーチェリー選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は地元のアーチェリークラブの関係者や妻だった。

⑨<識別番号7>50 歳代男性。片下肢機能障害。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、パラアーチェリーに出会い、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は会社の同僚、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族やアーチェリークラブの仲間だった。

## 4.2 障害種別

継続時の重要他者を障害種別にみると、脊髄損傷・頸髄損傷、二分脊椎などでは、配偶者・パートナー・子ども、障害のない友人や障害のないアスリートが多かった。切断や機能障害では、職場(雇用先)関係者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、配偶者・パートナー・子ども、学校関連の指導者が多かった。脳性麻痺では親・兄弟・祖父母が多く、視覚障害では学校関連の指導者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者が多かった。

<事例>

①<識別番号82>40 歳代男性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人とカヌーに取り組んでいたが、その後、パラカヌーに転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はパラカヌー連盟の知人、パラスポーツを継続する際の重要他者は妻と兄だった。

②〈識別番号3〉60 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前はサッカーに取り組んでいた。障害発生後に車いすバスケットボールに取り組み、その後、パラアイスホッケーに転向した。パラスポーツを始める際の重要他者は療養所関係者、パラスポーツを継続する際の重要他者は妻、チームメート、指導者だった。

③〈識別番号48〉20 歳代男性。筋ジストロフィー症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはボッチャで、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は当事者団体の先輩と家族、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族、職場、指導者だった。

④〈識別番号10〉30 歳代女性。片大腿欠損。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発生前は水泳に取り組んでいた。障害発生後、パラ水泳に取り組んでいたが、その後、パラトライアスロンに転向した。パラスポーツを始める際の重要他者はパラ水泳の指導者、パラスポーツを継続する際の重要他者は職場、ライバル選手、トライアスロン仲間だった。

⑤〈識別番号16〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツは車いすバスケットボールで、その後、パラ陸上に転向した。パラスポーツを始める際の重要他者は車いすバスケットボールの選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は特別支援学校の陸上部監督と両親だった。

⑥〈識別番号72〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

初めて出会ったスポーツは卓球、その後、パラ卓球に転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は友人と祖父、パラスポーツを継続する際の重要他者はライバル、両親、指導者だった。

⑦〈識別番号85〉40 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA4。

初めて出会ったスポーツは柔道で、その後、パラ柔道に転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は特別支援学校の柔道指導者、パラスポーツを継続する際の重要他者は前述の柔道指導者、町道場の指導者、練習仲間だった。

⑧〈識別番号47〉30 歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB6。

障害発生前は、野球、バレーボール、陸上などに取り組んだ。障害発生後は、陸上、グランドソフトボールに取り組み、その後、ゴールボールに転向した。パラスポーツを始める際の重要他者は特別支援学校の関係者、パラスポーツを継続する際の重要他者は特別支援学校のゴールボール部顧問、職場の仲間、看護師、行政のスポーツ担当者だった。

### 4.3 障害発生年齢別

継続時の重要他者を障害発生年齢別にみると、0～5 歳では、親・兄弟・祖父母、パラスポーツ指導者や競技団体関係者、学校関連の指導者、障害のない友人や障害のないアスリート、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。6～20 歳では、職場(雇用先)関係者、学校関連の指導者、障害のない友人や障害のないアスリート、が多かった。21 歳以上では配偶者・パートナー・子ども、職場(雇用先)関係者が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号4〉20 歳代男性。骨形成不全(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ卓球で、その後も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は母親とパラ卓球関係者、パラスポーツを継続する際の重要他者は亡くなった弟、中学校の卓球指導者、パラ卓球指導者だった。

②<識別番号83>60 歳代女性。右上腕欠損。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ馬術で、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は夫と海外のパラ馬術選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族、職場関係者、乗馬クラブの仲間だった。

③<識別番号9>40 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB3。

障害発生前は水泳に取り組んでいた。障害発生後、パラ水泳に取り組み、現在もパラ水泳を継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は水泳仲間、メディア、理学療法士、作業療法士、パラスポーツを継続する際の重要他者は水泳仲間、家族だった。

④<識別番号7>50 歳代前半。片下肢機能障害。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、パラアーチェリーに取り組み、現在もパラアーチェリーを継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は会社の同僚、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族、アーチェリークラブの仲間だった。

⑤<識別番号35>40 歳代男性。右足腓骨神経麻痺。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前はスノーボードに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み、現在もパラスノーボードを継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はおらず、パラスポーツを継続する際の重要他者は職場、家族、ライバル選手だった。

## 5. クロス集計

第 1 章第 2 節では、スポーツキャリアパターン(以下、SCP)を下記のとおり、12パターンにまとめている。A1～6を先天的障害、B1～B6を後天的障害としている。

### 【A1、A2】

A1 は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツとしてスポーツを始め、現在もその競技を行っている人である。A2 は先天的障害者で、いずれかの時点でパラスポーツを始め、その後ほかのスポーツを行うようになり現在に至っている人である。

### 【A3、A4】

A3、A4 は先天的障害があるものの、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人であり、A3 は現在も同じスポーツ(パラスポーツ)をしている人で、A4 はその後違うパラスポーツをするようになり現在に至っている人である。

### 【A5、A6】

A5、A6 は先天的障害があるが、A3、A4 と同様に、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツとは別のスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人で、A5 は現在も最初に始めたパラスポーツを実施している人、A6 はその後違うパラスポーツを実施するようになり現在に至っている人である。

### 【B1、B2】

B1、B2 は後天的に障害を持つようになり、パラスポーツを行うようになるが、障害を持つ前は特にスポーツは実施していなかったパターンである。B1 は最初に始めたパラスポーツを現在も実施している人で、B2 はその後違うスポーツを始め、現在に至っている人である。

### 【B3、B4】

B3、B4 も後天的障害者である。障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後に障害発生前と同じスポーツをパラスポーツとして行うようになった人で、B3 は現在も同じスポーツをしている人、B4 はその後、違うスポーツを行うようになり、現在に至っている人である。

ある。

【B5、B6】

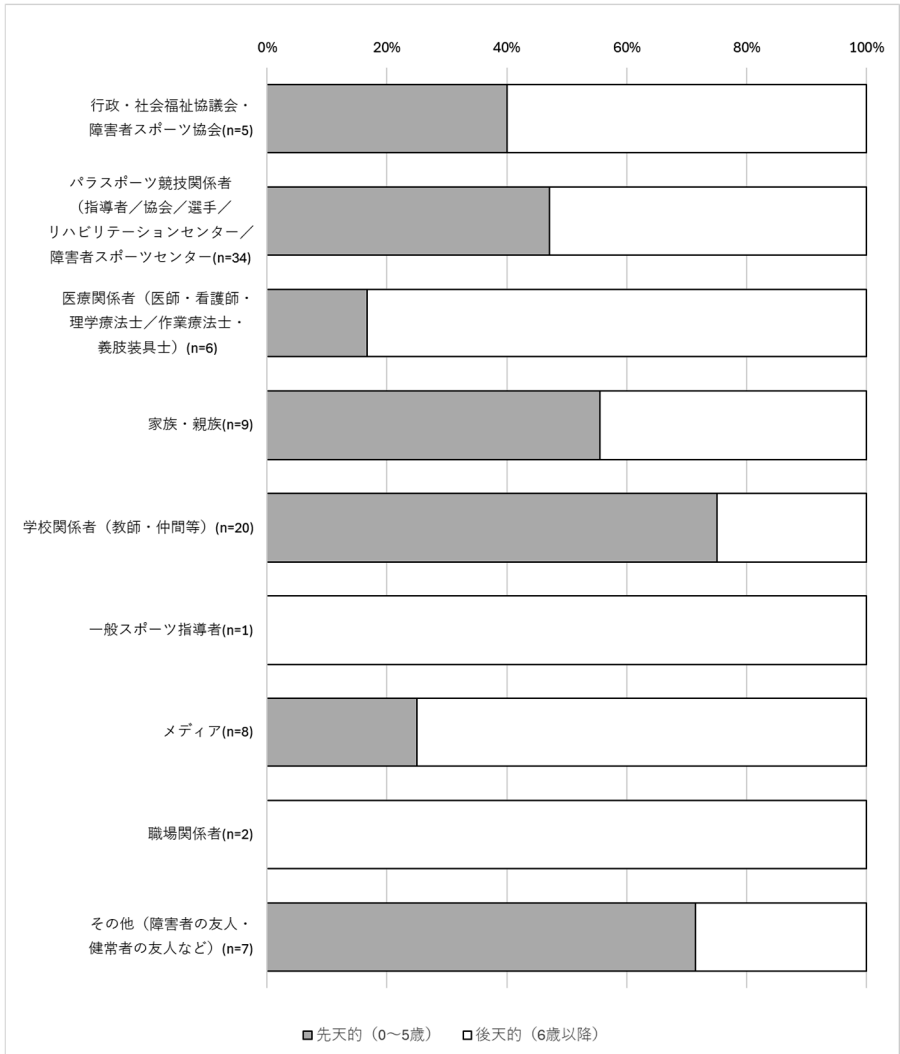
B5、B6 は後天的障害者で、障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後は障害発生前とは違うスポーツをするようになった人で現在もそのスポーツを実施している人が B5、その後異なったスポーツを実施するようになり現在に至っている人が B6 である。

ここでは、先天的障害と後天的障害の二群にわけ、パラスポーツに関する情報提供者、パラスポーツの開始場所、パラスポーツを始める際の重要他者、パラスポーツを継続する際の重要他者についてクロス集計を行った。

## 5.1 先天的障害・後天的障害別にみるパラスポーツに関する情報提供者

パラスポーツに関する情報提供者を先天的障害・後天的障害別にみると、先天的障害では学校関係者(教師や仲間等)が 75.0%と最も多く、友人(障害の有無を問わない)(71.4%)、家族・親族(55.6%)が続く。後天的障害では医療関係者(医師・看護師・理学療法士／作業療法士・義肢装具士)が 83.3%と最も多く、メディアの 75.0%、行政・社会福祉協議会・障害者スポーツ協会の 60.0%が続く。パラスポーツ競技関係者(指導者・協会・選手・リハビリテーションセンター・障害者スポーツセンター)、家族・親族は、先天的障害、後天的障害で大きな違いはみられなかった。先天的障害では、学校関係者や家族、友人、後天的障害では医療・リハビリテーション関係者が情報提供に関しては大きな役割を果たしていることが分かった。サンプリングをしていないこと及びサンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表 3-1)。

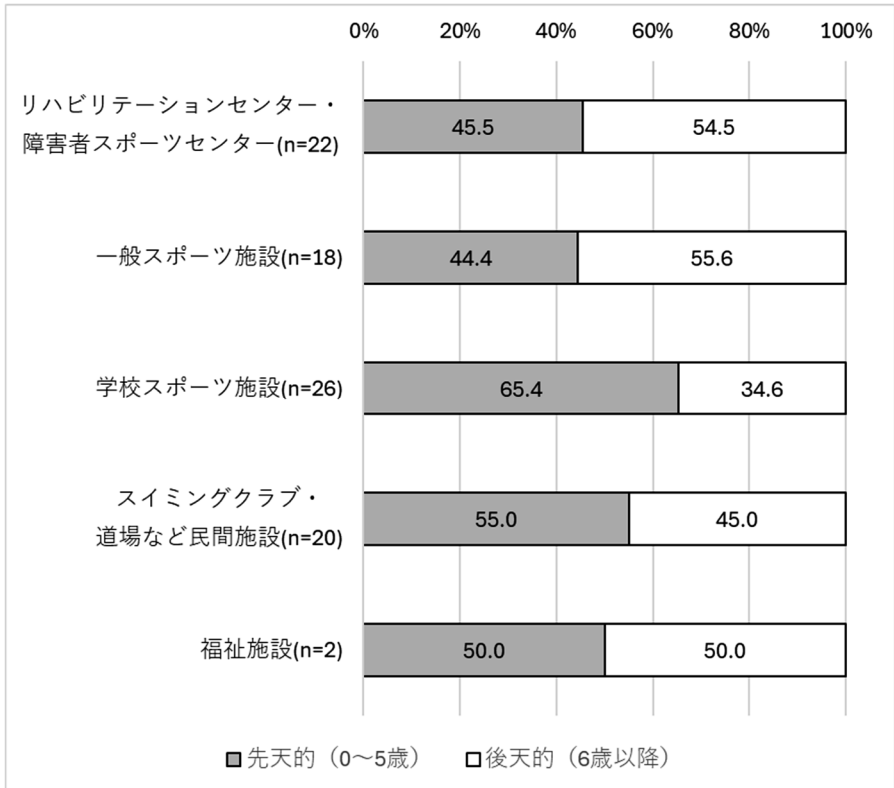
図表 3-1 先天的障害・後天的障害別にみる  
パラスポーツに関する情報提供者



## 5.2 先天性障害・後天的障害別にみる別にみるパラスポーツの開始場所

パラスポーツの開始場所を先天性障害・後天的障害別にみると、先天性障害では学校スポーツ施設が65.4%と最も多かった。リハビリテーションセンター・障害者スポーツセンター、一般スポーツ施設、スイミングクラブ・道場などの民間施設、福祉施設では、先天性障害と後天的障害で大きな違いはみられなかった。サンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表3-2)。

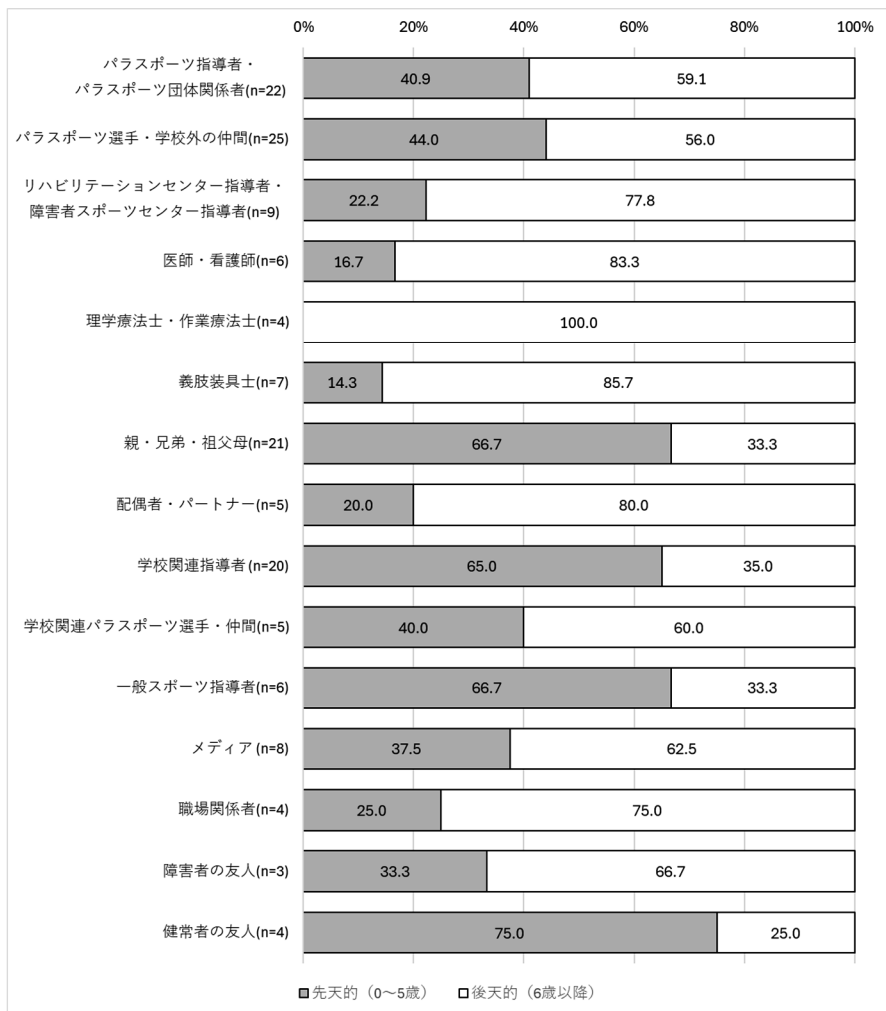
図表3-2 先天性障害・後天的障害別にみるパラスポーツの開始場所



### 5.3 先天性障害・後天的障害別にみるパラスポーツを開始する際の重要他者

パラスポーツを開始する際の重要他者を先天性障害・後天的障害別にみると、先天性障害では健常者の友人が 75.0%と最も多く、親・兄弟・祖父母(66.7%)、一般スポーツ指導者(66.7%)、学校関連指導者(65.0%)が続く。後天的障害では理学療法士・作業療法士が 100%と最も多く、義肢装具士(85.7%)、医師・看護師(83.3%)、リハビリテーションセンター指導者・障害者スポーツセンター指導者(77.8%)が続く。後天的障害では、医療・リハビリテーション関係者が大きな役割を果たしていることが明らかになった。サンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表 3-3)。

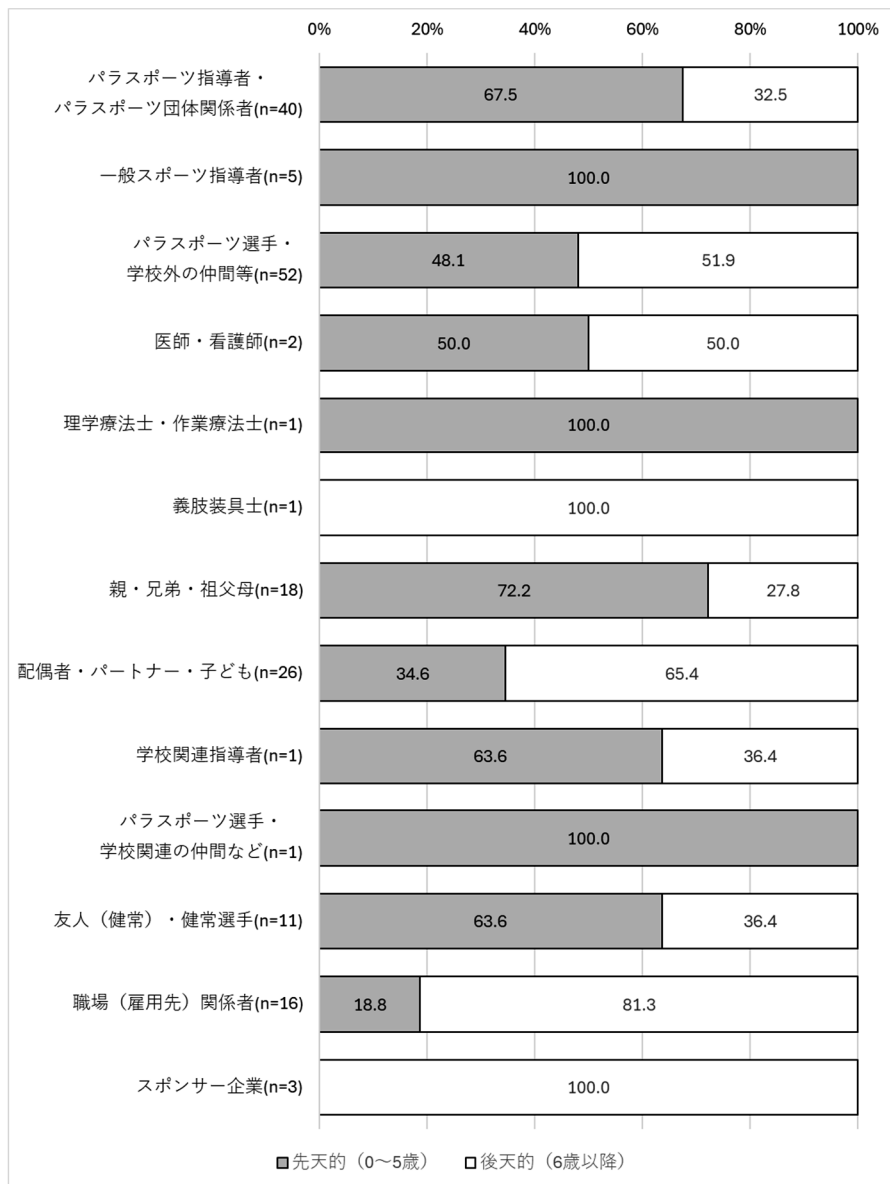
図表 3-3 先天的障害・後天的障害別にみる  
パラスポーツを開始する際の重要他者



#### 5.4 先天的障害・後天的障害別にみるパラスポーツを継続する際の重要他者

パラスポーツを継続する際の重要他者について、サンプル数1を除外したうえで先天的障害・後天的障害別にみると、先天的障害では親・兄弟・祖父母が 72.2%と最も多く、パラスポーツ指導者・パラスポーツ団体関係者(67.5%)、障害のない友人や選手(63.6%)が続く。後天的障害ではスポンサー企業が 100.0%と最も多く、ついで職場(雇用先)関係者(81.3%)、配偶者・パートナー・子ども(65.4%)が続く。後天的障害では、スポンサー企業、雇用先が継続する際の大きな要因になっていた。サンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表3-4)。

図表 3-4 先天的障害・後天的障害別にみる  
パラスポーツを継続する際の重要他者



## 6. まとめと考察

パラスポーツに関する情報提供者は、20～30 歳代ではパラスポーツ関係者や学校関係者、50～60 歳代ではパラスポーツ指導者協議会、パラスポーツ協会、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターが多く、年代によって傾向が異なった。2011年のスポーツ基本法制定、2013 年の東京 2020 パラリンピック大会の開催決定を皮切りに、障害者のスポーツ環境はここ 15 年で大きく変化した。パラスポーツに関する情報提供は、これまで障害者スポーツ振興の中心として大きな役割を果たしていたのはパラスポーツ協会、パラスポーツ指導者協議会、障害者スポーツセンターやリハビリテーションセンターなどに限られていたが、障害者のスポーツ環境が変わっていく中で、様々な団体・組織が情報を提供するようになった。そうした背景も年代で傾向が異なっていた要因と推察できる。障害種別でみると、脊髄損傷や二分脊椎症、切断や機能障害などは、パラスポーツ協会、パラスポーツ指導者協議会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなどのパラスポーツ関係者が多く、これまで専門的知見を蓄積してきた障害者スポーツに専門性を有する団体・組織が、肢体不自由をはじめとした身体障害では大きな役割を果たしていたことが分かる。視覚障害では、教員や学校仲間などの学校関係者が情報提供者になっていた。視覚障害者のスポーツ振興においては、特別支援学校が大きな役割を果たしていると推察できる。先天的障害についても学校関係者がパラスポーツに関する情報提供者であることが多く、視覚障害同様、特別支援学校での情報提供が大きな役割を担っていたと考えられる。

パラスポーツを始める際の重要他者はパラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。年代別でみると、20～30 歳代ではパラスポーツ指導者やパラスポーツ団体が多く、加えて 20 歳代は親・兄弟・祖父母、30 歳代は学校関係者が、特に多かった。視覚障害は学校関係者、先天的障害では学校関係者や家族が、重要他者になっていた。前述したとおり、ここ 15 年で障害者を取り巻くスポーツ環境は大きく変わり、障害当事者に限らず、障害のない人、特に家族や学校関係者の理解が深まった。多くの

関係者がパラスポーツに触れる機会が増えたことにより、障害当事者にとっては、スポーツに接する機会の幅が広がったと考えられる。

パラスポーツの開始場所では、20 歳代はスイミングクラブや道場などの民間施設、30 歳代は学校スポーツ施設、40～60 歳代はリハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターだった。障害発症時期が異なるので、年代別ですべての傾向を推し量るのは難しいが、20 歳代で民間スポーツ施設がパラスポーツの開始場所になっているのは、ここ 15 年の社会的変化が影響していると考えられる。2024 年施行の改正障害者差別解消法では、これまで努力義務とされていた民間事業者による障害のある人への「合理的な配慮」の提供が国や地方自治体同様、法的義務とされた。民間施設における障害者の受け入れ状況が、徐々に変化している兆しと捉えることもできる。障害種別でみると、脊髄損傷や二分脊椎症、切断や機能障害はリハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターが多く、パラスポーツに関する情報提供者と密接に関わっていることがわかる。同様に、視覚障害では学校スポーツ施設が開始場所になっており、パラスポーツに関する情報提供やパラスポーツを始める際の重要他者とも密接にかかわっていることが明らかになった。

パラスポーツを継続する際の重要他者は、20～30 歳代では親・兄弟・祖父母の家族が多く、40 歳以上では配偶者・パートナー・子どもが多くなった。障害の有無にかかわらず、20～30 歳代では独身、40 歳以上では既婚が多いと想定した場合、ライフステージの変化にあわせて、同居する家族が変化し、身近にいる人が変わってきていると推察できる。障害種別でみると、脳性麻痺では親・兄弟・祖父母、視覚障害では学校関連の指導者が多かった。先天的障害では親・兄弟・祖父母が継続の際の重要他者になっていた。先天的障害では生まれたときから家族が寄り添っている場合が多く、継続時の重要他者にもなっていると考えられる。

パラスポーツに関する情報提供者、開始場所、開始時重要他者、継続時重要他者などの傾向から、スポーツ開始時のきっかけとその継続にあたっては、いくつかの特徴が明らかになった。

## ○視覚障害

視覚障害ではパラスポーツに関する情報提供に始まり、パラスポーツを開始する際の重要他者、開始場所、継続する際の重要他者にすべて特別支援学校(盲学校)がかかわっていた。ほかの障害種と比較しても、視覚障害のように一貫して学校が関与している場合は少なく、学校を中心としたスポーツ振興体制は視覚障害独自の体制といえる。

## ○先天的障害と後天的障害の傾向

先天的障害においては、パラスポーツに関する情報提供は学校関係者、開始する際の重要他者は学校関係者と家族、継続する際の重要他者は家族とパラスポーツ関係者とライフステージに応じて役割が譲渡するような形になった。スポーツを核にしながらかかわるステークホルダーがライフステージに応じて変化するのは、卒業後のスポーツ環境を考えると、理想的な移行の形のひとつといえるだろう。

後天的障害においては、パラスポーツ開始時と継続時に重要他者に変化がみられた。開始時重要他者では、医師・看護師、理学療法士・作業療法士、義肢装具士などの医療・リハビリテーション職の人たちが大きな役割を担っていたが、継続時重要他者では配偶者・パートナー・子どもなどの家族に加えて、スポンサー企業や雇用先が継続する際の後押しをした。本研究のインタビュー対象者は、競技力が高い傾向にあるため、企業のスポンサー支援や選手採用などが継続する際に重要な役割を担っていたと推察できる。

## ○ライフステージに応じた受入体制の構築

20～30歳代でもライフステージに応じたステークホルダーの変化がみられた。パラスポーツに関する情報提供はパラスポーツ関係者と学校関係者、パラスポーツを開始する際の重要他者は学校関係者と家族、継続する際の重要他者は家族だった。障害発症時期が一律ではないため推察の域を出ないが、学齢期にパラスポーツに出会い、学校関係者や家族が開始する際の重要な役割を果たし、継続する際には家族が重要な役割を担った。ライフステージの変化に合わせて、比重が学校から家族へ移行したといえる。障害児の学校卒業後のスポーツ環境は課題となっているが、現状、家族が継続時の中心的役割を担っていることをふまえ

ると、必ずしも持続可能な環境とはいえない。卒業後を見越して、地域のパラスポーツ関係者が継続時重要他者として役割を果たすことができれば、家族のレスパイトにつながるうえ、障害当事者も家庭以外に居場所を持つことができる。今後、継続的なスポーツ環境に向けては、家族に負担が集中しない形で、地域が受け入れていく体制が構築されることが望ましい。

(第3章担当:小淵和也)

## 第 4 章

# 競技活動継続時の経済的支援・ 社会的支援

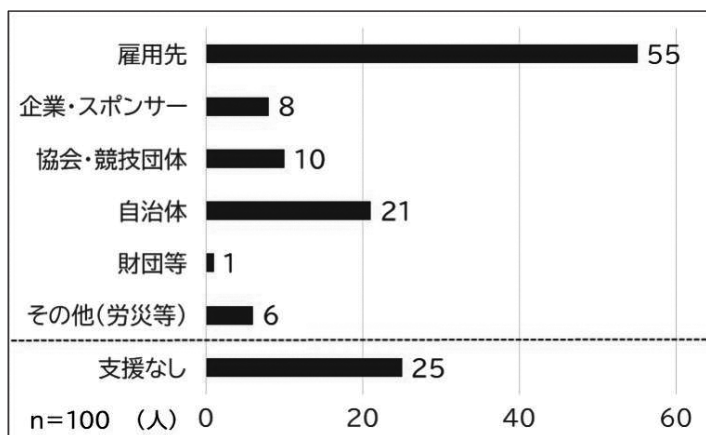
## 1. 報告概要

本章では、競技活動時の経済的支援および社会的支援の実態について検討することを目的に、調査中の主たる「活動継続時の支援元」について、調査時身分(社会人・学生の別、雇用形態等)・障害種・競技レベル別に分類し、その特徴や事例について整理していく。なお、「支援元」とは関連するインタビュー結果から、①雇用先、②企業スポンサー、③協会・競技団体、④自治体、⑤財団等、⑥その他、⑦支援なしの7項目を抽出したものである。

## 2. 競技活動継続時の支援の有無・支援元

競技活動継続時の支援有無・支援元(複数回答)は図表4-1のとおりである。

図表4-1 活動継続にあたっての支援の有無・支援元について  
(複数回答)



75名の対象者が何らかの「支援あり」となっており、延べ人数で「雇用先」(55名)と「自治体」(21名)が上位となっている。「雇用先」からの支援内容については、雇用先企業からの給与以外の強化費や用具・遠征費の補助、大会・遠征時の特別休暇の付与や職務減免等が含まれており、

「自治体」からの支援については、各都道府県からの支援金や強化指定選手への優先的な施設利用等が中心となっている。

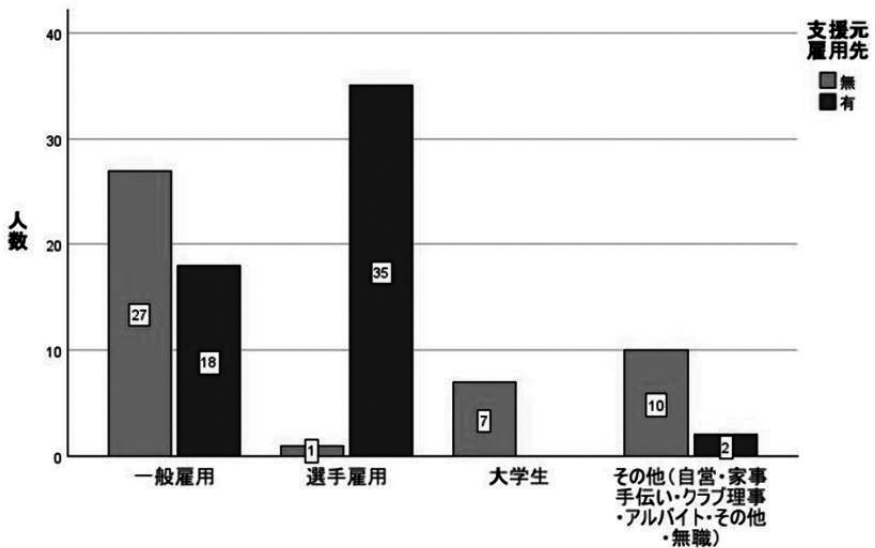
次節以降は、支援元として多数を占めていた「雇用先」「自治体」の実態について、雇用形態や障害種、競技レベル別に検討していく。

### 3. 雇用先からの支援

#### 3.1 支援の有無と調査時身分の関係性

競技活動継続時の雇用先からの支援有無と調査時身分の関係性については図表 4-2のとおりである。

図表 4-2 雇用先からの支援の有無と調査時身分の関係性について



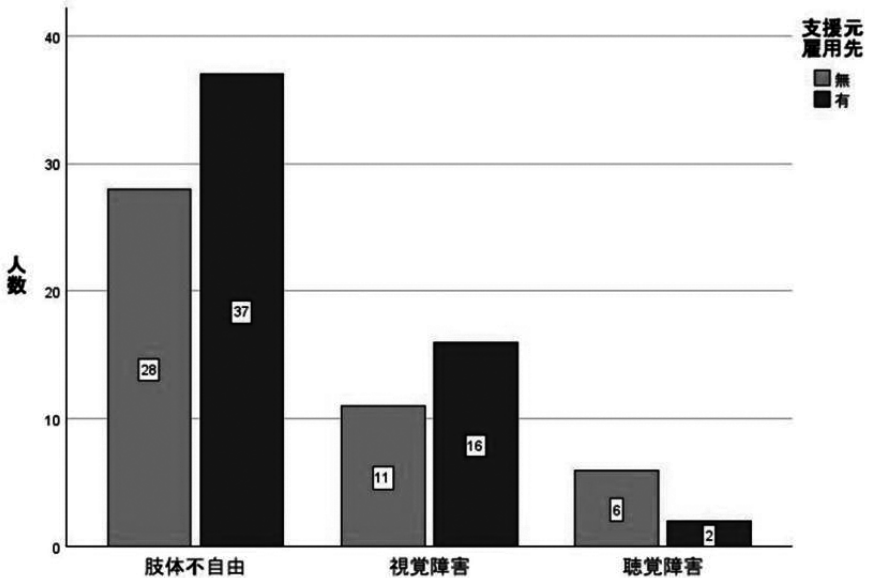
「一般雇用」の選手 45 名のうち、18 名が雇用先からの支援ありと回答しており、「選手雇用」の選手 36 名のうち、35 名が雇用先からの支援ありと回答していた。選手雇用の選手のうち 1 名は、インタビュー中で労災に関係する支援が大きかったと回答しており、便宜的に「支援なし」として扱っている。また、「大学生」についてはフルタイムに相当する雇用先が存在しないことから、雇用先支援なしとなっており、「その他」の選手 12

名のうち、2 名が雇用先からの支援ありと回答していた。

### 3.2 支援の有無と障害種の関係性

競技活動継続時の雇用先からの支援有無と障害種の関係性については図表 4-3 のとおりである。

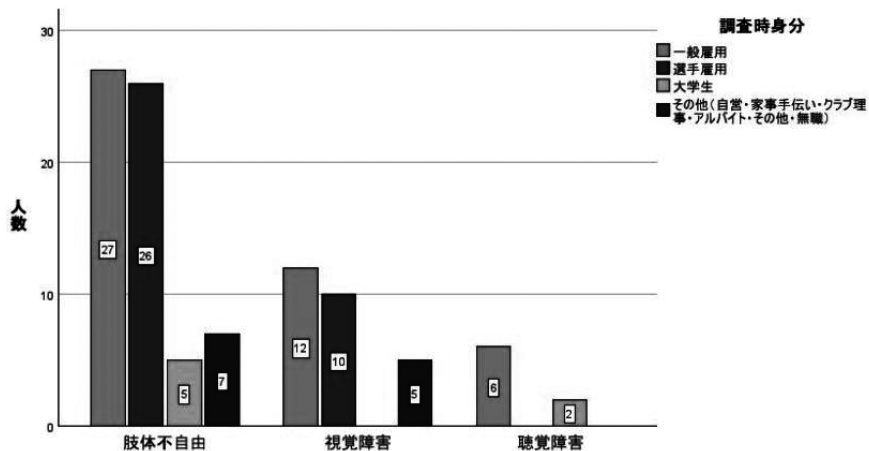
図表 4-3 雇用先からの支援の有無と障害種の関係性について



「肢体不自由」の選手 65 名のうち、37 名が雇用先からの支援ありと回答しており、「視覚障害」の選手 27 名のうち、16 名が雇用先からの支援ありと回答していた。その一方で、「聴覚障害」の選手 8 名のうち、雇用先からの支援を受けているのは 2 名にとどまっており、障害種間で雇用先支援の状況に差がみられた。

また、障害種と調査時身分の関係性をみていくと(図表 4-4 参照)、聴覚障害のある「選手雇用」の選手は 0 名となっており、肢体不自由・視覚障害と聴覚障害選手の雇用先支援の差の背景には、これらの雇用形態の違いが存在していると考えられる。

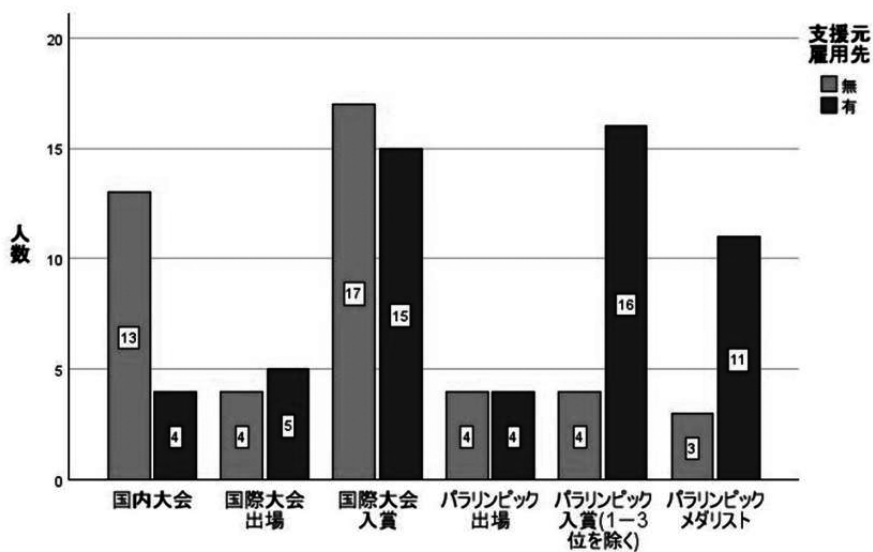
図表 4-4 障害種と調査時身分の関係性について



### 3.3 支援の有無と競技レベルの関係性

競技活動継続時の雇用先からの支援の有無と競技レベルの関係性については図表 4-5 のとおりである。

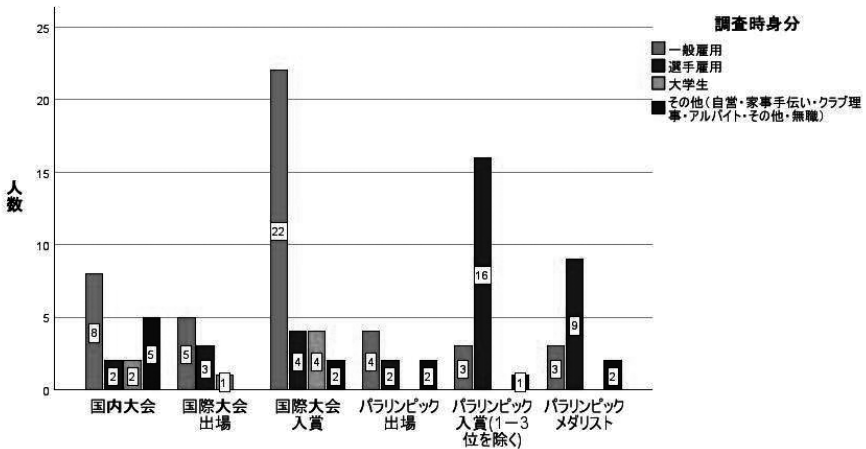
図表 4-5 雇用先からの支援の有無と競技レベルの関係性について



「国内大会」出場レベルの選手 17 名のうち、13 名が雇用先からの支援なしとなっており、「国際大会出場」「国際大会入賞」「パラリンピック出場」レベルの選手については、雇用先支援の有無が拮抗している。その一方で「パラリンピック入賞」レベルの選手 20 名のうち、16 名が雇用先からの支援あり、「パラリンピックメダリスト」の選手 14 名のうち、11 名が雇用先からの支援ありとなっており、競技レベルが上がるにつれて、雇用先からの支援が充足されている。

また、競技レベルと調査時身分の関係性をみていくと(図表 4-6 参照)、「国内大会」出場レベルから「パラリンピック出場」レベルまでは一般雇用の選手が多くなっているが、「パラリンピック入賞」選手、さらに「パラリンピックメダリスト」については、「選手雇用」の選手が多数を占めており、トップレベルの選手の多くが「選手雇用」の形態で競技を継続しているものと考えられる。

図表 4-6 競技レベルと調査時身分の関係性について



#### 4. 競技継続における「選手雇用」の実態

雇用先支援の状況について、「一般雇用」選手の 4 割が雇用先から支援ありと回答しており、一方、「選手雇用」選手のほぼ全員が、雇用先からの支援ありと回答していた。

一般雇用における雇用先支援の具体的な内容としては、強化費や遠征費・用具費等の金銭的な補助はほとんどみられず、大会・遠征時の特別休暇の付与や職務減免等の勤務時間の短縮が中心となっている。選手雇用の雇用先支援については、前提として業務をある程度免除され、競技に専念できる環境が整っており、金銭的な補助については選手個々に差が見られるが、給与とは別に強化費や遠征費・用具費等の補助が行われているケースがみられる。両雇用を対比するために、以下では、一般雇用から選手雇用へ転換した選手の事例についてみていく。

\*以下の情報はすべて調査時(2020年度)の情報にもとづく

### 識別番号 17

インタビュー時年齢:30歳

性別:男性

障害発生年齢:18歳

障害内容:交通事故による下肢切断および機能障害

競技歴:20歳から車いすバスケットボールを始め、2016年のリオパラリンピック後、日本代表選手に選出され、2018年の世界選手権上位入賞を果たす。

---

### 職歴・雇用先支援の変遷:

24歳の時に嘱託の学校職員として就職し(競技に差し障りが出るので正規職員として就職せず)、その3年後に日本車いすバスケットボール連盟の仲介で大手保険会社に選手雇用として入社した。会社には週に4回出社し、退社後、週に5~6日ほど練習している。スポーツ継続に関しては、仕事と競技を両立できる環境にあることが大きい。特に企業就職後はプレーに専念できる環境にあり、競技に関する金銭的な負担はほとんどない。

\*以下の情報はすべて調査時(2021年度)の情報にもとづく

### 識別番号 38

インタビュー時年齢:36歳

性別:女性

障害発生年齢:先天性

障害内容:先天性弱視

競技歴:2歳から地元のスイミングクラブで水泳を始め、中学校から高校までは部活動で競技を続け、大学入学後にパラ水泳に出会った。2008年北京パラリンピック入賞、2016年リオパラリンピック出場

---

### 職歴・雇用先支援の変遷:

大学卒業後、現在の所属先に就職し、当初はフルタイムで働いていたが、会社との話し合いで時短勤務が認められるようになり、現在は午前中のみ勤務をし、午後は競技活動に充てられるようになっている。また、競技に関する経費については、給与とは別にすべて会社が負担してくれている。

上記の識別番号 17、38ともに一般雇用から選手雇用へ転換(識別番号 38 は勤務形態の変更)したことで、雇用先からの金銭的支援を得ながら、競技力向上に傾注できる環境を確保することができた典型事例であるといえる。両者以外にも、国際レベルで競技に取り組んでいる現役選手のうち、複数名が選手雇用へ転換し、競技に専念できる環境が整っており、転職、転籍等を経していない選手についても職務減免や職場の理解によって競技を継続している。

パラリンピックを頂点とした障害者スポーツの高度化に伴って、国際大会への参加や海外遠征等が増加し金銭的な負担が増加していく中で、「所属先からの支援が重要」との声が多く選手から挙がっていた。選手雇用への転換や職場の理解、各種支援は東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会(2021年に開催延期)の開催が決定した 2013年以

後に進んできており、パラリンピック開催に向けた障害者スポーツへの認知度の向上、関心の高まりが影響しているものと考えられる。

## 5. 障害種別にみた雇用先支援の実態

障害種別に雇用先支援の有無や実態をみていくと、前述の図表 4-3 から明らかなように、肢体不自由、視覚障害に関しては、過半数の選手が雇用先からの支援を受けているが、聴覚障害に関しては少数にとどまっている。また、選手雇用についてみていくと、調査対象者が少数のため、一概に比較はできないが、聴覚障害のある選手は全員が一般雇用もしくは大学生となっており、肢体不自由・視覚障害選手と聴覚障害選手間には競技支援環境の差が生じているものと推察される。

肢体不自由選手の雇用先支援についてみていくと、冬季競技に取り組んでいる下肢切断選手のほとんどが選手雇用、もしくは一般雇用であっても所属先からの十分な支援を得ている点が特徴的である。以下では、冬季競技に取り組む下肢切断選手の事例をみていく。

\*以下の情報はすべて調査時(2021年度)の情報にもとづく

### 識別番号 36

インタビュー時年齢:40 歳

性別:男性

障害発生年齢:32 歳

障害内容:労災事故による右大腿切断

競技歴:障害受傷前からスノーボードを行っており、障害受傷後、数か月のリハビリを経てスノーボードを再開した。2017 年ワールドカップスノーボードクロス・バンクドスラロームメダリスト、2018 年平昌パラリンピックバンクドスラローム入賞

---

### 職歴・雇用先支援の変遷:

障害受傷後も、以前から勤めていた会社に勤務し、パラスノーボード開始後に選手雇用に転換し、競技連盟のアスリート助成を受けなが

ら、競技に専念できている。東京パラリンピック開催決定後の、各種助成制度の充実が競技の継続に好影響を与えている。

前述の識別番号 38 と同様に、識別番号 36 も転職ではなく、勤務形態の変更により「選手雇用」として競技を継続しているが、本調査では、ほかの冬季競技の選手も雇用形態等の違いはあるが、勤務先や他の支援を受けながら競技に専念できる環境が整っている。以上の冬季競技選手の状況について、その背景にあるのは夏季競技選手と比べて、競技継続に当たり多大な金銭的負担が生じるという点である。各種調査から指摘されているが、冬季競技は海外遠征が多く、それに付随して旅費や用具運搬等の費用が多額となり、選手自身の自己負担額が夏季競技より多いという報告もみられる。このような状況の中で、国際レベルで競技を継続していくには、雇用先を中心とした金銭的な支援がなければ競技継続そのものが難しく、結果として夏季競技よりも「選手雇用」の選手が多くみられるものと考えられる。

また、本節冒頭で、聴覚障害のある選手は雇用先からの支援を十分に受けられていないと指摘したが、以下では、聴覚障害選手の事例についてみていく。

\*以下の情報はすべて調査時(2024年度)の情報にもとづく

**識別番号 99**

**インタビュー時年齢:**33 歳

**性別:**男性

**障害発生年齢:**先天性

**障害内容:**先天性聴覚障害

**競技歴:**小学校5年生からバドミントンを始め、小学校・中学校は地元  
のクラブで、高校では部活動で競技を継続し、大学入学  
後、デフバドミントンと出会い、学内のサークルおよび社会人  
クラブで活動しながら、2年次から日本代表に入った。デフ  
バドミントン国際大会入賞。

-----  
**職歴・雇用先支援の変遷:**

大学卒業後、就職をしてから約6年間は、仕事を終えてからほぼ  
毎日のように複数の社会人クラブで練習していた。結婚後、現在の  
居住地に引っ越し、フルタイムの仕事と子育てを両立しながら、週に1  
回~2回程度、社会人クラブと大学で練習をしている。2019年の世  
界選手権でメダル獲得後は、会社の理解が得られるようになり、週5  
日の勤務のうち、2日は在宅勤務が認められるようになった。

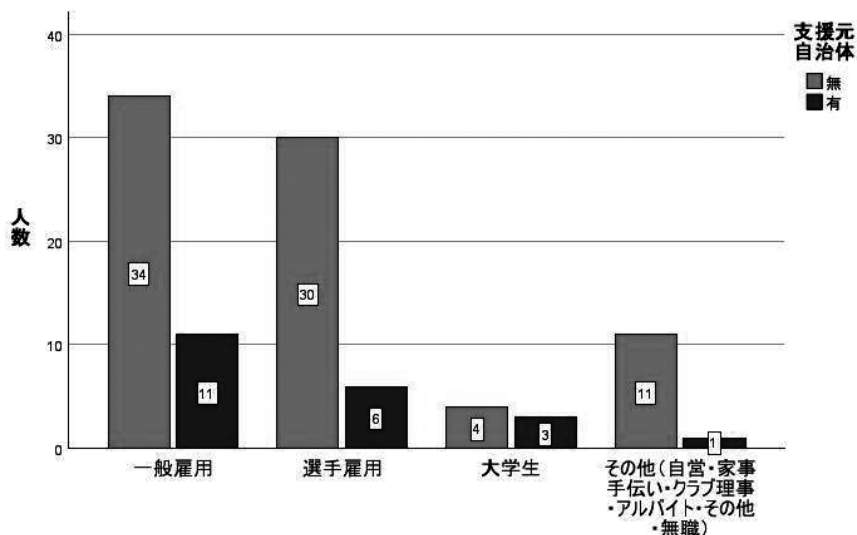
以上の事例にみられるように、前段のパラスポーツ選手と比べ多くの  
デフスポーツ選手は厳しい競技環境に置かれているといえよう。識別番  
号 99 はインタビュー中で、「(自身は一般雇用で)アスリート雇用の規模  
を拡大してもらえれば、もっと多くの障害者(=デフ\*筆者補足)アスリー  
トが学校卒業後も競技を続けられると思う。」と述べており、昨年、東京で  
デフオリンピックが開催されたが、雇用先支援のみならず、デフスポーツ選  
手を取り巻く環境は依然として厳しいものであると推察される。

## 6. 自治体からの支援

### 6.1 支援の有無と調査時身分の関係性

自治体からの支援の有無と調査時身分の関係性については図表 4-7 のとおりである。

図表 4-7 自治体からの支援の有無と調査時身分の関係性について

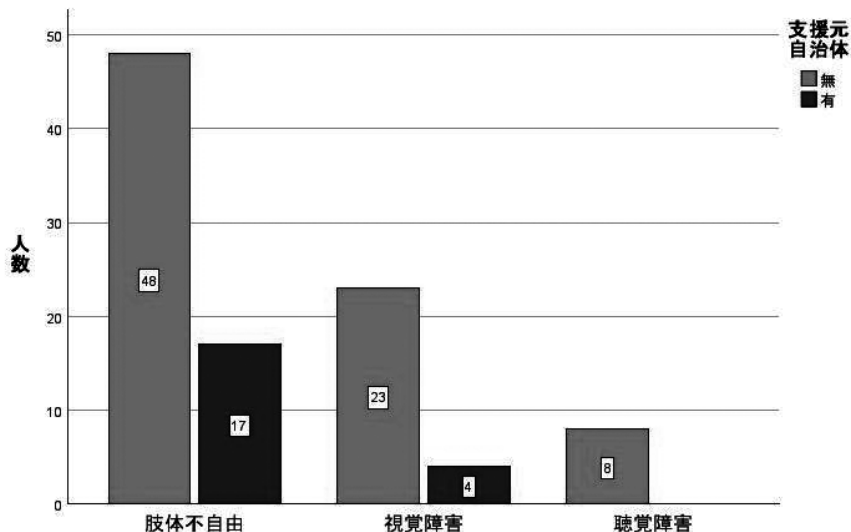


「一般雇用」の選手 45 名のうち、11 名が自治体からの支援あり、「選手雇用」の選手 36 名のうち、6 名が自治体からの支援ありと回答していた。「大学生」の選手 7 名のうち、3 名が自治体からの支援ありとなっており、選手雇用の選手と比べ、一般雇用、大学生のほうが相対的に自治体支援を受ける割合が高くなっている。

## 6.2 支援の有無と障害種の関係性

自治体からの支援の有無と障害種の関係性については図表 4-8 のとおりである。

図表 4-8 自治体からの支援の有無と障害種の関係性について

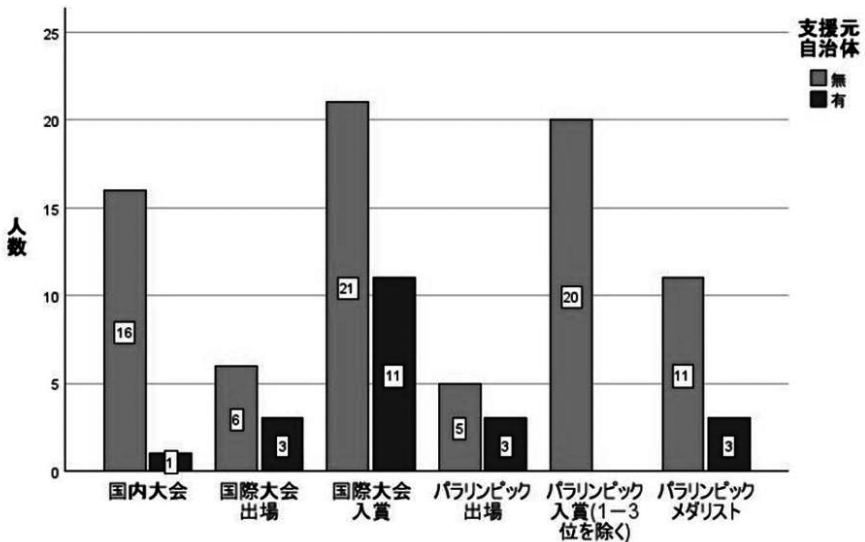


「肢体不自由」の選手 65 名のうち、17 名が自治体からの支援あり、「視覚障害」の選手 27 名のうち 4 名が自治体からの支援ありと回答している一方で、「聴覚障害」の選手は自治体からの支援を受けておらず、障害種間で支援状況の差がみられた。

### 6.3 支援の有無と競技レベルの関係性

競技活動継続時の自治体からの支援有無と競技レベルの関係性については図表 4-9 のとおりである。

図表 4-9 自治体からの支援の有無と競技レベルの関係性について



「国際大会出場」レベルの選手 9 名中 3 名、「国際大会入賞」レベルの選手 32 名中 11 名、「パラリンピック出場」レベルの選手 8 名中 3 名が自治体支援を受けており、ほかの競技レベルの選手と比べて、この3者が相対的に支援を受ける割合が高くなっている。

## 6.4 支援を受ける選手の実態

自治体からの支援については、都道府県もしくは都道府県のパラスポーツ協会等の金銭的な支援が中心となっており、一部、都道府県の強化指定選手は施設の優先利用等の支援が行われている。以下では、より具体的に自治体支援の実態を検討するため、全 100 名の選手のうち、「自治体支援」のみを受けている 8 名の実態についてみていく。

障害種では肢体不自由6名、視覚障害2名となっており、競技レベルは「国内大会」1名、「国際大会出場」2名、「国際大会入賞」3名、「パラリンピック出場」2名となっている。さらに、前述の調査時身分をみると、一般雇用の選手が相対的に高い割合で自治体支援を受けており、これらを勘案すると、全国障害者スポーツ大会や国内大会への出場を目標とする、もしくはこれから国際大会を目指していく選手に対して有効な支援として機能しているものと推察される。以下では、自治体支援によって競技を継続している選手の事例をみていく。

\*以下の情報はすべて調査時(2023年度)の情報にもとづく

**識別番号 75**

**インタビュー時年齢:**25 歳

**性別:**女性

**障害発生年齢:**先天的

**障害内容:**二分脊椎

**競技歴:**小学校からチェアスキーや車椅子マラソン等をやっていたが、恐怖心のないカーリングを中学校のころから始め、高校生の時に世界選手権に出場し、現在は公務員として働きながら週に 2~3 回練習している。

-----  
**職歴・雇用先支援の変遷:**

高校、専門学校を卒業後、地元の医療機関に勤務し、その後地元の町役場に転職し現在に至る。スポーツにかかる経費は大会によって国や自治体から助成金が出ることもあるが、自己負担が生じないわ

けではないので、さらに各種支援が充実して欲しいと思う。東京パラリンピック開催決定後、自治体の助成金制度が作られたことが競技継続により影響を与えている。

識別番号 75 は雇用先からの支援を受けておらず、国や自治体等からの支援を受けて競技を継続している状況である。また、「東京パラリンピック開催決定」が前述の選手雇用の拡大のみならず、自治体等の支援の拡充にも影響していることを読み取ることができる。

また、本事例のほかに、同様の支援を受けている選手の状況をみると、事例が少数のため詳述することはできないが、①大学生選手が競技を続けていくためのステップ、②「選手雇用」普及以前、進路選択時に「選手雇用」がなかった選手たちにとって重要な支援、③マイナー競技、非パラ競技(全スポ大会競技を含む)選手にとって重要な支援として自治体支援が機能しているものと考えられる。

## 7. まとめ

本章では、競技活動時の経済的支援および社会的支援の実態について明らかにすることを目的に、調査中の主たる「活動継続時の支援元」について、雇用先と自治体を中心に検討してきた。

雇用先の支援については、パラリンピック出場選手を中心に「選手雇用」が広がってきており、パラリンピックを含めた競技的な障害者スポーツの取り組みが高度化していく中で、「選手雇用」もしくは「一般雇用」であったとしても、競技に専念できる環境が整えられなければ、世界レベルでの競技継続は難しくなっていくものと考えられる。

また、障害種別では、聴覚障害のある選手の「選手雇用」や各種支援が充足されておらず、厳しい競技環境に置かれていることが明らかになった。2025年に開催された東京デフリンピックを契機として、今後、聴覚障害選手への支援体制が拡充されていくのか注目されるところである。

もう一方の自治体支援について、前述のとおり、東京 2020 パラリンピ

ック競技大会開催決定後、選手雇用制度の拡大や選手に対する各種支援が拡充されてきたが、全国障害者スポーツ大会や国内大会への出場を目標とする、もしくはこれから国際大会を目指していく選手に対しても助成金が支給されるなど、自治体ごとの支援体制についても拡充されている状況が示唆された。また、選手雇用ではなく、一般雇用でこれらの助成を受けて競技を継続している選手が複数名いることから、このような自治体支援は単なる競技力向上のみならず、スポーツ参加の裾野を広げていくための重要な制度といえるのではないだろうか。

(第4章担当:河西正博)



# 第5章

## モチベーション

## 1. 傾向

受傷・発症時またはスポーツ開始時から現在までのスポーツに対するモチベーションを5段階評価で図式化した。視覚障害、身体障害(肢体不自由・切断等)、聴覚障害という障害種と、障害発症時期(先天的か後天的か)で比較検討した。モチベーションが変動する要因として「競技成績」「パラリンピック/デフリンピック大会」、「競技環境」、「ライバル・理解者の存在」が示された。

スポーツを継続するためには、何らかの形で競技に対するモチベーションが維持されなければならない。モチベーションとは「行動を生じさせ、その行動を継続し、何らかの目標に方向づける一連の心理的な過程(日本スポーツ振興センター,2025)」と説明されており、内発的動機づけと外発的動機づけとして捉えることができる。内発的動機づけとは、「スポーツをすること自体が楽しい(興味)」、「もっと上手になりたい(意欲)」のような自分の内側に湧き起こった興味・関心・意欲である。それに強く影響するのが「自己の能力を十分発揮できている(有能感)」や「自分で考えて行動している(自己決定感)」である。一方で外発的動機づけとは、「勝ったら賞金がもらえる(外的報酬)」、「怒られたくない(賞罰)」などであり、短期間で効果が上がるが外的報酬がなくなった時や苦しい時に諦めてしまうなど、長続きしないと言われている。本章では、パラアスリートのモチベーションの維持に影響を与えた要因について、内発的動機づけという視点から、スポーツへの興味・関心・意欲、目標、社会的状況・環境・条件、重要な他者に着目して質的に分析した。

## 2. 前章までとの関連性

スポーツを継続するための外的条件として、情報、競技環境、重要な他者と障害種別の傾向が示されている。肢体不自由の場合、先天性ではパラスポーツ関係者と家族の影響が大きいこと、20歳代以降では家族、視覚障害の場合は学校での運動経験や指導者・支援者の存在が大きい。さらに、経済的な支援制度があることも継続の条件として指摘されている。

活動継続時の支援元については、「選手雇用」では雇用先からの支援が得られるが、「一般雇用」では雇用先からの支援があるのは約 4 割であった。それら雇用先支援選手の多くがパラリンピック上位という競技成績を持っていた。障害種別では、肢体不自由と視覚障害が中心で聴覚障害は少数であり、本調査対象者の聴覚障害選手には「選手雇用」はなかったが、東京 2025 デフリンピック開催に伴って、聴覚障害選手も選手雇用が増加している現状は、確認されている(齊藤, 赤羽根, 中島, 2025)。雇用先支援については、特に下肢切断競技者の割合が高く、冬季競技選手のほぼ全員が「雇用先支援あり」と回答しており、夏季競技と比べ費用負担が重く、「選手雇用」もしくは「雇用先支援」がなければ競技継続が難しい可能性も指摘された。これらの背景をもとに、選手にとってスポーツ(競技)に専念できる環境があり、かつモチベーションを保つためにどのような要因が関連しているのか、障害種・発症時期・競技種目の異なる 6 事例をもとに検討していく。対象者のプロフィールを図表 5-1 にまとめた。

図表 5-1 事例対象者のプロフィール

	障害について	パターン		調査時 年齢	競技 年齢	競技成績	調査時の支援制度
		A	B				
事例 1	身体障害 (先天的・肢体不自由)	A1	26	18	競泳パラリンピック入賞	スポンサー企業 (NFを通じて) ・県	
事例 2	身体障害 (脳性麻痺)	A2	25	7	ボッチャ国際大会入賞	自治体	
事例 3	視覚障害 (全盲)	A2	33	23	ブラインドサッカーパラリンピック出場	雇用先	
事例 4	聴覚障害 (ろう)	A3	33	20	バレー/ビーチバレーデフリンピック出場	雇用先	
事例 5	身体障害 (18歳: 事故による右下肢切断)	B5	41	23	陸上競技パラリンピック入賞	雇用先	
事例 6	視覚障害 (15歳: 疾病により発症・弱視)	B2	37	8	ローイング/クロスカントリースキーパラリンピック出場	雇用先	

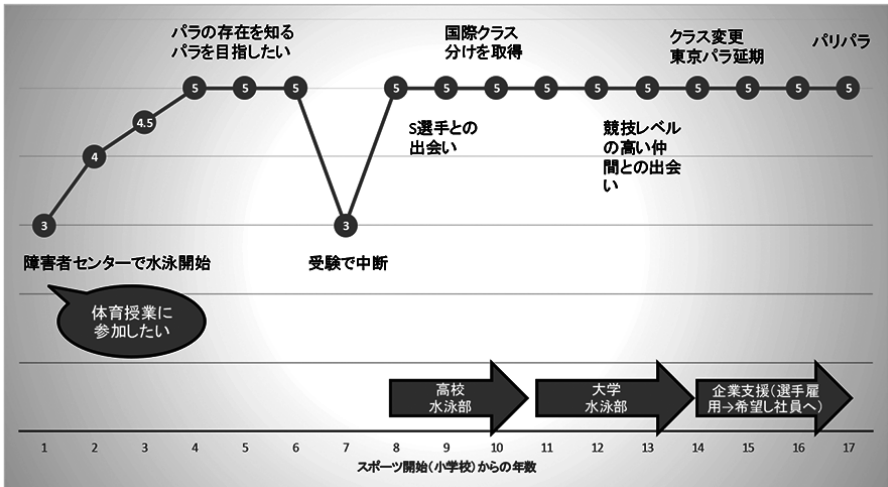
### 3. 事例

事例1(識別番号58): 競泳を専門とするパラリンピアン女性の女性である。先天的肢体不自由(左上腕および右大腿骨欠損)であるが、小学校から大学まで一般学校に在籍し、元々体を動かすことやスポーツが好きで、スキーや外で友達と遊んだりしていた。水泳を始めたきっかけは、学校の体育(水泳)授業に参加したいという思いである。障害者交流センターで水泳を習い始め、中学でも、母親の送迎で週 3~4 日泳いでいた。高校 1 年でジャパンパラに初出場し、日本代表監督の目に留まり、育成選手となり高校 2 年で国際クラス分けを受け海外の試合にも出場するようになる。

障害者水泳のチームに所属しロールモデルとなる選手にも出会う。そのころから徐々にパラリンピック出場を意識するようになるが、2016年リオ大会には出場できなかった。その後、クラス変更による泳法修正、震災（メキシコ）による大会中止などを経て東京パラリンピック代表となる。大会開催延期で一時落ち込むが、泳法修正への時間を得たとポジティブにとらえ練習し、翌年の東京パラリンピックに出場した。学生の間はほぼ自己負担であり親が金銭的負担をしてくれた。現在企業で週半日から1日ではあるが会社で他の社員と一緒に働く形である。当初の選手雇用から自らの意思で変更し、所属企業の社員とのコミュニケーションをとってつながりを持つ中で競技生活を続け、次のパラリンピックを目指しているが、引退後も同社で働き続けたいと思っている。

競泳継続の内発的動機づけとしては、家族の支援、幼少期からの多様なスポーツ経験が有能感を育てていたこと、練習成果が認められ国際大会参加へつながったこと、よりレベルの高い選手との出会いにより向上心や競争心が培われたこと、パラリンピック出場という目標、ロールモデルの存在があったこと、そして仲間の存在と居場所感を感じられていることである。

図表 5-2〈識別番号 58〉事例 1 女性 26 歳 肢体不自由(先天的)



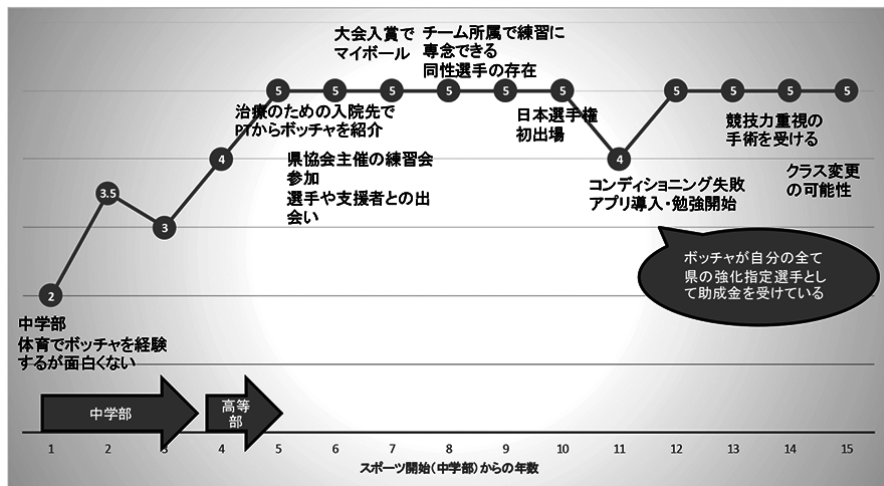
事例2〈識別番号 46〉:ボッチャを専門とする日本代表を目指す女性選手である。脳性麻痺による肢体不自由があり、中学校と高等学校の途中まで特別支援学校に在籍、現在は在宅勤務をしている。これまでに障害に伴う手術を計 11 回受けており、ボッチャ開始前は日常生活で歩くことを意図した手術を、ボッチャ選手になってからは、日常生活機能よりもパフォーマンス重視の方向性での手術を行った。スポーツ(ボッチャ)を始めるに当たっては、ボッチャの先輩選手、選手関係者(選手の父)、母親、リハビリ機関の理学療法士が重要な他者として挙げられた。特に、治療のために入院した際に理学療法士による情報提供があり、それが母親による練習場所への移動支援へと繋がり、さらにボッチャの先輩選手による影響でパフォーマンスが維持されてきたという過程を見ることができる。環境要因として、当該地域にボッチャの県協会があり、練習の機会が提供されていたことが大きい。

初めてボッチャを体験したのは中学部在学中であったが、その時は教員の知識不足あるいは経験不足の影響から面白いスポーツだとは感じられなかった。しかし、同性の選手の存在、先輩選手、コーチ、母親らの影響や支援があったことから、ボッチャを継続できた。ボッチャにおいてできるだけよいパフォーマンスを期待して何回かの手術をしており、中には体の機能を低下させる(歩けなくなる)可能性のある手術も含まれていた。

ボッチャ継続の内発的動機づけとしては、自分自身で考え自分の体を使って主体的に参加できることのうれしさを感じられたことをきっかけに、試合で勝てないことの悔しさと、勝てるかもしれないという可能性を認識できたことが指摘できる。また、それらの状況を踏まえ自分の身体状況を自己研究・自己分析することによる可能性を見出し、そうすることでパフォーマンスに対する向上心が生じ、さらには支援者への恩返しにも向かっている。

現在クラス変更の可能性があり、そのことに対する気持ちの整理をしようと努力している段階である。

図表 5-3 事例 2〈識別番号 46〉 女性 25 歳 肢体不自由(先天的)



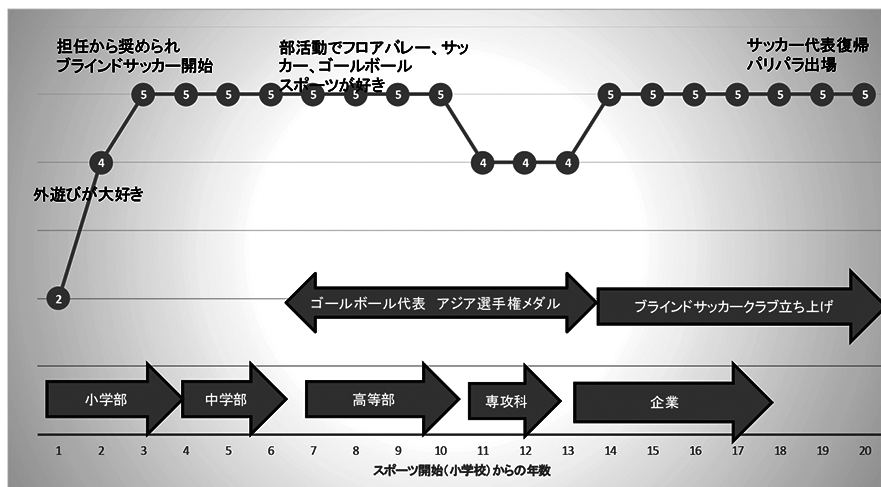
事例3〈識別番号 89〉:ブラインドサッカーとゴールボールを専門としたパラリンピアン男性である。1歳3か月で病気を発症し、全盲となる。幼稚園から専攻科まで視覚特別支援学校に在籍し、様々な視覚障害者向けのスポーツを経験した。小学5年で担任からブラインドサッカーを紹介されクラブチームに加入、中学3年で日本代表入りを果たした。高等部ではゴールボール部とフロアバレーボール部に入り、土日にブラインドサッカーをやっていた。高等部3年の2009年にゴールボール日本代表チームに招集され、以降2014年までゴールボールに専念した。2015年にブラインドサッカーに戻り、自分のチームを立ち上げ、2022年に日本代表チームに復帰、2023年にパリパラリンピック出場権を得た。

内発的動機づけとして、「とにかくスポーツすることが好き」であることが指摘できる。それを育んだのは、生育環境・教育環境である。1歳3か月で眼球を摘出し全盲になったが、体を動かすのが好きで様々な遊びや運動に参加していた。障害のない子どもと遊ぶこともしばしばだったこと、幼稚園から視覚特別支援学校に通っていたことから体育等でも障害に配慮された教材が使われていたものと推測され、体を動かす機会が保証されていたことが指摘できる。身体を動かすことが好きだったこと、ブラインドサッカーの情報を得たこと、高校時にブラインドスポーツの部活があ

ったことが影響を及ぼしている。

自分のチームを立ち上げた時から「ブラインドサッカーの普及や選手育成にかかわりたい」と考えており、このことから日本ブラインドサッカー協会は、パラスポーツ競技団体のマネジメントに関して日本でトップの競技団体であり、競技団体の着実な発展と成長が選手の境遇や競技強化に影響を与えていることが伺えた。

図表 5-4 事例 3〈識別番号 89〉男性 33 歳 視覚障害(先天的)



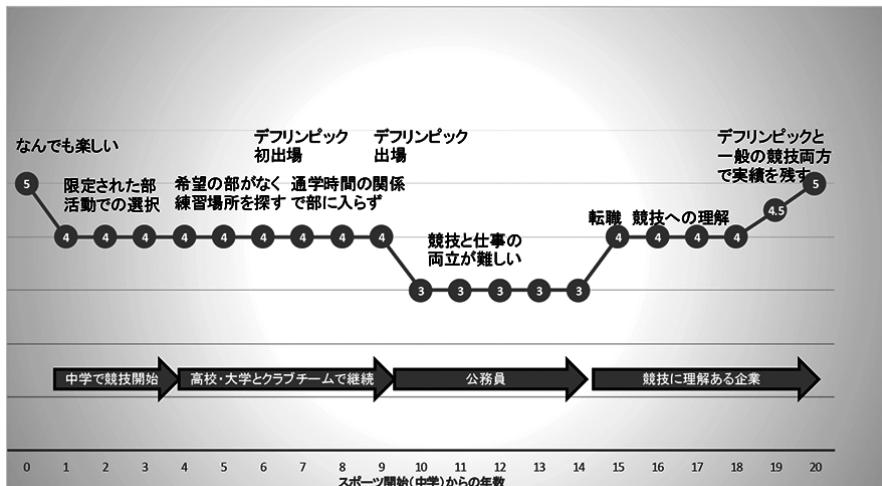
事例4〈識別番号 100〉:ビーチバレーボールとバレーボールを専門とするデフリンピアン男性である。早期教育から中学部まで15年間ろう学校で教育を受け、高校、大学は一般校に在籍した。ろう学校中学部でバレーボールを始め、高校進学後は関西のデフバレーボールチームに所属、高校2年(2009年)の時に当時最年少で台北デフリンピックに出場、大学3年生(2013年)でもソフィアデフリンピックに出場したが、2014年に友人からビーチバレーボールの誘いを受け二足の草鞋を履くようになる。大学卒業後は市役所に勤務し、バレーボールとビーチバレーボールを並行して行っていたが、2018年一般企業に転職後はビーチバレーに専念し、ビーチバレー大阪代表として、またデフビーチバレー日本代表とし

て活躍している。デフファミリーとして生まれ、幼少期から学齢期をろう学校で過ごし、コミュニケーションに不自由することなく遊びや多様な運動経験をすることで現在の競技力の基礎が培われた。中学部ではろう学校特有の限定された部活動としてバレーボールに接することになったが、ネット型競技であるバレーボール特有の面白さに魅かれていった。高校からは将来を見据え一般校に進学、聴者のコミュニティに入っていく。しかしデフバレーとの関わりは続いており、最年少でデフリンピック参加を果たすなど、特定のチームにこだわらないハイブリッド型でバレーボールとかわっていった。

バレーボール選手として2度、ビーチバレーボール選手としても2度、合計4度のデフリンピック参加を果たし、東京大会で5度目の代表を目指している。デフビーチバレーボール協会のU氏から強く影響を受け、自身の成長も含め、現在はビーチバレーボール選手としてデフコミュニティと聴者のコミュニティの両方でパフォーマンスを発揮することを求めている。デフビーチバレーの選手が健常者の試合で活躍することで、デフスポーツの認知度と競技力も高まる。また、ビーチバレーの試合では健常者とペアを組むこともあるので、デフスポーツのみにこだわるとはならず、それぞれの環境で自己のパフォーマンスを発揮させることにこだわりを持って練習や試合にのぞんでいる。先輩たちの努力を無駄にしないためにも、現役の自分たちが健常者の大会で結果を残し、デフビーチバレーボールの存在を知って応援してもらえるよう頑張っていきたい。それが、結果としてデフスポーツの競技力を高め、社会における聴覚障害者の理解や取り巻く環境の改善につながるものと確信しているからである。

内発的動機づけとして、限定された状況下でもスポーツ活動の場を自己選択・決定し、それに対して成果を求める姿勢を持ち続けたことが指摘できる。それを支えたのは、自らがプレーをして楽しいことだけでなく、自らがプレーすることの社会的意義を見出したことである。デフコミュニティと聴者のコミュニティの両方で競技することで、ろうの子どもたちにとってのロールモデルとしての役割、デフスポーツの競技力を高め、社会における聴覚障害者の理解や取り巻く環境の改善につながるという社会的使命に気づいているからである。

図表 5-5 事例 4<識別番号 100> 男性 33 歳 聴覚障害(先天的)

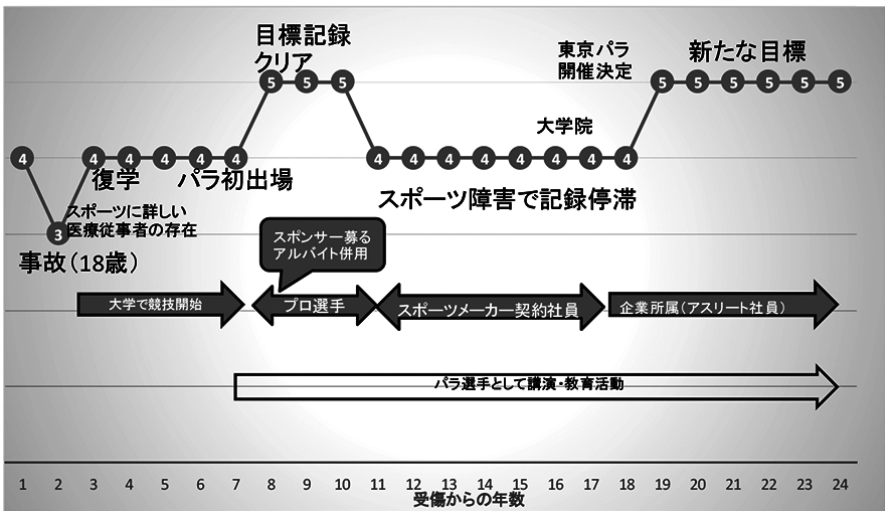


事例5<識別番号 26>:陸上競技走り高跳びを専門とするパラリンピアン  
の男性である。大学入学直前に事故により受傷、下肢を切断するが義足  
をつけてスポーツの場に復帰した。大学卒業後、母校の科目履修生とし  
てアテネパラリンピックに出場、自らスポンサーを集め、2005年4月か  
らプロアスリートとして活動、2004年には芸能プロダクションにも所属  
した。スポンサーがない苦しい時期もあったが、アルバイト等をつなぎ、  
2009～2015年はスポーツメーカー契約社員として競技に専念できた。  
母校の大学院に戻り修士号を取得、2015年から金融証券会社に所属し、  
今後も現役を続けるが指導者としての道も切り拓き、指導者として勉強  
をしながら、選手とともに高めていきたいと考えている。さらに、一般の人  
と同じ土俵でマスターズでの競技(義足側で踏み切らなければ出場でき  
るという約束を取り付けている)を考えている。現在所属している会社と  
は一線での現役引退後のことは詰め切れていないが、現在の業務であ  
る社員の健康管理に関する仕事の継続、社内パラリンピックチームの指  
導者、一般社員と同じ仕事をするという可能性もある。

内発的動機づけとしては、元々アスリートであったことから、競技に復  
帰するという強い意思を持ち続けたことである。その背景には、急性期・

リハビリ期を担当する医師がパラスポーツの知識を持っていたことであり、予後にスポーツを実施することを想定した手術や治療ができた。そしてその医療関係者が国内でも有数のスポーツを理解した義肢装具士につないでくれ、さらに障害者スポーツセンターでのリハビリにつながった。そのリハビリ中に陸上競技と出会っている。スポーツ継続に関しては、生活する経済的基盤がしっかりしていることが重要であるが、本件の場合、自らスポンサー探し・契約をするなど主体的な活動の成果が示された。さらに大学での練習環境と運動部や学生としての仲間がいたこと、目標記録の達成を通してスポーツの継続が可能となっていた。受傷後に地元でスポーツができる受け皿と仲間の存在が重要であることが示された。

図表 5-6 事例 5<識別番号 26>男性 41 歳 下腿切断(受傷後 23 年)

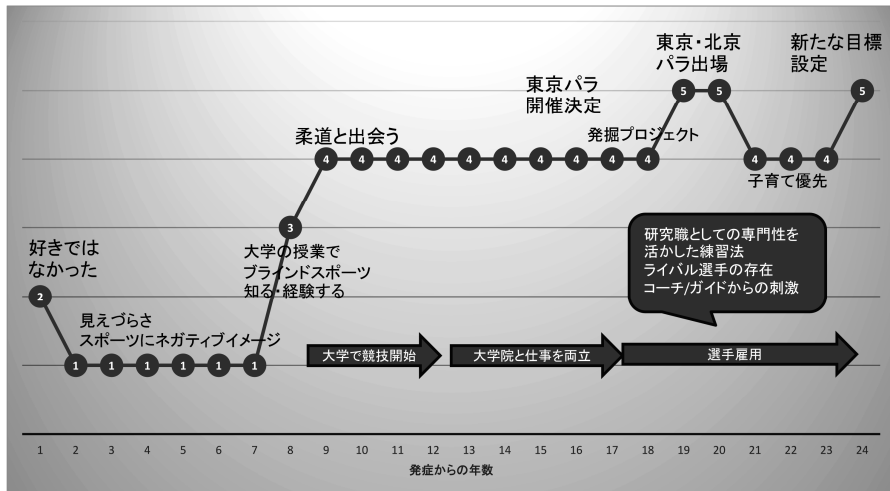


事例6<識別番号 95>:ローイングとクロスカントリースキーという夏と冬2大会でのパラリンピアン男性である。15歳の時に黄斑ジストロフィーによる視覚障害(弱視)となる。進学した大学の視覚障害者のための学部で、視覚障害柔道選手と出会い20歳で柔道を始めた。理学療法士の資格取得後、別の大学研究員を経てK大学大学院に進学、実験助手としても勤務する。2016年に、パラリンピック東京大会出場を目指し、東京都

パラリンピック選手発掘プログラムを経てローイング選手としてトレーニングを開始、着実に力をつけ2021年東京パラリンピック混合舵手つきフォアに出場した。同時にクロスカントリースキー選手として、2022年北京パラリンピックへの出場を果たし、夏・冬両大会に出場するパラリンピアンとして現在もトレーニングを続けている。ローイングの競技をやりながらトレーニングとして始めたクロスカントリースキー競技、現在はそちらを主としており、ローイングはロサンゼルス大会で新しいクラスが増えて、もしチャンスがあればという意識でいる。スキーと重ならないところで練習や合宿に参加しながら競技活動は続けているが、位置づけとしてはスキーをメインでやる上で、フィジカルトレーニングの一環という位置づけでローイングを継続している。

内発的動機づけという視点では、まず、自分がスポーツをすることに対する気づきを得たことを指摘したい。視覚障害があることで、スポーツに積極的ではなかった学齢期を経て、大学で同世代の視覚障害者と出会い、パラスポーツと出会った。そこから自分がパラリンピックの日本代表になるチャンスがあることを知った時に、本気で競技スポーツと向き合うことができ、本質的に障害をプラスに捉えることができたという意味ではパラリンピック、パラスポーツとの出会いが障害受容への大きなきっかけであった。さらに、研究職としての専門性が競技継続への影響としては大きい。自らトレーニング方法を調べ、クロストレーニングの一環としてローイングとクロスカントリースキーを行うことや、目標値を計算して具体的に目標を立てながら実践することでモチベーションを高く保つことにもつながっている。コロナ禍で集団練習ができない環境であっても、自らできることを見つけ競技に向かう姿勢を示す、競技継続のために選手雇用や家族(子育て)との時間も含めた競技環境のあり方などを開拓していくことで、2030年への目標に向かって着実に自己実現を果たしている。

図表 5-7 事例 6<識別番号 95>男性 37 歳視覚障害(発症後 22 年)



#### 4. まとめと提言

アスリートのモチベーションについて共通している点が3つあった。

1 つ目は、学齢期もしくはパラスポーツを開始してまもない時期に「楽しい」と感じる経験が得られたことである。幼少期から体を動かすことが好きだったという事例1、3、4、5は、学齢期から自らに合った外遊びやスポーツを経験することによって、運動有能感が形成されたものと推察される。一方で、事例 2 は最初の経験が十分ではなかったことから自分には主体的に取り組めるスポーツはないと感じていた。事例6も視覚障害による見えづらさからスポーツに対する苦手意識があった。しかし、事例 2 では専門的知識を持つ指導に触れたことがきっかけでスポーツ本来の持つ楽しさに気づき、そのメリットを享受することができ、さらなる意欲へとつながっていった。同様に事例6も、障害特性に合う様々なスポーツを授業で経験することで、自らが「スポーツをする主体」へと意識変容を遂げていった。

2 つ目は、継続にあたっての身近な活動場所と集団への所属意識が見られたことである。その要因としてパラスポーツに接した後に、継続する

ための受け皿があったことである。その受け皿は、パラスポーツの協会であったり、クラブであったり、学校の部活動の場合もあるが、それらの集団において、競う仲間の存在やそうなりたいと思えるロールモデルの存在、そしてスポーツをすることに理解を示してくれる人々に巡り会えたことである。

3 つ目は、目標設定である。客観的に目標設定ができ、それを達成するための方法を自らが主体的に探っていた。例えば、競技力向上のためにどうすれば良いかを積極的に学ぼうとする姿勢が見られることである。方法は様々であるが、事例2、5、6は実際に専門的知識を学ぶ、大学院で得た知識を具現化するなどの行動を起こしている。受け身ではなく、自らが主体的に行動する、アスリートとしてどうあるべきかを考え、その後の方向性を見据えて行動を起こしていくことである。

以上のことから、競技を継続するにあたって、競技環境として身近に活動の場があること、それらをつないでくれる人や仕組みが構築されていることがモチベーションを継続するために重要である。やりたいが場所がない、指導者がいない、仲間がいない、理解者・支援者がいない、経済的に厳しいなどの継続阻害要因は、当然のことながらモチベーションの低下をもたらす。今回事例としてあげた 6 名は、ファーストアクセスから次のステップへとつながる中で、スポーツでの成功体験があり、興味・関心・意欲が形成されていった。さらに、目標設定が的確に行われ、自己決定のもとで自らを高める姿勢が涵養されたと考えられる。

最後に、100 名のインタビューでは「生涯現役」という発言も散見された。これは、比較的競技歴の浅い選手や暦年齢の低いアスリートにその傾向があり、現実の目標達成が最優先で、それ以降のことは考えられない、その時に考えるという意図が伺えた。アスリートのデュアルキャリアやセカンドキャリアは、障害の有無にかかわらず重要視されなければならない課題であるが、特に障害のあるアスリートにとっては、第一線からの引退後にスポーツとどう関わっていくかを定義づけられるかが重要である。スポーツを生活の中にどうデザインしていけるか、スポーツを生活の中心に置いて生活リズムを形成していると言い切るアスリートも散見されたことから、競技だけでなく生涯スポーツが生活を豊かにすることにつながる

と考えられる。この点についても、支援制度が構築されるとよいのではないだろうか。

#### 文献

日本スポーツ振興センター:「動機づけ(モチベーション)」心理グループ・ハイパフォーマンススポーツセンター。

<https://pathway.jpnsport.go.jp/sports/column11.html>  
(2025/12/28)

齊藤まゆみ, 赤羽根颯河, 中島幸則: デフ選手が抱くデフリンピックの存在意義. 日本アダプテッド体育・スポーツ学会第 30 回大会, 広島, 2025

(第 5 章担当: 齊藤まゆみ)

## 第 6 章

# 障害者のスポーツを取り巻く 社会的環境の変化

本調査のインタビューを受けてくださった識別番号 19、31、26、39、25、60、29(以上生年の早い順)の事例から、東京 2020 パラリンピック競技大会(正確には大会開催が決まった 2013 年)前後の選手の状況や社会的な状況を比較し、その変化をみていく。

識別番号 19 は 1955 年生まれ、1978 年にけがで脊髄損傷となった。その後約 1 年間のリハビリ期間中にパラスポーツに関する情報や関係者との出会い、車いすバスケットボールチームへの参加を経験する。1980 年にオランダでパラリンピックを目の当たりにし、大会への出場を目指すことになった。1988 年のソウル大会出場を目指したが日本代表になれず、車いすテニスに転向し、1992 年のバルセロナ大会出場を果たした。当時はパラスポーツ選手のための選手雇用などはなかった。この間は練習時間を確保しかつ、遠征費等を得るために非常勤職をかけ持ちする生活が続いた。常勤職の有給休暇日数では遠征や合宿に参加することができないこともあり、非常勤職を選択している。

識別番号 31 は 1966 年生まれ、1996 年 30 歳の時に視覚障害となった。その後スポーツに関する情報を求めて、市役所、県障害者スポーツ協会などを訪れるが、以前やっていた柔道に関する十分な情報を得ることはできなかった。その後も自ら情報を収集することで、ようやく柔道をやっている道場に出会う。しかし、障害を理由に何度も参加を拒否される。10 回目の訪問で偶然柔道をやっていたころの自分を知っている人と出会い、入会が許可された。識別番号 31 はその後も自転車の練習会場、トレーニングジム、陸上競技場でも同様の経験をするが、その都度、人間関係を粘り強く作り上げ、クリアしていった。自ら施術診療所を経営することもあったが、就労していない時期もあり、その間は妻の就労によって支えられることもあった。スポンサーや補助金制度により 2014 年からは競技に専念している。また今後を見据えて新たなスポンサーを探している。

識別番号 26 は 1980 年生まれ。1999 年 2 月に交通事故により右脚下腿を切断した。大学入学を 1 年延ばし、その間に病院での治療、義足の型取り、リハビリ等を行い、障害者スポーツセンターでリハビリやトレーニングを行ったことがきっかけで陸上競技と出会い、ハンドボールから

陸上競技へと移行した。大学入学後は陸上競技部で練習を重ね、シドニーパラリンピックに出場、その後 6 大会連続でパラリンピックに出場している。大学卒業後、「プロの義足アスリート」を目指し、100 社を回ったが、支援に応じてくれたのは 3 社だった。こうして 2005 年からプロアスリートとしての活動を開始した。その後、2009 年にはスポーツメーカーの契約社員に、2015 年には金融証券会社に正社員として入社し、現在に至る。

識別番号 39 は 1982 年生まれ、18 歳の時に骨肉腫を発症し、約 1 年間入院、左大腿に障害を負った。退院後、神戸市の広報誌で見つけた障害者スポーツセンターのバドミントン教室に通い始め、当該センターの指導員の誘いを受けシッティングバレーボールを始めた。その後、2008 年と 2012 年にパラリンピックに出場する。障害者雇用枠で金融証券会社に入社、選手雇用ではないため当初は海外遠征 1 回 30 万円～40 万円を自己負担していた。他のメンバーもアルバイトや副業などを行って経費をまかなっていた。2008 年以降、国からの強化費やスポンサー支援が徐々に整い始め選手の負担は軽減された。2019 年選手を引退し、指導者としての道を歩んでいる。

識別番号 25 は 1985 年生まれ、2004 年プールへの飛び込み事故で頸髄損傷、四肢麻痺となった。その後 1 年半をかけたリハビリの中で基礎的な日常生活技術を身につけるとともに、競技性のある運動やトレーニングを行うことで体力や技術を向上させた。ここでのスポーツとの出会いが、その後の生活に大きな影響を与えた。国立職業リハビリテーションセンターに移り、さらに 1 年間をかけてリハビリを実施する中で車いすラグビーに惹かれていく。2008 年にクラブチームに入り本格的に車いすラグビーを行うようになる。2013 年、東京オリンピック・パラリンピック招致が決定するまでは遠征費など自費でまかなっていたがその後は、地方自治体や競技団体からの各種補助金等により負担が軽くなった。現在ではパラアリーナで十分な練習を積むことが可能となっている。また、現在は金融会社選手雇用で採用され競技に専念できる環境を得ている。

識別番号 60 は 1997 年生まれ、先天性の左手指欠損である。5 歳でラグビーを始めて以降、空手、陸上競技、ボクシングなど多様なスポーツ

に親しむ。ラグビーをプレーしつつも大学 1 年時に大学の障害者スポーツ専門の教員に勧められアルペンスキーも本格的に始めた。スキーでの最初の海外遠征は 2016 年、用具や旅費はスポーツマネジメント会社が負担してくれた。その後も、競技団体からの補助、企業スポンサー大学からの奨学金(パラアスリート支援)などにより、経済的な支援を受けることができた。大学 3 年時には平昌パラリンピックに出場し、入賞を果たす。大学卒業後は選手雇用で雇用され、遠征費等を負担してもらっている。スキーシーズン終了後は国内でナショナルトレーニングセンター等を活用し、ウェイトトレーニング、低酸素室を利用したトレーニングなどを実施している。これらの練習メニューは国立スポーツ科学センターが作成している。現在の所属先企業は現役引退後も雇用継続の可能性がある。

識別番号 29 は 1998 年生まれ、中学校 3 年の時に交通事故に遭い大腿部を切断した。リハビリの中で障害者スポーツの知見のある医師に出会い、その医師が主宰する義足の陸上競技クラブに加わる。陸上競技への関心はロールモデルとなる選手が識別番号 29 に会いに来てくれたことが大きい。高校の陸上部にも受け入れられ活動を続けた。大学 1 年の時にはリオデジャネイロパラリンピックに出場し走り幅跳びで 4 位入賞を果たした。この間、高校 3 年生の時から企業スポンサーの支援を受け、プロ選手として活動を継続している。

図表 6-1 は今回登場していただいた 7 人のパラアスリートの競技歴と経済的な基盤及びスポーツ環境等に関する記述と社会情勢の変化についてまとめたものである。識別番号 60 以外は後天的に障害を持った選手である。識別番号 19 はパラスポーツが日本に根付き始めたころに障害を負っている。パラスポーツに関する情報はリハビリテーション機関やその関係者からの人づてに得ている。また、このころはリハビリテーションの期間が制限されておらず、長い、リハビリテーション期間の最中パラスポーツに関する情報を得、スポーツに出会っている。識別番号 26、識別番号 39、識別番号 25 にも同様の状況が見られる。パラスポーツの情報も少なく、インターネットの普及率も低かった当時はリハビリテーション機関等パラスポーツに関連する機関でなければ情報が得にくかったことが推察できる。識別番号 31 は自らパラスポーツに関する情報を積極的に

得ようとするもののすぐには情報を入手できなかった事例である。識別番号 60 は大学入学後、パラスポーツ専門の教員からパラスポーツへの導きがあり、スムーズにラグビーからパラスキーへ移行したことが読み取れる。

2006 年以降はリハビリテーション期間に制限が設けられ、従来のように長いリハビリテーション期間の最中にパラスポーツに出会うということが少なくなったと推察される。社会復帰する最低限の力を身につけたところに保険適用のリハビリテーション期間が終了することで、リハビリテーションの場でスポーツと出会うということは少なくなっていると考えられる。一方でインターネットの普及率は 2010 年で 78.2% であり、自ら望めば情報が手に入りやすくなっている。とりわけ 2013 年、東京オリンピック・パラリンピック招致が決定して以降は各種メディアに載るパラスポーツ関連の情報も増えている。パラスポーツに関する新聞記事数の増加を見てもそのことは明らかである。

選手生活を送るための経済的な基盤については識別番号 19 と 39 は選手生活全期間、識別番号 31 は 2015 年まで、識別番号 26 は大学卒業後から契約社員となるまで、識別番号 25 は 2014 年ころまで、共通して一般雇用あるいは遠征や合宿の時間を得るために非常勤職で得た収入を海外遠征等競技生活のために使う生活スタイルであった。また識別番号 26 はプロのパラアスリートとしての競技生活を切り拓いた一人であるが、100 社に依頼をして支援してくれたのは 3 社という状況であった。

2012 年日本スポーツ振興センターの、スポーツ振興くじやスポーツ振興基金を財源とした助成対象にパラスポーツ関連団体、選手も含まれるようになる。2012 年には組織基盤強化事業としての国際交流推進スタッフ育成やスポーツ活動推進事業、スポーツ団体大会開催助成の対象として日本パラスポーツ協会や関連団体が対象となった。2014 年にはスポーツ団体選手強化活動助成の対象団体として日本パラスポーツ協会が含まれるようになった。2016 年からはアスリート助成の対象にも加えられた。これらのお金の多くは日本パラスポーツ協会を通して、競技団体そして条件を満たす選手に助成されるようになり、選手の競技生活を支援する制度が整った。

2012年には企業からの支援を受けつつ競技を継続したいパラスポーツ選手と障害者の法定雇用率を上げたり、パラスポーツ選手を雇用することで社内活性化や企業イメージの向上等を図ったりしたい企業をつなぐ株式会社つなひろワールドが設立された。2014年からは同様のマッチングを行う JOC の就職支援制度アスナビの対象としてパラスポーツ選手も含まれるようになった。こうした制度のほかにも選手と企業を結びつける機会は飛躍的に多くなった。2013年以降も現役を続けた識別番号 26、識別番号 25、この時期以降に活躍を始めた識別番号 60、識別番号 29 は識別番号 19 の時代の選手と比べると企業からの支援、さらには日本財団パラリンピックサポートセンターを通じての支援、2013年以降広がった自治体からの支援などを受けることができ、経済的な不安は少ないといえる。これらの制度の多くは 2013年、東京 2020大会の招致が決まって以降に設けられたものである。100社を回って3社の賛同しか得られなかった識別番号 26と、高校3年生からスポンサーを得ることができた識別番号 29の違いがこの間の変化を象徴している。これらの制度の多くは現在も継続されており、パラリンピックのレガシーであり、選手の競技生活に大きな影響を与えている。

識別番号 25 はパラアリーナを拠点として活動していた。識別番号 60 はスキーのシーズンオフには国立スポーツ科学センター(JISS)がつくってくれた練習メニューをナショナルトレーニングセンター(NTC)でこなすことが多い。トップ選手の練習環境も東京パラリンピックを契機に整えられたものであり、競技力向上に大きな影響を与えていると考えられる。

最後に 7人の選手は、先天的障害、後天的障害の違いはあるものの全員スポーツが子どものころから身近にあり、スポーツ好きだったということが共通する。子どものころからスポーツを経験できる環境とスポーツ嫌いを生まない指導が障害のある人のスポーツ実施を促進させるための大きな課題といえる。



図表 6-1 選手のスポーツキャリアと社会変化

	1960	1970	1980	1990
社会情勢	64東京パラリンピック開催 74障害者スポーツセンター設立			98長野パラリンピック開催  ※90インターネット(IN)普及率0.02%
識別番号19				
キャリア	55誕生		78障害発生	92パラ出場 96引退
経済面			・非常勤職で遠征費等捻出	・車いす製造開発・指導者・地域クラブ立ち上げ
環境面			・1年間のリハビリ入つてによる情報獲得	
識別番号31				
キャリア		66誕生		96障害発生
経済面			84会社勤務	96会社退職
環境面				・市役所・障害者スポーツ協会等で情報探す・道場・クラブ・スポーツ施設利用最初は理解得られず
識別番号26				
キャリア			80誕生	99障害発生
経済面				
環境面				・障害者スポーツセンター等でリハビリ
識別番号39				
キャリア			82誕生	
経済面				
環境面				
識別番号25				
キャリア			85誕生	
経済面				
環境面				
識別番号60				
キャリア				97誕生(先天障害)
経済面				
識別番号29				
キャリア				98誕生
経済面				
環境面				

※インターネット普及率はWorld Bank "Internet users for Japan (ITNETUSERP2JPN)" 年次データ

2000	2010	2020			
	11スポーツ基本法施行	19NTCイースト供用開始			
	12JSC選手強化対象にパラ選手が追加される,つなひろワールド設立				
	13東京パラリンピック決定	21東京パラリンピック開催			
	06リハビリ期間の見直し(短縮)				
00 (IN) 普及率30.0%	10 (IN) 普及率78.2%	20 (IN) 普及率90.2			
00パラ出場	02世界選手権出場	14競技専念			
妻の支え有	06施術所開業	14施術所廃業・補助金			
	15-16スポンサー支援				
00パラ出場	04パラ出場	08パラ出場	12パラ出場	16パラ出場	21パラ出場
	05~08プロ選手その後アルバイト等.09契約社員.15正社員				
	・支援が得られたのは3/100社				
00障害発生	01バラスーツと出会う	08パラ出場	12パラ出場	19引退	指導者
	遠征1回数十万円自己負担06一般雇用(障害者枠).08以降、国からの援助が徐々に良くなる				
	・1年の入院生活 障害者スポーツセンター				
	04障害発生	12パラ出場	16パラ出場	21パラ出場	
	自治体・スポンサーからの支援21会社嘱託社員				
	入院・リハビリ約3年(バラスーツと出会う)		18パラアリーナで練習		
02ラグビー始める		16バラスキー	18パラ出場	オフシーズンはNTCで練習JISSが支援	
		当初から企業、大学、マネジメント会社から援助有			
				選手雇用	
	中3障害発生.リハビリ中陸上クラブ主催者(医師)、陸上選手と出会う				
		高2・本格的に陸上開始		16パラ出場	
		高3プロアスリート			
				選手雇用	

(第6章担当:藤田紀昭)



# 第 7 章

## 本調査のまとめと いくつかの提言

ここまで見てきた調査結果を、最初に示した障害者のスポーツ実施に関する 7 つの視点からまとめ、考えられる提言を述べる。今回の調査はあくまで 100 人の事例調査であり、共通する 7 つの視点とはいえ、内容は多岐にわたり多様である。ここで得られた知見をパラスポーツの普及・強化の施策へとつなげるためには量的な調査の実施が必要であろう。今回の調査結果は、そうした政策につなげるための量的調査実施の際の基礎資料としての価値が高いと考える。

## 1. スポーツを始める前の状況(スポーツへの関心の有無)

- ・スポーツへの関心はすべての出発点となる条件である
- ・幼少期の楽しい運動経験が将来のスポーツ継続に直結している
- ・後天的障害者では受傷前のスポーツ経験がスポーツへの再社会化に影響を与えている
- ・スポーツを始める前の関心形成に関する施策が必要

インタビュー結果から、障害のある人がスポーツを実施するための最も基礎的な前提条件として、スポーツそのものへの関心や好意的態度が存在していることが確認された。多くの選手は障害の発生時期にかかわらず、幼少期から身体を動かすことが好きであったり、学校体育や地域スポーツ活動を通じて「楽しい経験」や「達成感」を積み重ねたりしていた。

特に先天的障害のある選手では、障害のない子どもたちと一緒に遊びやスポーツを経験したことが、その後パラスポーツへ移行する際の心理的ハードルを大きく下げていた。一方、後天的障害者においては、受傷前に部活動や、地域クラブ・民間クラブなどでのスポーツ経験があり、スポーツへの関心があった人は、障害が発生後に再びスポーツに向かう傾向が強かった。しかし、受傷前にスポーツ経験が乏しい人が、障害後すぐにスポーツに関心を持つケースは限定的であり、何らかの強い外的要因(リハビリ現場での体験、メディアでのパラスポーツ観戦など)が必要であった。

このことは、障害者スポーツ推進においては、単なる「障害者向けプロ

グラムの整備」だけでは不十分であり、障害の有無を問わず幼少期から豊かなスポーツ経験を保障する社会環境づくりが極めて重要であることを示唆している。

障害の有無にかかわらず、幼少期からスポーツに親しむ機会を保障することが、将来的な障害者スポーツ参加の基盤形成に直結すると考えられる。それゆえ、障害者スポーツ推進施策は、障害発生後の支援に限定せず、子ども期からの包括的なスポーツ環境整備を重視する必要がある。

具体的には、学校体育において運動嫌い、スポーツ嫌いを生まないこと、普通学校と特別支援学校が連携したインクルーシブ体育授業の制度化、共生型地域スポーツクラブの整備支援、障害のある子どもが自然にスポーツ経験を積める環境づくりを国や自治体が行うべきであろう。ただし、インクルーシブすればよいというわけではなく、適切な配慮が伴わなければポジティブな運動経験とならない場合がある。例えば視覚障害が進行し、だんだん見えにくくなってくると、周りの仲間と同じように活動できなくなったり、障害があることを隠そうとして、スポーツに対して消極的になったり、という事例が複数確認された。子どもや児童・生徒の困りごとに気づき、その部分をアダプテッドして、参加しやすくすること、また、障害のある子どもや児童・生徒が特別扱いされていると周りの子どもたちに感じさせないような配慮が必要である。

そのためには学校であれ、地域や民間のスポーツクラブであれ、スポーツの指導者が障害のある子どもに対する指導の知識と経験を持っていることが非常に重要である。障害があろうとなかろうとスポーツや運動を楽しく感じさせるスキルが重要である。

## 2. 障害者スポーツに関する情報を得ている

- ・先天的障害者：家族・学校、パラスポーツ関係者からの情報提供が中心
- ・後天的障害者：医療・リハビリ現場が主要な情報源
- ・体系的な情報提供体制が十分でなく、偶然性に依存した情報取得が多い
- ・障害者スポーツ情報提供体制の構築が必要

100名のインタビューから、障害者スポーツに関する情報入手の経路には明確な傾向が見られた。先天性障害者ではパラスポーツ関係者や、家族・親族や学校関係者からの情報提供が多く、後天的障害者では医療関係者(医師、理学療法士)が中心的役割を果たしていた。

また、近年の若年層ではパラスポーツ指導者や競技団体関係者に加え、メディアや SNS を通じた情報取得も増加している。しかし、依然として「偶然の出会い」に依存する側面があり、体系的かつ網羅的な情報提供システムは十分に整備されているとは言い難い。

先天性障害者の場合は学校や療育機関で体育やリハビリテーションにかかわる人がパラスポーツに関する情報を把握しており、関心のある子どもや親を子どものスポーツ活動へと導けることが必要である。リハビリテーション期間を十分に確保できたかつてのリハビリテーション機関や視覚特別支援学校などにおいては、パラスポーツの情報取得、ファーストアクセス、さらにはスポーツの受け皿と受け皿へのアクセスに関する課題を一括して解決できる仕組みが存在した。これらは障害のある人がスポーツに入ってきやすい仕組みのヒントとなろう。

また、後天的障害者の多くは、もし医療現場でパラスポーツの情報に触れていなければ、スポーツ実施、あるいは再開のきっかけを得られなかった可能性を示唆している。これは医療とスポーツの連携の重要性を裏付ける結果である。障害のある人に確実にスポーツに関する情報が提供される仕組みを作る必要がある。例えば、医療機関において、リハビリテーションに関わる医師、看護師、理学療法士や作業療法士、義肢装具士などがパラスポーツに関する情報を持ち合わせていることや、地域の障害者スポーツ協会やパラスポーツ指導者協議会と医療機関が連携し、障害を持った人にパラスポーツに関する情報が行き渡るようにすべきである。医療関係者の養成・育成研修の中でパラスポーツに関わる情報を提供したり、医療機関にパラスポーツに関する情報冊子やパンフレットが置いてあり、誰もが必ず目にするようにすることが考えられる。

この課題を解消するため、国および自治体は障害者スポーツに関する情報を集約・発信して、必要な情報が障害のある人に届く制度を整備す

る。さらに障害発生時、退院時、復学时、就労時といったライフイベントごとに適切な情報が確実に提供される仕組みを構築すべきである。あわせて、医療機関・教育機関・福祉機関・競技団体間の情報連携を制度化し（例えば自治体レベルで関係者が一堂に会する協議会の設置など）、個人の状況に応じたスポーツ参加支援を可能とする体制整備が求められる。

具体的には、それぞれの地域における障害のある人のスポーツへの社会化（どのようにしてスポーツを始めるようになるか）のビジョンを策定することが重要である。そのビジョンに沿ってパラスポーツの情報を提供する施策を展開すべきである。先天的な障害のある人であれば、療育施設・学校（特別支援学校・普通学校）から地域のスポーツ組織へという流れを想定し、療育施設や学校とパラスポーツとの連携を図ること。例えば、特別支援学校をパラスポーツ協会関係者やパラスポーツセンター、パラスポーツチームの選手やコーチが訪れ、障害のある子どもたちにスポーツキャリアの可能性を示す事業や、特別支援学校の児童・生徒が社会見学の一環としてパラスポーツセンターなどを訪問したり、地域の総合的な障害者スポーツ大会を観戦する事業などが考えられる。

後天的障害者であれば、リハビリテーションを行う医療機関にパラスポーツ関係者が定期的に訪れ、スポーツ相談を行ったり、地域のパラスポーツチームやクラブ、関連組織、パラスポーツ紹介動画にアクセスできる QR コードなどの一覧を掲載したパンフレットを常時置いたりすることなどが挙げられる。

### 3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある

- ・情報だけでは参加につながらない
- ・ファーストアクセスには人的支援が不可欠
- ・ファーストアクセス時の心理的ハードルへの配慮や体験と勧誘が継続への転換点となる
- ・情報取得がファーストアクセスにつながる仕組みを検討すべき

情報が存在しても、それだけではスポーツ参加には結びつかない場合がある。そこにはスポーツへの関心、少なくともスポーツが嫌いではないことに加え、実際にスポーツの場へ足を運ぶ最初の機会(ファーストアクセス)が必要である。多くの選手は、指導者や知人の付き添い、家族の支援、あるいはリハビリ現場での体験プログラムを通じて初めて競技の現場にアクセスしていた。また、ファーストアクセスの場で競技を体験し、楽しさを実感し、周囲から勧誘されることで継続的活動へと発展するケースが多かった。このことは、単なる競技の体験にとどまらない。その競技をやっている場所を知り、スポーツの現場へのアクセス方法を知り、そして、同様の障害のある人の存在を知り、同様の障害のある人たちがスポーツをしている姿を見ることで自分のスポーツ実施についての可能性を知ることが含まれる。それゆえにファーストアクセスは極めて重要である。

また、「知らない場所に一人で行く不安」がスポーツ参加の阻害要因となっている場合もあった。このことからファーストアクセスの支援の重要性が示唆された。こうした心理的負担や移動上の困難により、個人単独での参加は大きな障壁となる場合があるからだ。

これらを踏まえ、自治体や地域の障害者スポーツ協会等はスポーツに関する情報を提供することに加えて、医療機関、学校、福祉施設等と連携し、スポーツ現場への同行支援や体験プログラムを恒常的に提供する「初期参加支援」などの制度を検討することや、パラスポーツ発掘イベント等に引き続き、継続的にスポーツを実施する場所への最初のアクセスの支援、障害者スポーツセンター等における定期的なパラスポーツ体験プログラムの開催等により、障害のある人が安心してスポーツ活動へ移行できる仕組みを検討すべきであろう。

今回の報告書の第 3 章で記述した情報提供者、スポーツ開始場所、開始時の重要他者は、いずれもファーストアクセスに深く関わっているものと考えられる。視覚障害に関しては視覚特別支援学校の影響が大きく、先述のように情報提供から、ファーストアクセス、スポーツ実践の受け皿から、日常的なアクセスまでをカバーしていることもまれではなかった。それだけに視覚障害においては視覚特別支援学校の教員の影響が大きいことが考えられ、視覚障害スポーツに関する情報や指導経験のある教

員が配置されることが望ましいと思われる。ただし、普通学校に通学する視覚障害者も少なくないことを考えると、普通学校においてもパラスポーツに関する情報を有している教員の存在は重要である。

「2. 障害者スポーツに関する情報を得ている」とも重複するが、先天的な障害の場合、障害種別によらず、家族や学校(特別支援学校・普通学校)関係者、一般のスポーツ指導者などの影響を受けていることがある。どのようなスポーツが可能か、どこに行けばそれができるのか、どこに行けば指導が受けられるのか、といった情報が学校、一般スポーツ施設、医療機関などから家族に提供されることが重要である。とりわけ、子どもたちが必ず通学する学校関係者や療育関係者が情報を有していることが重要である。

後天的な障害者の場合は医療関係者や障害者スポーツ関係者から、本人や家族に情報が伝わり、ファーストアクセスに結びつくことが考えられる。この点で医療関係者と障害者スポーツ関係者、あるいは医療関係者と福祉関係者の連携は重要である。

#### 4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある

- ・全選手にクラブ、チームなどスポーツ継続拠点が存在していた
- ・帰属意識が継続を支えている
- ・地域におけるパラスポーツクラブ・チームを支援、育成することが必要
- ・全てのスポーツ指導者がパラスポーツに関する知識や指導技術を身につけることが必要

全インタビュー対象者には、競技を続けるための「受け皿」となるクラブ・チーム、学校部活動、競技団体が存在していた。この受け皿は単なる練習場所ではなく、仲間とのつながり、帰属意識、指導体制を含む「社会的基盤」として機能している。受け皿の有無が競技継続を決定づける要因の一つと考えられる。今回の調査では、自分でクラブやチームを作ったという人もいたが、多くのパラアスリートたちは偶然の出会いを通じて自分のやりたいパラスポーツのチームやクラブと出会い、競技を継続させて

いた。裏を返せば、そうした受け皿が居住地近くにはない人はスポーツを継続することが難しく、結果として今回の調査対象とはならなかった可能性がある。

このことに加え、2023年スポーツ庁のスポーツ審議会健康スポーツ部会障害者スポーツ振興ワーキンググループが公表した中間報告が示すように、障害のある人がより身近なスポーツ施設で日常的にスポーツを継続させることができるようにするためには、地域の全てのスポーツ施設が障害のある人にとっても使いやすく、パラスポーツに関するノウハウを持った人材が、より身近に配置されるべきである。各自治体や日本スポーツ協会をはじめスポーツ指導者を養成する機関はパラスポーツのチームやクラブの組織化、育成、スポーツ指導者養成に際してはパラスポーツに関する知識や情報を有する指導者の養成及び育成が必要である。既存の地域スポーツクラブへの障害者スポーツ機能の付加や、地域移行される部活動においても障害のある子どもたちを受け入れできるよう支援すべきである。

現在、JPSA、JSPO、JOCによって共同で指導者の共通フレームワークづくりが進められているが、共通フレームワーク、指導者養成の講習内容の一つとして障害者のスポーツ指導の基礎知識を必ず扱うべきである。

## 5. 継続的なアクセス方法の確保

- ・継続的スポーツ活動には移動手段が不可欠
- ・幼少期においては家族負担に依存する傾向
- ・近隣のスポーツ施設やクラブ等での受け入れ体制やアクセス(移動・施設利用)支援の充実が必要

交通手段、送迎、施設利用制度など、継続的に通える仕組みの有無が参加継続を左右していることは明らかである。とりわけ、車いす利用者でまだ運転免許を取得できない年齢の子どもたちの移動に関しては親が送り迎えできることがスポーツ継続の条件となる。スポーツを行う場所が遠い場合、あるいは公共交通機関の便が悪い場合、そして、親が仕事等

で送り迎えの時間が取れないような状況においては子どもたちは継続的なスポーツ実施が困難になる。他方、子どもたちのスポーツ実施場所が居住地に近ければ、通うことが可能かもしれない。

識別番号 43 の選手は移動手段がなく、自分で運転免許を取得してから車いすテニスの練習に通えるようになった。もし近隣に利用可能なテニスクラブやテニスコートがあり、指導者がいて、障害のない人とともにテニスの練習ができる環境が整っていれば中学校・高校時代から車いすテニスに取り組めたかもしれない。あるいは自治体に移動支援があり、スポーツの実施にも利用できる制度であれば継続的なスポーツ実施が可能であったはずである。今回の調査対象となった人はどのような形であれ、この点がクリアされている人ばかりである。継続的なスポーツ実施における移動手段の確保は非常に大きな課題である。

子ども期の運動、スポーツ経験が少なく、スポーツに関心を持たずにいる人や自分にはスポーツが難しいと思い込んでしまう人を生まないためにも障害のある子どもたちのスポーツ参加支援が必要である。パラスポーツセンターが実施する子ども対象プログラムや地域クラブにおける障害のある子どもの参加に際しての移動の経費を補助する制度などは検討されるべきである。

## 6. 社会的支援・経済的支援

- ・競技レベルや障害の内容によって支援の在り方は様々である
- ・本調査の対象者に関しては雇用先と自治体支援を受けている人が多い
- ・選手雇用制度が競技継続を支えているが聴覚障害に関しては支援が少ない
- ・経済的支援制度の住み分け、共生社会形成に向けての選手自身の姿勢が重要

本調査においては社会的支援や経済的支援に関するインタビュー内容やスポーツ継続における重要な他者に関する項目がこれに該当する。スポーツを実施するにあたって、選手は多様な支援を様々な人から受け

ていた。障害のある子どもたちに対しては当然家族の支援が大きいし、競技レベルが高く国際大会に出場するような選手は雇用先の勤務時間や経済的な支援、自治体からの助成金などによる支援を受けていた。

経済的な支援に関しては 75 名が何らかの支援を受けており、主な支援元は雇用先(55 名)と自治体(21 名)であった。東京パラリンピック招致決定以降、顕著に増えてきた選手雇用制度は競技専念を可能にする重要な基盤となっている。一般雇用においても大会参加や合宿参加時の職務上の配慮などがなされていた、しかし、聴覚障害のある選手では支援が乏しい現状も浮き彫りとなった。

これら経済的な支援を受けられるのは国際大会で活躍が期待されるトップレベルの選手が多い。一部、そのレベルを目指す選手への支援もみられたが、持続可能な選手育成、国際大会での活躍を考えると、準パラリンピックレベルの選手への支援があってもよいと思われる。支援元により、企業はトップレベルの選手、競技団体や自治体はそこを目指す選手への支援等、選手のレベルに応じた住み分けを考えてもよいかもしれない。

また、支援を受ける選手たちは一方的に支援を受けるだけではなく、自分の活躍や行動が企業や自治体、次世代にどのような好影響を与えることができるかを考え、理解し、そのための社会的貢献活動に積極的に取り組む姿勢が必要である。単に支援を受けて強くなるだけではなく、そのことが共生社会の形成にどう役立つか選手自身も考える必要がある。

## 7. モチベーションの維持

- ・成功体験が意欲を強化
- ・仲間とロールモデルが重要
- ・目標設定が継続を支える
- ・デュアルキャリア・セカンドキャリア、生涯スポーツへの支援が重要

本研究では、アスリートのモチベーション形成・維持に共通する要因として三点が明らかとなった。第一に、学齢期または競技開始初期に「楽しい」と感じる肯定的経験をj得ていることである。幼少期からの運動経験

は運動有能感の形成につながり、当初苦手意識を抱いていた場合でも、専門的指導や障害特性に配慮した多様な運動経験を通じて、主体的にスポーツへ取り組む意識へと変容していた。第二に、身近な活動拠点と集団への所属が継続を支えていた点である。協会、クラブ、学校等の受け皿において、仲間やロールモデル、理解者の存在が競技意欲を高めていた。第三に、客観的な目標設定と主体的な努力であり、専門知識の習得や実践を通じて競技力向上を図る姿勢が確認された。以上のことから、身近な競技環境と支援体制の整備がモチベーション維持に不可欠であることが示唆された。また、将来を見据えたデュアルキャリアや生涯スポーツへの支援も重要であり、競技引退後もスポーツと関わり続けられる仕組みの構築が求められる。

(第7章担当:藤田紀昭)

## おわりに

本調査は2019年3月から始まり、100人目となる2025年1月までの間、一人ひとりとじっくりと向き合い、オンラインも含め、ライフストーリーを語っていただいた。調査にあたっては、練習場所、勤務場所、キャンパスライフを送る場所、生活圏に近い会議室などを訪問することで、背景となる生活も含む雰囲気把握することができた。生活の中にスポーツがどのように取り込まれていったのかを言語化するために、時には過去の嫌な思い出に触れることもあったが、私どもの問いかけに丁寧に耳を傾け、素直な言葉で語ってくださったことに、この場をお借りして感謝の意を表したい。

さて、本調査期間中に2つの東京大会開催決定・実施があった。それは、パラリンピックとデフリンピックである。パラスポーツやデフスポーツにかかわる国際大会の開催決定は、第6章にも記載があるように、選手強化をはじめとする支援体制、大会開催に向けた国の施策に大きな影響を与え、障害者のスポーツ環境を劇的に変化させた。さらに、スポーツ基本法と第3期スポーツ基本計画には障害者のスポーツを推進するための文言や数値目標も掲げられた。東京開催決定前のスポーツ環境を知る立場からすれば画期的であり、調査対象者の語りとしてもリアルに示されている。これらの変化が大会終了とともに収束するのではなく、その影響が国内に浸透していくことが必要である。

スポーツは、トップアスリートだけのものではなく、グラスルーツレベルから幅広く人々の生活に位置付けられるものである。そのために何が必要か、今回の調査対象となった皆さまから貴重な道標をいただいた。それは、できることに目を向けて創意工夫を重ねるというチャレンジマインドである。この考え方は「その人にあったスポーツ(アダプテッド・フィジカルアクティビティ、アダプテッド・スポーツ)」と一致する。しかし、スポーツのメリットを享受できていない多くの障害のある人が存在することを忘れてはいけない。加えて、本調査では知的障害や精神障害のある人を対象としたインタビューには着手できていないことから、それらを踏まえた上で今回得られた知見を基に、どの時期にどのような経験や支援があれば

スポーツを日常生活に取り込むことができるのかについて、立場の異なる人々が一緒に考え、それぞれの視点で実践できることを行動に移していく、そのような社会になることを願っている。

本調査にあたり、インタビューに応じてくださった皆さま、事務局としてご支援いただいたヤマハ発動機スポーツ振興財団の皆さまに改めて感謝を申し上げます。

(齊藤まゆみ)

## 執筆者紹介（掲載順，〈〉執筆箇所）

藤田 紀昭 〈はじめに，第1章，第2章，第6章，第7章〉

日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科 教授

日本アダプテッド体育・スポーツ学会 会長

日本パラスポーツ学会 常任理事

スポーツ庁・スポーツ審議会健康スポーツ部会委員

日本パラスポーツ協会技術委員会 副委員長

ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・

プロジェクトリーダー

河西 正博 〈序章，第4章〉

同志社大学スポーツ健康科学部 准教授

一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会アダプテッド・スポーツ  
科学専門領域 評議員

日本アダプテッド体育・スポーツ学会 理事

2014 アジアパラ競技大会・パラバドミントン日本代表コーチ

日本車椅子バスケットボール大学連盟元理事

ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・

プロジェクトメンバー

小淵 和也 〈第3章〉

公益財団法人笹川スポーツ財団 政策ディレクター

スポーツ庁・スポーツ審議会健康スポーツ部会障害者スポーツ振興  
ワーキンググループ 委員

東京都スポーツ振興審議会 委員

日本パラスポーツ協会技術委員会アドバイザー

日本パラスポーツ協会(JPSA) 公認上級パラスポーツ指導員

ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・

プロジェクトメンバー

齊藤 まゆみ 〈第5章, おわりに〉

筑波大学体育系 教授

日本アダプテッド体育・スポーツ学会 副会長

一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会アダプテッド・スポーツ  
科学専門領域 評議員

日本パラスポーツ協会科学委員

茨城県障がい者スポーツ研究会 会長

ヤマハ発動機スポーツ振興財団障害者スポーツ・  
プロジェクトメンバー



## 附録

# キャリア調査インタビュー一覧

※本文中の「識別番号」は、一覧の「通し番号」「識別記号」の番号と同じ調査対象者である

■ 2019年2020年度

※バラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載  
 ※一般雇用には障害者雇用を含む

項目	19-A	19-B	19-C
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	1	2	3
生まれた年	1967	1978	1956
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生前年齢	24	15	25
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳	陸上競技	パラアイスホッケー
競技開始年齢	27	25	25
競技レベル	国際入会出場	国際入会出場	国際入会入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセン指導員 ・看護師(妻)	・義肢装具士 ・クラブメンバー	・リハセン指導員
バラスポーツ開始場所	・リハセン	・障害者スポーツセンター ・地元陸上競技場	・リハセン
バラスポーツ情報提供者	・リハセン指導員	・義肢装具士	・リハセン指導員
バラスポーツ開始場所へのアクセス	・入院時のため特に必要なし	・義肢装具士	・入院時のため特に必要なし
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・チームメンバー	・義肢装具士 ・陸上仲間 ・妻	・妻 ・仲間 ・監督・コーチ
バラスポーツ継続状況	妻やチームメンバーの介助を受け週2回程度。近くのバリアフリープールで	夕方まで仕事をし、その後練習。帰宅は22時、23時。自宅近くの陸上競技場が拠点。車で移動。	週末早朝に長野県に向き練習。この競技をなくしたくないという思いが強い。
支援	・勤務先・公的機関	・公的機関	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役	健全者の記録にだけ近づけるか。障害者スポーツの環境整備に貢献したい。	次世代の育成、競技普及にかかわりたい。指導者は目指していない。
その他特記事項	水泳はパラリンピアンへの講演をきっかけに開始した。	パラリンピック出場経験あり。地元で講演を年間40～50ほどこなしている。	意外と経済的負担が大きいのでは若手が育たないのではないかと考えている。パラリンピックメダリスト。

\*1 子どもの時から他スポーツもしていたが、進行性の障害のためバラスポーツを競技として始めたのがこの年齢である

項目	19-D	19-E	19-F
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	4	5	6
生まれた年	1996	1976	1976
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	28
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	陸上競技	車いすフェンシング
競技開始年齢	11	40 *1	28
競技レベル	国際大会出場	国内大会上位	国際大会出場
バラスポーツ開始時の重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母</li> <li>・母の友人</li> <li>・障害者卓球クラブ監督</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族</li> <li>・地元パラリンピアン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻</li> </ul>
バラスポーツ開始場所	福祉会館（障害者卓球クラブ）	発掘事業	県総合福祉センター（車いすバスケットボールクラブ）
バラスポーツ情報提供者	母親の友人（障害児を持つ）→母親	メディア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻</li> <li>・メディア（リアル）</li> </ul>
バラスポーツ開始場所へのアクセス	母親	本人	本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	なし	ポジティブ	ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弟（同じ障害を持つ選手）</li> <li>・中学卓球部顧問</li> <li>・車いす卓球の師匠</li> <li>・練習相手としての父</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻</li> <li>・仲間</li> <li>・監督</li> <li>・トレーナー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻</li> <li>・練習相手（健常者）</li> </ul>
バラスポーツ継続状況	小学校で障害児卓球クラブで卓球を始め、中高と卓球部に所属。顧問の理解やバリアフリーの体育館があったことが幸いした。弟と切磋琢磨。	公務員となり生活が安定したことが継続の要因の一つ。毎週末に練習が大会。海沿いの堤防で練習。	現在練習中心の生活。アスリート雇用と同じ条件。地元高校や近県大学で練習。
支援	勤務先・スポンサー・公的機関	なし	勤務先
将来ビジョン	2020後も現役続行。引退後は講演などをしてほしい。経験を下の世代に伝えたい。	仕事と両立させながらどこまでできるか考えたい。競技成績が上がることが動機づけになっている。	2020でメダルを取りたい。いつ引退するかは考えていないが何らかのスポーツに関わっていたい。
その他特記事項	最初は公務員だったが、練習環境を求めてアスリート雇用。15年に弟は死去。	普通学校教員がバラスポーツ情報を知っていたらもっと早く始められたかもしれない。	28歳で車いすバスケットボール、30歳で車いすテニス、39歳で車いすフェンシングを始めた。上位入賞できる条件を考えて競技変更。

項目	19-G	19-H	19-I
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	7	8	9
生まれた年	1969	1969	1971
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	28	36	21
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	軽度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	アーチェリー	射撃	水泳
競技開始年齢	29	36	23
競技レベル	国際大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	・会社の知り合い	・病院の教授	・友人（水泳） ・メディア ・後輩（PT）
バラスポーツ開始場所	・地元企業の倉庫（健常チーム）	・ゴルフ練習場	・地元スイミングクラブ（父親が所属）
バラスポーツ情報提供者	・会社の知り合い	・病院の教授	・後輩（PT）
バラスポーツ開始場所へのアクセス	・会社の知り合い	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・家族 ・クラブの仲間	・妻 ・病院の教授	・受傷前からの水泳仲間 ・家族
バラスポーツ継続状況	現在健常者クラブと障害者クラブ（理事・強化担当）に所属。障害者の大会ではクラスがなくなったためパラリンピックに出場できない。国際大会に帯同している。	労災のため経済基盤は安定している。受傷後ゴルフをはじめいくつか競技をしたが、16年発掘事業に参加し、射撃を始めた。射撃はかなり費用がかかる。	週に4～5日、一般のスイミングクラブで子どもたちに水泳を指導しつつ自分の練習を行っている。
支援	・なし	・なし	・なし
将来ビジョン	今後も健常、障害者両クラブに所属しアーチェリーを継続したい。	東京2020パラリンピック後どうなるか不安。日本障害者スポーツ射撃連盟が存続できるようにしたい。	東京2020パラリンピックに向けて取り組む。選手として、コーチとして今後も水泳を続けていく。
その他特記事項	国際大会チーム監督として帯同。クラス分けの厳密化によりパラリンピックでのクラスがなくなる。健常者クラブにも所属。	2018年フランスワールドカップに監督として参加。	受傷前から水泳をしており、高校総体や国体にも出場していた。

項目	20-A	20-B	20-C
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	10	11	12
生まれた年	1981	1975	1973
性別	女	女	男
居住地域	関東	関東	九州
調査時身分	一般のち選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	13	0	0
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳/トライアスロン	アルペンスキー	アーチェリー
競技開始年齢	26	26	21
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
バラスポーツ開始時の重要な他者	・パラ水泳コーチ	・義肢装具士	・ロス五輪オリンピック(ネロリ・フェアホール) ・療育センター職員
バラスポーツ開始場所	・フィットネスクラブ	・スキー場(チェアスキー教室)	・障害者スポーツセンター
バラスポーツ情報提供者	・メディア(インターネット)	・義肢装具士	・テレビ ・療育センター職員
バラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
バラスポーツ開始前からのスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	・会社のCSR ・会社の社長 ・サラ・レイナートセン選手 ・トライアスロンコース仲間	・アメリカ人コーチ	・地元アーチェリークラブの存在 ・妻
バラスポーツ継続状況	2008年～水泳、2013年～トライアスロン。 2019年から会社の支援を得て、競技活動＝業務となった。競技継続には会社の理解が大きい。	2009年からアメリカを拠点として北京パラを目指している。	地元パラアーチェリークラブで活動。役職も務めている。選手雇用でないため遠征費とかは出ないが遠征時には配慮有。
支援	・勤務先	・勤務先	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役としてトライアスロンを続けていきたい。	現役の間は将来のことは考えにくい。	強化選手や代表選手を常に目指していきたい。普及と強化に関わっていきたい。
その他特記事項	13歳で障害発生以降、体育を含め一切スポーツをしなかったが自分を変えたくて3～10歳まで経験した水泳を開始。パラリンピック出場を契機に会社の理解が得られた。	子どもの頃は障害受容ができていなかった。周囲の人の歩み寄りが欲しかった。現在は競技に専念できる雇用形態である。	地元アーチェリークラブの代表。競技人口の少なさが役員継続の要因の一つ。デュアルキャリアを実践している。

項目	20-D	20-E	20-F
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	13	14	15
生まれた年	1983	1967	1970
性別	男	男	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分	自営	選手雇用	自営
障害発生年齢	0	29	16
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	中度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	車いすテニス	水泳
競技開始年齢	9	33	36
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
バラスポーツ開始時の重要な他者	・卓球に誘ってくれた小学校の友人 ・母親（卓球国体選手）	・福祉関係職員 ・車いすテニスクラブリーダー ・入院仲間	・障害者水泳指導者
バラスポーツ開始場所	・小学校（卓球クラブ）	・地元市内テニスコート （クラブの練習場所）	・民間スポーツ施設
バラスポーツ情報提供者	・地元体育館ポスター	・市役所 ・社協	・パラ水泳指導者
バラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・パラ卓球クラブチーム監督 ・卓球仲間 ・弟 ・ライナー・シュミット選手	・クラブチーム仲間 ・同じクラスのライバル選手 ・指導者	・仲間 ・妻
バラスポーツ継続状況	高校卒業後一時卓球を中断していたが22歳から再開。仕事を一旦やめ大学へ。卒業後家業の傍ら卓球を続けている。	2010年にクアードクラスに転向し、翌年から国際大会出場。パラ出場を目指して、20試合くらい転戦。現在東京パラを目指している。	現在民間スポーツ施設や障害者スポーツ施設で水泳を継続している。競技をすると気持ちの浮き沈みがあるが、意欲が下がった時には健康づくりで始めたのだからと考え、気軽に水につかる。
支援	・勤務先・スポンサー	・勤務先・公的機関	・なし
将来ビジョン	障害があってもスポーツをすることは可能なことを子どもや親に伝えていきたい。	まずは東京パラリンピック。この年で頑張っていることをアピールしたい。引退後は後継を育てたい。	太らないよう継続したい。引退ということは考える必要はない。
その他特記事項	弟は日本パラ卓球協会の広報担当。	選手雇用、公的補助のおかげでコーチについて練習できるようになった。	パラ水泳を始める前、自ら民間スポーツ施設で様々なことをやり、その中で水泳を継続するようになった。その後、パラ水泳を知り、大会に出場するようになった。

項目	20-G	20-H	20-I
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	16	17	18
生まれた年	1993	1990	1997
性別	男	男	女
居住地域	東海	東海	北海道
調査時身分	その他	選手雇用	学生
障害発生年齢	0	18	14
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	中度
学校種別	普通学校→特別支援	普通学校	普通学校
現在実施競技	陸上競技	車いすバスケットボール	車いすバスケットボール
競技開始年齢	14	20	18
競技レベル	全国入会出場	国際入会出場	国際入会入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	体育教師 (特支)	・ネット情報 ・チームのメンバー	・特になし
バラスポーツ開始場所	・特別支援学校 (中学)	・特別支援学校体育館 (クラブチーム練習)	・クラブチームの練習場
バラスポーツ情報提供者	・中学校教師	・インターネット	・小学校時代から地元チームがあることを知っていた (大会が行われていた)。
バラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人 (特支)	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・特別支援学校教師 (陸上部コーチ) ・両親	・最初に声をかけてくれた地元チームのメンバー (尊敬している) ・競技自体の魅力 ・海外の選手からの刺激など	・チームの主宰
バラスポーツ継続状況	高校までは特別支援学校で練習。その後障がい者アスリートクラブ (陸上クラブ) で月2回、家での自主トレ (ローラー)	バスケットボールが面白くなり、地元チームの練習に加えて自分で体育館を借りて練習したりするようになった。現在、週に5日か6日練習している。地元チーム以外に県外のチーム練習にも参加している。	これまで好きだから続けていた車いすバスケットボールで、日本代表として活躍することが新たな目標として加わった。国際大会に出場して、多くの人の目に触れることで、これまで支援してもらった人たちに、自分はこれだけのことができるようになったのだと伝えることができる。感謝を伝えられる。
支援	・なし	・勤務先・公的機関	・スポンサー・公的機関
将来ビジョン	もっと速く走れるようになってパラリンピックを目指したい。	41、2歳の時にパラリンピックがあるのでそこまではトップ選手としていきたい。若い選手に日本代表はこういうものだということを伝えたい。	将来は教員になりたいと考えている。現在、大学でも教職課程を履修している。そのため、日本代表の活動は、ある程度の期限を持って進めていきたいと考えている。クラブチームの活動は、一生涯のスポーツとして続けられる限り続けていきたい。
その他特記事項	阻害要因は、ケガや体調不良の影響。下がった気持ちを立て直す際に大きな影響となるのは、コーチの存在。	パラリンピック開催決定後の社会的変化が影響しているといえる：仕事の形態：学校事務 (嘱託・アルバイト) → 保険会社へ。金銭の心配なく練習時間も確保できるようになった。県からの強化費も受けられるようになった。	車いすバスケットボールをやると、ただの障害者ではなくて、アスリートでいられる。ネガティブだった自分のイメージも変わった。障害に対する考え方、アスリートのマインドを教えてもらった。

項目	20-J	20-K	20-L
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	19	20	21
生まれた年	1955	1980	1988
性別	男	男	男
居住地域	九州	関東	関西
調査時身分	その他	自営	選手雇用
障害発生年齢	23	24	0
障害内容	肢体不自由	視覚障害	肢体不自由
障害程度	重度	重度	軽度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	車いすテニス	柔道	パラバドミントン
競技開始年齢	26	25	21
競技レベル	国際人会出場	国際人会入賞	国際人会入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセンPT ・パラ観戦ツアー	・高校の同級生	・パラバドミントン強化コーチ
バラスポーツ開始場所	・リハビリテーション病院	・高校時代の同級生と	・地元パラバドミントンクラブ
バラスポーツ情報提供者	・リハセンPT	・高校時代の同級生（恋人）	・パラバドミントン強化コーチ
バラスポーツ開始場所へのアクセス	・リハセン	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・指導者	・視覚障害者柔道の先輩	・当時の強化コーチ ・同じ境遇の選手
バラスポーツ継続状況	練習時間の確保、大会の遠征費が捻出でき、比較的、日程調整が可能な非常勤の仕事も3つ掛け持ちしながら、競技に集中できる環境を整えた。	2006年に出場した初の国際大会で惨敗し、より一層練習に取り組むようになる。練習内容の変更、練習相手や環境を自らが積極的に動いて探した。同年に開催されたフェスティック大会で優勝して、2008年の北京パラリンピックに出場。	大学部活引退後にパラバドミントン日本選手権出場。準決勝敗退だったが強化選手に。大学院時代、最初の職場では練習は週に2~3回。東京パラを見据えて選手雇用転職。現在複数拠点で練習。
支援	・なし	・勤務先	・勤務先
将来ビジョン	車いすテニスの日本代表強化に力を注ぐ。総合型地域スポーツクラブの立場から地域の障害者のスポーツ環境を整備する。	ライフワークとしては継続していく。選手として継続するかは、2021年の東京パラの状況を見て決めたい。	できる限り選手としてやっていきたい。
その他特記事項	パラリンピックを直接観戦したことで、自分も出場したいと大きな夢をもらった。車いすバスケットボールでの出場が厳しくなり、車いすテニスに転向。日本一となり、パラリンピック出場を果たす。	以前から柔道をやっており、受傷後、視覚障害者柔道を始めた。	もともとバドミントンをやっていた。途中でパラバドミントンを知り、こちらに関わるようになった。

項目	20-M
調査年度	2020
通し番号	22
生まれた年	1979
性別	男
居住地域	九州
調査時身分	その他
障害発生年齢	18
障害内容	肢体不自由
障害程度	重度
学校種別	普通学校
現在実施競技	陸上競技
競技開始年齢	25
競技レベル	国内大会上位
バラスポーツ開始時の重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バラ陸上仲間（せき損センターで知り合った）</li> <li>・障害者スポーツセンター職員</li> <li>・バラ陸上選手</li> </ul>
バラスポーツ開始場所	・車いす陸上の選手らの練習場所（道路）
バラスポーツ情報提供者	・バラ陸上仲間（せき損センターで知り合った）
バラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いす陸上日本代表選手</li> <li>・弟</li> </ul>
バラスポーツ継続状況	以前は週に6回練習していたが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で週に3～4回と減っている。アスリート雇用ではないため、練習や大会にかかる費用はすべて自費。
支援	・なし
将来ビジョン	パラリンピック出場を目指す
その他特記事項	入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、せき損センターで出会った車いす陸上日本代表選手から車いす陸上を見に来ないかと誘われたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。

■ 2021 年度

※バラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載  
 ※一般雇用には障害者雇用を含む

項目	21-A	21-B	21-C
調査年度	21	21	21
識別記号	23	24	25
生まれた年	1990	1982	1985
性別	男	男	男
居住地域	東海	関西	東海
調査時身分	一般雇用	選手雇用	選手雇用
障害発生年齢	19	17	19
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	ポッチャ	陸上競技	車いすラグビー
競技開始年齢※	22	20	20
レベル	国内上位	国際入賞	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者※	・見学に行ったツインバスケットの選手	・PT(理学療法士) ・義肢装具士	・車いすラグビー-日本代表の強化に関わっていたリハビリテーションセンターでスポーツ指導を担当していた先生 ・体験会で出会った車いすラグビー-日本代表 ・車いすラグビーのDVD
バラスポーツ開始場所※	・地元ポッチャクラブ(市内公共センター)	・スノーボード:山(スキー場) ・陸上競技:N市競技場(クラブメンバーとして)	・リハビリテーションセンター
バラスポーツ情報提供者※	・見学に行ったツインバスケットの選手 ・地元ポッチャクラブ	・スノーボード雑誌 ・専門学校の先生	・PT(理学療法士) ・義肢装具士
バラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・両親	・一緒に練習しているレベルが同じくらいの学生達 ・陸上部指導者(大学・大学院の指導教員) ・専門学校の先生	・家族
バラスポーツ継続状況	・週末の土日に練習1回4時間程度している。(場所は自宅、近隣の福祉法人が持つ体育館。廃校になった学校の体育館)大会にはコロナがなければ年に2~3回出ている。 ・会社にはポッチャをやることを了解してもらっており、ポッチャの活動も勤務時間とみなしてもらっている。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに講義している。 ・継続していく上で大変なのは練習場所の確保(練習場所がない、少ない)	・専門学校:中部地区のクラブチームで ・大学:陸上部で他の学生と一緒に練習 ・S社:午前中から午後2時までは勤務、母校の大学施設を利用して練習。その後学生とともに16時20分~練習。土日遠征も勤務扱い。遠征費等はほぼ会社がカバーしてくれていた。 ・現在:母校の大学施設で練習。(コロナ禍で)午前中練習、月・水・金は走って練習+午後、ウェイト、火・土はウェイト練習とブル。木はブルだけ、日曜は完全休養。午後は時に講演など。	・2008年から関東の車いすラグビーチームでプレーを始め、2018年頃から西日本のチームに移籍し、2011年から現在まで日本代表選手として活動。 ・現在は週3日から5日程度、日本附団パラリーナーで関東圏のチームのメンバーと練習をすると同時に、月に1回程度所属チームの練習に参加。
支援	・なし	・勤務先、スポンサー、公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・ポッチャはこれからも上を目指して続けていく。 ・パリのパラリンピックに出場したい。	・会社に所属しつつ指導者として後進の指導にあたれたいと考えている。 ・ロサンゼルスパラリンピックでゴルフが入るのでそれを目指したい。	「パラリンピックで金メダルを取りたい」という思いが強いので、2024年のパリ大会、2028年のロサンゼルス大会になるかわからないが、そこに対する情熱は常に持っている。
その他特記事項	・受傷前スポーツをやっていたことは、スポーツ(ポッチャ)を始める際にはプラスに働いていると思う。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行つて「すごい」と、子どもたちに言われることも嬉しい。ポッチャを通して外(他人)との関わりが持てるのがとても大きい。 ・両親も年齢を重ねてきたのでどこかで介助者をチェンジしなくては行けない。最近では、ヘルパーにおまわっている。	・パラリンピック国内開催により、企業の注目も上がり、プロとしての活動が可能になっている。 ・今後はプロの指導者としての活動の在り方を模索。 ・同様の障害を持っている子どもたちには、体育の授業で競技用義足が使ええる環境を整備すべきという意見が聞かれた。 ・バラスポーツ普及には、パラリンピック終了後に引退する金メダリストがいれば、テレビ出演等露出が多くなり、普及につながるという意見を述べられた。	・競技開始当初、十分な支援を受けられていなかったが、競技実績を積み上げると同時に、東京パラリンピック招致の影響等により、金銭的な支援や練習環境は充実してきていて、金銭的な支援や練習環境は充実してきていて、強化指定選手への支援は充実してきているが、選手への支援が十分ではなく、用具や金銭的な支援が必要である。 ・引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動を続けていきたいと考えている。

項目	21-D	21-E	21-F
調査年度	21	21	21
識別記号	26	27	28
生まれた年	1980	1991	1979
性別	男	男	男
居住地域	甲信越	関東	関西
調査時身分	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	18	15	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	中度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	陸上競技	陸上競技	車いすバスケットボール・パラクライミング
競技開始年齢※	19	16	13
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者※	・主治医 ・義肢装具士 ・コーチ ・看護師(のちの妻)	・入院先の義肢装具士 ・高校の体育の教員	・母親 ・子どもたち対象の視覚障害のクライミング体験を実施した時に、講師として招聘した視覚障害クラス日本代表(パラクライミング)
バラスポーツ開始場所※	・大学の陸上部	・高校(陸上部)	・市民体育館
バラスポーツ情報提供者※	・主治医 ・義肢装具士	・義肢装具士 ・入院先のリハビリに携わっていた先生方	・母親
バラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・母親
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	・経済的基盤となるスポンサー(所属企業)等の出現	・同じ義足の陸上選手 ・障害のない仲間たち ・現在の所属先 ・義足メーカー	・大学時代の同級生(現:選手兼ヘッドコーチ) ・子ども対象の視覚障害のクライミング体験をした際、講師だった視覚障害クラス日本代表選手・応援してくれる人、応援したい派山のクライマー
バラスポーツ継続状況	・場所:大学でやっていた時は毎日練習していた時に大学施設が使えた。地元に戻ってきたからはそれが難しい。 ・指導者:競技を行う時期によって義肢装具士が必要な他者であった時期もあるし、その後は競技のコーチの重要性が高まってきた。競技コーチは2004年以降指導してもらっている。	・2016年から現在の所属へ転属し、所属先の支援を受けながら競技を継続。 ・現在は、週5日ほど節事しているコーチが主宰しているクラブで、障害のない選手とともに練習、トレーニングを行っている。	・車いすバスケットボールは週に2~3日程度、パラクライミングは週3日程度練習をしている。 ・仕事と競技を両立しており、パラクライミングに関しては日本代表の活動で海外遠征の機会があり、年々の寄付等はあるものの勤務先や協会からの支援はなく、国際大会へのエントリーを増やしたいと考えているが苦慮する部分がある。
支援	・勤務先	・勤務先	・なし
将来ビジョン	・今後も現役を続けるが指導者としての道も切り拓きたい。指導者としても勉強をしながら、選手とともに高めていきたい。さらに、一般の人と同じ土俵でマスターズでの競技(義足側で踏み切らなければ出場できるという約束を取り付けている)を考えている。	・100mを10秒台で走る。 ・「パラ陸上選手」ではなく「陸上選手」として認められたいという思いがあり、純粋に足が速くなりたい。	・車いすバスケットボールに関しては「日本選手権で何位になる」といった目標はなく、求められるうちは続け、年を取ってからでもシニアチームから声がかかれば参加したい。自分自身の「居場所」であり、楽しくバスケットボールを続けていきたい。 ・パラクライミングに関しては、2023年の世界選手権(スイス)で金メダルを取りたい。また、パラリンピックの追加種目になるため、競技人口を増やすべく国内外で普及に関わる活動をしていきたい。
その他特記事項	・急性期、リハビリ期を担当する医師がバラスポーツの知識を持っていることは非常に大きい。予後にスポーツを実施することを想定した手術や治療ができる。 ・スポーツ継続に関して、自らスポンサー探し・契約をするなど主体的な活動の成果がここに見られる。 ・バラスポーツ普及には、障害を持ったあとでも地元のスポーツができる受け皿が必要。施設や指導者がいても仲間がいなくてなかなか続かないと考えている。	・競技用義足は高価であり、これからスポーツを始める人を対象とした支援制度が必要ではないだろうか。 ・高校、大学と陸上部で競技を継続し、仲間たちが自分を特別扱いせず接してくれたことが、楽しく陸上を続けてこれた一因であった。 ・義足に関しては知識を持った医師や義肢装具士等に出来るかどうかとても重要であり、足の切断についてもスポーツに適した・適していない方法があるので、適切な医療職と出会えるかどうかとても非常に重要である。	・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、特別支援学校や特別支援学級、病院等への情報提供が十分ではなく、上手くマッチングできていない印象を受ける。 ・「いいね、やってみよう」と言ってもらえるような「否定しない人」に出会えるかどうかがとても重要である。

項目	21-G	21-H	21-I
調査年度	21	21	21
識別記号	29	30	31
生まれた年	1998	1990	1966
性別	女	男	男
居住地域	関西	関東	東海
調査時身分	選手雇用	選手雇用	その他
障害発生年齢	14	21	30
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	中度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	陸上競技	陸上競技・スノーボード	柔道・陸上競技・自転車競技・水泳
競技開始年齢※	15(高校1年)	24	31
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・医師 ・同じ切断の陸上競技選手 ・両親 ・SEKAI NO OWARI	・リハビリテーションセンターPT ・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン	・公民館で柔道を教えていた先生 ・自分の子どもたち
パラスポーツ開始場所※	・地元の義足の人の陸上競技クラブ	・東京にある切断の陸上競技クラブ(都内陸上競技場)	・町の柔道場(公民館)
パラスポーツ情報提供者※	・同じ切断の陸上競技選手	・リハビリテーションセンターPT ・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン	・市役所
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・同じ義足の走り幅跳び競技者 ・ライバルの存在	・一緒に練習をしているパラリンピアン ・妻 ・所属会社	・妻 ・子ども ・使用するスポーツ施設スタッフ
パラスポーツ継続状況	・大学1年次に2016年リオパラリンピック出場 ・その後走り幅跳び専門のコーチに師事 ・高校3年生の時から企業と契約し、プロとして活動 ・21年4月からS社所属 ・練習期は午前中に練習、午後ウエイトトレーニングやプール。出社する日は週1回、午後2時半まで仕事、その後練習。 ・コロナ前だと、年間10～20試合くらい、海外遠征は年に3回くらい。多い時で4回。	・現在は競技中心の生活。 ・月・水・金・土が午前中走る練習。月・火・水・金・土に午後、ウエイトトレーニング。火曜と木曜はプール。日曜はオフ。 ・コロナ前であれば年間6～7試合、スノーボードは試合出場。 ・現在所属の会社の理解が大きい。練習環境のサポート、社員の応援など。	・視覚障害者となったあと、柔道を再開。シドニーパラリンピックで入賞。その後、自転車や陸上競技(投擲)を実施。 ・練習場所(柔道、自転車、陸上、スポーツクラブ)について、障害を理由に拒否され続けたが、何度も通い、人間関係を構築するまで粘り強く交渉し、最終的に使わせてもらえるようになった。 ・妻が働き生活を支えてくれているので、競技に専念している。現在は、投擲専門の指導者に指導してもらっている。
支援	・勤務先、スポンサー	・勤務先	・なし
将来ビジョン	・陸上は自分の体が「あ、もう無理や」と思うまでやりたい。 ・東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそと思っている。それが終わればきっとロスこそと考えていると思う。	・今後とも夏と冬の競技を続けていきたい。もっとレベルを上げた。ライバル選手を超えたい。 ・引退後は子どもたちの指導・育成ということがあるかもしれないが、それをやるのにまずは今の競技力をアップさせしかりと結果を出すことが大切だと考えている。 ・今の会社は非常に理解があるので、スポーツを通じた社会貢献を会社所属でやるのでは今は考えている。	・105歳までマスターズで記録を残すことが目標。その年齢まで面倒を見てくれるスポンサーも探す。 ・60歳になったら一般の大会の投擲5種に出ようと思っている。ハンマー投げはやっていないのであと5年間で練習する。105歳で健常者の大会に、アイマスクをして出る。
その他特記事項	・受傷後、非常にスムーズに競技に入ることができていた。その要因として、担当医師が障害者スポーツに関する知識を持っていたこと、ロールモデルとなる同じ障害のある選手と出会い、様々なアドバイスをしてくれたこと、地元で切断者のための陸上競技クラブがあったこと、一般高校の部活動で受け入れてもらえたことなどが挙げられる。 ・競技の継続に関してはスポンサーの存在、同じ所属会社の選手の存在が非常に大きい。 ・現在23歳と若い。陸上競技はもろんだが、切断ゲーオースのファッションショーに出演したり、雑誌を作ったり、絵巻を描いたりとマルチに活躍しているところが特徴的である。	・受傷後のリハビリ施設が国立リハビリテーションセンターだったこともあり、スポーツに関する情報が多く取れ、スポーツ開始に繋がっている。 ・競技用義足を借ることができたことも競技生活の入り口には大きかった。 ・スポーツ競技の継続に関しては所属会社からの経済的な支援や競技に専念できる環境づくりに対する支援があることが大きい。 ・また、目標となる選手の存在や家族の支援があることも重要であることがわかった。	・障害を持ってからのスポーツ開始には、自治体の情報提供制度や障害者スポーツ協会の存在が影響している。情報提供に終わらずスポーツの場へのつながりが重要であることが明らかである。 ・何より本人のやりたい気持ち、自ら動く行動力が大きく影響している。受け入れられないスポーツ施設、クラブのメンバーに対しても声を荒げることなくコミュニケーションをとり、最終的に受け入れてもらえるようになっている。 ・105歳までスポンサーをつけて一般の大会に出るという今後のスポーツ活動の現通しはこれまでにではなく、一つのモデルになる可能性を秘めている。

項目	21-J	21-K	21-L
調査年度	21	21	21
識別記号	32	33	34
生まれた年	1959	1961	1976
性別	男	女	男
居住地域	東海	関西	東海
調査時身分	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	52	0	17
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	特支→普通	普通→特支
現在実施競技	アーチェリー・フライングディスク	バドミントン	柔道・柔術・グラップリング
競技開始年齢※	55	45	16 ※同じ高校で発症前から継続
レベル	全国出場	国際入賞	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者※	・医師 ・妻 ・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者	・会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手) ・地域のバドミントンコーチ	・高校の柔道部の恩師
バラスポーツ開始場所※	・障害者スポーツ協会(体育館等)	・障害者スポーツセンター	・高校の柔道場(部活動の継続として)
バラスポーツ情報提供者※	・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者	・会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手) ・地域のバドミントンコーチ	・盲学校
バラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・現在の職場の上司	・地域のバドミントンコーチ ・パフバドミントン全日本コーチ	・助言くれた先生(視覚障害者柔道パラメダリスト) ・妻や子どもたち ・視覚障害者を持つ職場の同僚の先生や生徒
バラスポーツ継続状況	・52歳で受傷後、2014年頃からフライングディスクとアーチェリーを始める。 ・初級スポーツ指導員とフライングディスク指導員の資格を同時に取得。 ・全国障害者スポーツ大会(2014年長崎・2015年和歌山)に出場。 ・2017年2月度の事故にあり、その後アーチェリーを本格的に実施。 ・現在、火、水、土、日は競技に専念できている。 ・東京パラリンピック開催により指導する場を多く持つことができている。	・バドミントンを始めた頃から、地元のコーチが熱心に指導してくれたことで、バドミントンが楽しく、上達も早かった。 ・車いすバドミントンを行う選手は少なく、競技を始めてから1年で国際大会に出場した。同じクラスの海外選手の存在、圧倒的な強さに刺激を受け、もっと強くなりたいと練習を重ね、強化合宿など全日本コーチから指導を受けた。バドミントンがパラリンピック正式競技に決定したあと(5~6年前)、アスリート雇用となった。 ・昨年、アスリート雇用は終了したが、地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。	・高校入学後に始めた柔道だが、視力低下後、自分を取り巻く環境が変化していく中でも、視覚障害者柔道は、組めばこれまでも同様に柔道ができた。周囲が視覚障害者であることを忘れるくらい普通に扱ってられたことで、自己肯定でき柔道が支えとなった。 ・視覚障害者柔道は、パラ4大会(アテネ〜リオ)出場、リオ大会でメダルを獲得して引退。 ・現在は、後進の指導に役立と思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。
支援	・勤務先	・勤務先	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・自分でアーチェリーやフライングディスクを続け、パラリンピックを目指すと同時に、競技を広く普及していきたい。 ・アーチェリーやポッチャ、フライングディスクも障害があってもなくてもできる。教室等を通じて障害のある人となない人の壁がなくなっていけばいいと考えている。若い人たちにそうしたいことを伝えていきたい。	・地元の次世代アスリートの育成を行いながら、練習を継続していく予定。 ・スポーツを始めるときには、まずはやる気が必要。指導者も体験に来た人を作るようにさせることが重要。バドミントンは、体育館の予約が取れれば練習が出来る。また、一緒にバドミントンを仲間がいてくれると継続に繋がる。	・後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。
その他特記事項	・野球で培った地肩の強さや以前に経験した射撃の訓練等が現在のスポーツ活動にも好影響を与えている。(幼稚園〜高校まで野球。高校卒業後〜27歳まで自衛隊に、27歳以降も野球はやっていた。) ・事故で受傷後、手術等何回も繰り返している。社会復帰していくために必要な条件としての体向上のためにスポーツを始めた。 ・現在、会社で障害者スポーツを実施し、普及活動することを業務として認められている為、競技を存分に行うことが出来る。	・中学校でソフトボール部に所属したが、卒業後は44歳までスポーツをする機会に恵まれなかった。 ・バドミントンを始めるにあたって影響を与えたものとして、パラバドミントンの日本代表選手、地域のバドミントンコーチ、障害者スポーツセンターの存在がある。 ・国際大会での海外の同じクラスの選手との出会い、全日本コーチから指導を受けたこと、継続的な地域コーチのサポートが競技レベルの向上や意欲に影響した。	・発症前から柔道の楽しさを知っていたため、発症後も楽しく取り組むことができた。 ・視覚障害者柔道は組めば障害の有無にかかわらず取り組める競技のため、発症後、出来ないことが増えていく環境下において、心の拠り所となり、自己肯定に繋がった。 ・自己愛着はできていないが、柔道を通して、障害は不便だけど不幸ではないと思えるようになった。

項目	21-M	21-N	21-O
調査年度	21	21	21
識別記号	35	36	37
生まれた年	1981	1981	1980
性別	男	男	男
居住地域	関西	東海	関東
調査時身分	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	26	32	16
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	軽度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	スノーボード	スノーボード	スノーボード
競技開始年齢※	23(障害発生前から同一競技を実施)	20(障害発生前から同一競技を実施)	21
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・インターネット	・大舘義足の友人スキーヤー ・義肢装具士 ・会社の社長	・アルバイト勤務先の社長と弟 ・ジャンプ台をきれいに飛んでいた名前を知らない選手
パラスポーツ開始場所※	・スキー場	・元々のホームグレンデ	・スキー場
パラスポーツ情報提供者※	・インターネット	・大舘義足の友人スキーヤー ・義肢装具士	・当時のアルバイト先の社長
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ボジティブ	・ボジティブ	・ボジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・職場の理解 ・家族(妻) ・憧れの存在(同じ日本代表チーム)	・妻 ・会社の社長 ・代表チーム(コーチ、チームメイト)	・同年代の義足の日本代表チームメイト(憧れの存在) ・海外の著名選手
パラスポーツ継続状況	・教師をしているため基本仕事を中心。冬場は仕事終わりに近くのゲレンデに行くナイターで練習をする。夏場は週末などに芝の練習場や人工雪の練習場に行っ練習をする。今年はずヘルニアのため夏場はジムで筋力トレーニング中心。 ・公立学校教員ということもあり、他の選手のように海外遠征に多くは立てない。基本的には有休を使う。事前に計画を立て、多くの先生方に配慮していた。国内の合宿も同じく1日の日数を使うが、自分は週末だけの参加。海外遠征で2人か3人くらいに出場しボトを取ってくる。	・事故後(32歳)、自分は義足になると思い、何ができるかと考え「スノーボード」だと思った。スノーボードは小5から、競技は大学2年からやっていた。 ・退院後1か月の自宅療養のあと、1日30～40キロのサイクリングに挑戦するなど、アクティブな療養期間を過ごす。 ・選1回宮内のハーブパイプ(3時間)、選3～4回人工芝のジャンプ練習場(30～40分)、選2回ジム、これからは雪の上や遠征が増える。 ・指定強化選手で、アスリート助成を受けている。会社の理解もあり、アスリート雇用として競技に専念できる。	・現在は、スノーボードクロス日本代表強化指定選手として活動を続ける。 ・日本の雪は柔らかく、コースを作っても溶けてしまうことから、スノーボードクロスは常設コースは存在しない。そのため、国内で練習するには、大会用に臨時で設置されるコースの情報を集めて、大会開催の前後の期間で練習する形式で国内のコースを転々とする。一方で、海外では常設コースがあるため、スキー場で利用料を支払えば練習が可能である。
支援	スポンサー・公的機関	・勤務先、公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・日本代表チームに入っているが、中でも勝っていないとパラリンピックには出られない。2021年12月まで争って獲得し枠を取りたい。 ・眼のモニタリングのこともあり、北京パラリンピックを区切りにはしたいと思っているが、今悩んでいる。 ・自分の思った通りの結果が出れば、いかに多分種目なので、そうなることもその次もという考えもある。 ・スノーボードは死ぬまでやる。指導者は求められればやると思う。	・当分引退は考えていない。 ・元プロスノーボーダーなので、ライセンスの再取得を目指している。	・2022年の北京大会、2026年のイタリアのミラノ/コルティナ・ダペッツォ大会まではスノーボードで、それ以降は障害者ゴルフをしていくことで所属先企業と語をしている。 ・スノーボードを引退していた時期、妻と共通の趣味であるゴルフを始めた。
その他特記事項	・障害を持つ前からスノーボードをやっており、受傷が競技継続に大きな障害とならなかったことが同一競技を継続できた要因。障害を持つことでそれまでの生活や競技生活が断絶するということがないという、これまでにはなかったキャリアパターン。 ・公務員をしながら冬季競技をトップクラスで継続するのは相当大変なことだと考えられるが、職場の理解と支援が大きく、人間関係が非常によく、お互いを刺激しあって伸びている雰囲気があり、これが競技継続の大きな要因。 ・2020年パラリンピック開催大会決定後、アスリート育成等の制度ができ、経済的な支援を受けられるようになったことも継続の要因。	・事故で切断後すぐに義足で何ができるかを考え、もともとしていたスノーボードならできると思った。当時パラリンピックの正式種目に採用されたことで、パラリンピックに出るという目標ができた。 ・国内でスノーボードが競技として認められず一度は競技から引退するが、10年後に競技として認められたことで、現役復帰。 ・2019年より所属先企業がアスリート活動を全面的に支援してくれることで、国内に存在しない常設コースを海外遠征で回ることが可能となった。	

項目	21-P	21-Q
調査年度	21	21
識別記号	38	39
生まれた年	1985	1982
性別	女	女
居住地域	関西	関西
調査時身分	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	18
障害内容	視覚	肢体
障害程度	重度	中度
学校種別	普通	普通
現在実施競技	水泳	シッティングバレーボール
競技開始年齢※	2(パラ競技としては19)	19
レベル	国際出場	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者※	・視覚障害のある子どもの保護者 ・地元の障害者水泳のクラブのチームメイトとコーチ	・障害者スポーツセンターの指導員 ・母親 ・一緒に練習するクラブの仲間
バラスポーツ開始場所※	・地元の障害者水泳のクラブ	・障害者スポーツセンター
バラスポーツ情報提供者※	・ボランティア先の同じ障害者の子どもの母親	・広報誌 ・障害者スポーツセンターの指導員
バラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ボジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・地元の障害者水泳のクラブの存在(専門のコーチの指導を受けられる)	・日本代表監督 ・両親や家族
バラスポーツ継続状況	・競技を始めた頃は地元Bクラブのみ週3日程度練習していた。北京パラリンピック出場決定後、練習量を増やすために地元クラブと並行し民間のスイミングスクールの選手コースで練習をするようになった。現在も同環境で週4～5日程度練習している。 ・Bクラブの存在がとても大きい。コーチは、個々の障害に合わせて一人ひとりの能力をどのようにすれば引き出せるかというのを考えて指導してくれた。 ・大学卒業後、現在の所属先に就職し、当初フルタイムで働いていたが、会社との話し合いで時短勤務が認められるようになり、現在は午前中の半日勤務、午後は水泳に関する活動に充てられるようになった。また、競技に関する経費については、給与とは別々にして会社の負担。	・通い始めたシッティングバレーボールクラブでは、日本代表選手と一緒に練習をしていた。同じ年代の仲間もいたことで楽しく続けることができた。 ・障害者スポーツ指導員から専門的な指導を受けたこと、バレーボールの経験があったことから、シッティングバレーボールを始めて1年余りで日本代表に選出。その後、日本代表監督からの指導を受け、2008年北京、2012ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場。 ・アスリート雇用ではなかったため、遠征費や合宿の費用は自費だったが、2008年の北京大会後からは少しずつ自己負担が減っていた。2019年に引退し、アシスタントコーチとして選手を支えている。
支援	・勤務先	・公的機関
将来ビジョン	・以前は「パラリンピックを目指さなければいけない」と思っていたが、最近では自己ベストを出したいという意識が強くなってきている。中学校・高校時代の純粋に水泳が楽しかった当時の思いを出して、タイムにこだわってきたいと考えている。 ・「パラ水泳」といよりも「水泳」そのものが好きなので、一度原点に立ち返って楽しんでいた。 ・また、指導者に以前から興味を持っており、競技と並行してまずはお手伝いのような形で関わっていただけたいと考えている。	・2019年からアシスタントコーチとして関わっている。シッティングバレーボールがメダルを獲得し、結果を残すようになれば認知度も上がり、スポンサーなどからの支援も受けられる。 ・現在、コーチなどサポート体制は整ってきているため、練習する機会を増やしていけば、もっと強くなると思う。
その他特記事項	・親が障害と向き合って、自分の子どもの障害はどのようなものかについて、もう少し調べてほしいと感じている。 ・定期的に検査で病院に通っていたが、自分が障害者手帳を取得できる事を教えてもらえなかった。障害者手帳を取得できることを知ったのは、大学受験の相談時。通っていた病院の医師や視能訓練士がもう少し早く対応をしてくれていたら良かったと感じている。 ・自分と同じような障害のある人々がスポーツを始めるにあたっては、弱視のような見えづらい障害に対する、学校関係者、医療関係者や周囲の人々の理解が重要であると思う。	・スポーツを始める際には、スポーツ指導員やバドミントン現場の関係者などが様々な障害者スポーツを知っていること、声をかけることが重要。 ・一般のスポーツセンターなどに障害者スポーツの一覧が記載されている冊子などがあれば知るきっかけになると思う。もっと広く、シッティングバレーボールを知ってもらう機会を作っていく必要がある。

※1 一般雇用には障害者雇用を含む

※2 バラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載

## ■2022年度

項目	22-A	22-B	22-C
調査年度	22	22	22
識別記号	40	41	42
生まれた年	1990	1991	1962
性別	女	女	女
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	その他
障害発生年齢	0	26	31
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	特支	普通	普通
現在実施競技	柔道	陸上競技	サウンドテーブルテニス
競技開始年齢 ※2	15	26	30代半ば
レベル	国際入賞	国際入賞	地域
バラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・高専部体育教師 ・盲学校教師(視覚障害の柔道家、柔道部の指導者)	同じ障害の女性選手二人、義足の陸上競技クラブのメンバー	・隣県のスポーツ指導員
バラスポーツ開始場所 ※2	・視覚特別支援学校(高等部)	・市の総合運動公園の陸上競技場	・地元の視覚障害者用図書館
バラスポーツ情報提供者 ※2	・弟	・リハビリ時の主治医	・視覚障害当事者のサークル活動をしている中で
バラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・本人	・両親 ・本人	-
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ	・なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	・全日本視覚障害者柔道連盟に関わっている先生	・クラブのチームメイト	・特になし
バラスポーツ継続状況	・2013年専攻科卒業後、フリー(あん摩マッサージ指圧師)で柔道を続ける。その後アスリート雇用され、柔道に専念。 ・2大会続けてパラ出場を逃し、環境の変化が必要と思い2016年から4年間をS県の道場にて過ごした。 ・東京2020終了後、地元に戻り、アスリート雇用され現在に至る。	・現在、仕事の後、週に5~6日練習。 ・現在コーチの指導を受けず、自分で練習。 ・試合数は2022年度になって増加。神戸でパラ陸上の世界選手権があること、陸連とパラ陸連の連携が大きき要因。	・当初は、隣県のスポーツ指導員が月に1回指導に来てくれた。その後、地元の大学卓球部の学生等と活動を継続。 ・2012年の全国障害者スポーツ大会に出場。 ・東海ブロック大会に毎年出場し、それ以外にも他府県で行われる交流大会にも参加。
支援	・勤務先	・公的機関	・なし
将来ビジョン	・競技を継続し、視覚障害者柔道の認知度を高めたい。 ・パラリンピック出場は通過点、生涯現役でいきたい。J1(全盲クラス)の指導者になりたい。	・直近の目標はパリパラリンピックに出ること。 ・競技は年齢が40代になるまで続けたい。 ・競技をしつつ若い選手たちには情報提供したりしてサポートもしていきたい。	・可能な限りSTTTに関わってきたい。 ・指導者が周りにいないので、自分がプレーをするだけでなく、指導もしている。教えることも非常に楽しく、続けていきたい。
その他特記事項	・先天性の視覚障害者にとって、スポーツと出会う機会は限定的。数少ない機会とタイミングが合致した。 ・視覚障害柔道は、IBSAクラス分けが変更となり、J1(全盲)とJ2(弱視)のクラスとなった。J1とJ2の違いを知った上でコーチングができる指導者、トレーニングパートナー等いれば競技継続にはプラスである。	・就職後は一般雇用のため練習時間が取れにくかった。コロナ禍により在宅勤務となり、時間の調整がしやすくなり練習にもじっくりと取り組めるようになった。 ・県からの助成金を受給しているが、海外遠征や義足ソケット部の改良等の経済的負担が大きい。	・サークルメンバーは高齢化し退会者が増加。一方で、新メンバーを探すことは難しい。弱視の人々の中には「見えていること」をやりたいと考える人もいる。 ・競技を通じていろいろな場所へ行き、いろいろな人と出会うことで世界が広がり、楽しい。

項目	22-D	22-E	22-F
調査年度	22	22	22
識別記号	43	44	45
生まれた年	1972	1977	1979
性別	男	女	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生前年齢	12	5	19
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	車いすテニス	水泳	卓球
競技開始年齢 ※2	13	25	32
レベル	国際入賞	全国出場	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・市のテニス協会の人たち	・職場を訪問に来た車いすユーザー(多様な情報を持っていた)	・部活動の生徒
バラスポーツ開始場所 ※2	・居住地近くの勤労福祉体育館	・車いすテニス:Y市の体育館	・勤務校の体育館
バラスポーツ情報提供者 ※2	・両親(車いすバスケ) ・市のテニス協会の人たち	・車いすテニス、セーリング:Nさん ・ダイビング:短大時代の友人 ・水泳:バリアフリーツアーセンター、県の障害者スポーツの関係者	
バラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・親(運転免許取得前) ・本人(運転免許取得後)	・本人	・本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ボジティブ	・ボジティブ	・ボジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	・日本人Mコーチ ・カナダ人Hコーチ ・ドイツ人Hトレーナー ・当時の職場の仲間 ・家族	・ダイビング:伊豆のインストラクター、ダイビング仲間(医療関係者や福祉関係者がいた)、奄美大島のダイビングクラブのスタッフ ・水泳:スイミングスクールのコーチ ・クリニック(アスリート外来)のドクター	・車いす卓球選手の先輩 ・通っている卓球クラブのコーチ
バラスポーツ継続状況	・大学4年時に国内トップになる。就職2年目にアトランタパラリンピックに出場。99年に転職し、選手雇用となり、競技に集中、2004年のパラリンピックを目標とした。 ・現在は午前中テニスのトレーニング、午後はテニスや、講演等をしている。	・パート半日(午後)勤務。午前中は自宅で家事をしたり、ヨガマットを使って筋力トレーニング。 ・水泳は現在、週に1回市のプールで練習。他の日は陸上での筋力トレーニングなどを実施。 ・ダイビングは奄美大島を拠点として継続。一人で移動、ダイビングクラブのスタッフ等に支えられている。	・大会等で、他の車いす選手に練習等の刺激を受ける。自らの行動で環境は変えられると考える。居住地の障害福祉課に連絡し、地域の一般の卓球クラブを紹介してもらった。 ・週1回、マンツーマンレッスンを受けるうちに結果が残せるようになってきた。
支援	・勤務先、スポンサー	・なし	・公的機関
将来ビジョン	・選手としてプレーは続けたい。 ・車いすテニスをやってみたい人へ、入り口の部分を支援したい。 ・パラ出場経験を活かして、パラリンピックを目指している人の支援もしたい。 ・大会運営、大会の立ち上げ。 ・コーチにも関心があり。(一般のテニス指導者の資格も取得。)	・2023年度に実施される鹿児島大会までは泳ごうと決めている。 ・ジャパンパラ水泳大会は自分の今のレベルでは難しいが、生涯スポーツの目標として頑張りたい。 ・ダイビングは旅行の一環で継続して楽しみたい。	・2024年のパリ、2028年のロサンゼルスへの出場を目指す。 ・2028年以降も家族や職場の理解が得られれば、可能な範囲で出場し、生涯スポーツとして続けたい。
その他特記事項	・中学入学前に脚を切断、その後、親からの紹介もあり、中学に入って車いすバスケットに取り組む。その仲間たちと車いすテニスを始めた。 ・国際的にトップクラスになれたのは、地道なトレーニングや人々のサポート、自分自身の成長等によりステップアップしてきた結果と思う。	・水中は車いすに拘束されることもなく、自由に動くことに魅力を感じた。 ・体調や肩の調子が悪くなったこともあり、仕事を一旦やめ、腿板を手術。地元開催の全国障害者スポーツ大会に備えたが、コロナ禍により中止。気持ちの区切りをつけるために鹿児島大会までは頑張る。	・受傷後、勤務先の部活動指導をきっかけに受傷前に行っていた卓球を再開した。 ・障害を理解して受け入れてくれた地域の卓球クラブ、自ら車いすに乗り、パラ卓球の特性を理解して指導に当たった卓球クラブのコーチの存在が、大きな支えになった。

項目	22-G	22-H	22-I
調査年度	22	22	22
識別記号	46	47	48
生まれた年	1997	1990	1999
性別	女	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	0	14	4
障害内容	肢体	視覚	肢体
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通→特支	普通→特支
現在実施競技	ポッチャ	ゴールボール	ポッチャ
競技開始年齢 ※2	18	18	7
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・練習見学をした際に難いて見えたE選手など練習参観していた人、およびE選手の父、異動サポート等支援してくれる母親および情報提供してくれるPT	・学校の先輩と友人 ・盲学校ゴールボール部顧問教諭	・当事者団体の年上のお兄さんたち
バラスポーツ開始場所 ※2	・隣の障害者スポーツセンター	・盲学校	・市の障害者スポーツセンター
バラスポーツ情報提供者 ※2	・PT	・盲学校の先輩	・県内のポッチャ協会
バラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・母		・両親
バラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	・複数のポッチャの県内選手 ・コーチ(上記選手の父) ・母親	・学生時代は部活動の顧問教諭 ・就職後は県の教育委員会のスポーツ課の方、特別支援学校の先生、元同じ職場の男性看護師、職場の方々	・家族 ・会社 ・コーチ
バラスポーツ継続状況	・入院中、県ポッチャ協会の練習会に参加したことがきっかけで退院後、県協会の練習会や選手の主催する練習会に参加。 ・翌年、県協会の合宿に参加。一人の女性選手と出会い代表の話や海外の話聞き、刺激され、ポッチャにはまった。2016年にE選手が所属しているチームに入り、練習している。 ・今はポッチャが自分のすべて。	・2013年まではグランドソフトボールもプレー、その後ゴールボール1本に。 ・週3～4日練習、それ以外にウエイトトレーニング。職場近くの体育館、障害者専用体育館、盲学校等で練習。週末は代表合宿等に参加。 ・2019年まで日本代表候補、その後代表落ちし、東京パラには出場できなかった。	・県内にポッチャ協会があり、定期的に練習。 ・経済的に厳しいところがあるが、家族や日本協会からのお金、県からの強化選手補助金、「応援する会」からの援助、勤務先の援助などがあり、賄うことができている。
支援	・公的機関	・公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・現在、ポッチャのブレイククラスが変わるかもしれないという状況なのでまず気持ちを整理して、自分に厳しくして日本選手権に出て代表選手になりたいと思っている。	・当面の目標は、パリパラリンピックに出場すること。 ・パリの先はあまり考えていないができるだけ長くプレーを続けたいと考えている。	・パリパラリンピックを目指す。そこで「金」をとりたい。個人戦でも頑張りたい。 ・パリの後のことまでは今は考えられない。
その他特記事項	・ポッチャ継続の内的動機づけとしては、自分自身で考え自分の体を使って主体的に参加できることうれしさを試合で勝てないことの悔しさと、勝てるかもしれないという可能性を認識→自分の身体状況を自己研究、自己分析することによる可能性の見出しとパフォーマンスに対する向上心と支援者への恩返しと変化している。	・障害発生前のスポーツ経験(小学校で野球、中学校でバレーボール)が、同じボール競技であるグランドソフトボールやゴールボールにプラスに働いている。 ・2012年に地元開催の大会があり、就職の時はこの大会出場に配慮してくれるところを探し、現在の職場に就職した。	・小学2年時にポッチャ体験機会があり、面白いかもと興味を持つ。障害状況より、家族のサポートがなければ続けることはできなかった。 ・障害の進行から途中でクラスを変わらざるを得なかったが、ロールモデルとなる選手がいたことや、周りの支援のおかげでポッチャを継続するようになった。

項目	22-J	22-K
調査年度	22	22
識別記号	49	50
生まれた年	1982	1986
性別	男	女
居住地域	東海	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0
障害内容	肢体	肢体
障害程度	中度	重度
学校種別	普通	普通
現在実施競技	パラテコンドー	バドミントン
競技開始年齢 ※2	36	23
レベル	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※2	・道場の先生	・兄、医師、車いすバドミントンK氏
パラスポーツ開始場所 ※2	・地元のテコンドー道場	・都の障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者 ※2		・医師 ・障害者スポーツ指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※2	・本人	ー
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ネガティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・道場の先生、理学療法士	・バドミントン仲間、地域のバドミントンコーチ、家族
パラスポーツ継続状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道場の先生の指導で、少しずつ上達。強化指定選手を目指す。全日本選手権で成績を残したい。</li> <li>・現在は、週に2回、2～3時間程度練習</li> <li>・今年度から強化指定選手。強化合宿が2・3か月に1度ある。国内大会は年に2回、国際大会は今年度3大会ほど出場予定。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バドミントンが東京2020パラリンピックで正式競技に決定し、パラリンピック出場を目標に練習した。</li> <li>・2018年に転職し、アスリート雇用となる。午前中は勤務、午後はコーチ付きで練習を行う。</li> </ul>
支援	・公的機関	・勤務先
将来ビジョン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内大会優勝、国際大会では入賞を目指していきたい。</li> <li>・パラテコンドーを普及させたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業や市民を対象としたパラスポーツ等に関する講演会を行っていく予定。</li> <li>・バドミントンは今後も継続。</li> </ul>
その他特記事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻が家事すべてを引き受けてくれており、競技継続上でとても大きな支えとなっている。</li> <li>・国際大会に出場した際に、他国の選手を見ていると、競技以外の場面でもとても楽しそうに過ごしていて、「本当に好きなことをやっているんだな」と感じさせられ、自分が競技を続ける上で刺激ももらっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの頃からスポーツを含め何にも挑戦できる環境があったことが、その後のスポーツ継続に影響した。</li> <li>・障害者スポーツセンターの存在と職員の活動がパラスポーツをするきっかけと継続につながっている。</li> <li>・東京パラ開催決定後、アスリート助成/雇用などの制度ができ、経済的な支援、練習環境などが整った。</li> </ul>

■ 2023 年度

※1 調査時の雇用形態を示している過去に選手雇用があった場合も含む  
 ※2 現在を含めバラスポーツとして主として取り組んできたもので、現在実施している競技と異なる場合もある

項目	23-A	23-B	23-C
調査年度	23	23	23
識別記号	51	52	53
生まれた年	1994	1995	1990
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	四国
調査時身分 ※1	般雇用	般雇用	選手雇用
障害発生年齢	0	13	19
障害内容	肢体	視覚	視覚
障害程度	中度	重度	中度
学校種別	普通	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A5	B6	B3
主実施競技 ※2	バラ陸上競技	ゴールボール	柔道
バラスポーツ開始年齢 ※3	大学2年生	14	大学3年生
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	中学と高校ハンドボール顧問教師 大学女子ハンドボール部監督 大学陸上競技部監督	I先生(当時男子ゴールボール日本代表監督)、ヒさん(当時女子ゴールボール代表監督)	町道場の先生 ゴールボールの指導者(→柔道関係者につないだ)
バラスポーツ開始場所 ※3	大学の陸上競技場	H音学校	町道場
バラスポーツ情報提供者 ※3	ハンドボール部教師 大学の障害者スポーツ専門教員	I先生(当時男子ゴールボール日本代表監督)	ゴールボールの指導者
バラスポーツ開始場所へのアクセス ※3	自ら		
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	・なし	ポジティブ	ポジティブ
バラスポーツ継続時の重要な他者	大学陸上の本人担当コーチ	T先生(T大学附属視覚特別支援学校高等部) A選手(ゴールボール女子選手)	コーチ
バラスポーツ継続状況	担当コーチが様々な指導やケアをしてくれた。陸上部のメンバーもウォーミングアップの仕方から、試合参加方法のイロハまで教えてくれた。国際大会でメダル獲得後クラブ契約であったが現在はバリアリンピックを目指している。	教員免許をとらなかったため、ゴールボールをしながら通えるということでR大学に進学。練習場所は国リハと附属、大学のトレジムも使った。 東京大会後、ゴールボールの代表を引退し、南風光A社からはバラを目指さないのめれば、選手としての雇用はできなないと言われ、アスリート雇用から一般就労になった。	A社では半日勤務で会社が契約しているコーチが所属する高校で週5日程度練習。 A社に1年半所属後結婚を機に現居住地に転居し、B社に転職。地元の高校および大学の練習拠点。 B社は単年契約で、東京バワ後の雇用継続に不安があったため、C社に転職し、前職と同様の練習環境で競技を継続。
支援			勤務先
将来ビジョン	バリアリンピックで有終の美を飾りたいと考えている。 2023年度で現在の仕事の任期が切れるため、その後の身の振り方を現在、監督とも相談している。 将来的には何らかの形でバラスポーツに関わり、普及などに関わりたいと考えている。	今は2つ目の競技として、ブラインドサッカーにチャレンジしている。 視覚障害児教育があったから、今、自分があるという思いがあるため、視覚障害児教育に何らかの形で携わりたい。	2024年のバリアリンピック出場枠の獲得が当面の目標。バリンピック後は一度休養して、またやりたいと思えば復帰のつもりはない。 C社は現役引退後も所属可能であり、セカンダリーキャリアとして社業に専念するか、所属しながら柔道に関わる活動をするかは、まだ決めていない。
その他特記事項	先天的な障害がありながらハンドボールという障害のない人のスポーツでトップクラスの選手となり、そこからバラスポーツのトップ選手になるという稀有な選手と言える。	小5からアイスホッケー。中学の部活は陸上部だが並行してやっていた。見えなくなってできないことが増える中、盲学校で「スポーツができる」と感じたことが大きい。 ゴールボールで「体を張る」動きなどは、アイスホッケーの経験が生かされている。陸上部の厳しい練習経験はきつことへの慣れや基礎体力の向上につながっていると思う。東京パラリンピックの後、ブラインドサッカーを始めた。	小学校5年生から柔道を始め、高校時代はインターハに出場。障害受療後、受け入れてもらえる道場を探すが難しなかったが、受け入れてもらった道場の先生に理解があり、スムーズに練習に参加できた。

※3 パラスポーツとして始めた最初のスポーツに関して示している。

※4 先天的障害者の場合は「なし」としている

項目	23-D	23-E	23-F
調査年度	23	23	23
識別記号	54	55	56
生まれた年	1984	1996	1988
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	5	中学生の頃	0
障害内容	視覚	視覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通	普通
スポーツキャリアパターン	B1	B3	A3
主実施競技 ※2	ゴールボール	水泳	柔道
パラスポーツ開始年齢 ※3	16	19	18
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	盲学校チームメイト、盲学校コーチ	高校水泳部の上腕欠損のM選手(同級生) 妹(当時は現役の水泳選手)	同郷の大学の先輩
パラスポーツ開始場所 ※3	盲学校の体育、部活動	父親が指導者をしているスイミングスクール	大学の柔道場
パラスポーツ情報提供者 ※3	盲学校のT先生(部活の勧誘)	高校水泳部の上腕欠損のM選手(同級生)	同郷の大学の先輩
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	チームメイト、代表選手、部活動の指導者、代表のコーチ	妹(当時は現役の水泳選手)	大学の同級生、海外の対戦相手と一緒に活動している仲間(視覚障害者)と一緒に柔道を研究している友人(視覚障害者)
パラスポーツ継続状況	大学進学後も卒業した盲学校の部活動で競技を継続。 大学1年時に日本代表合宿に参加するが、合宿を辞退し、数年間、競技からも離れた。 大学4年時にゴールボールを再開、パラリンピックを目指す。2年後の2008年、北京パラリンピック大会に出場。大会終了後、国内の普及活動に力注ぎの自分が役割と見え、引退。	パラ選手として競技を始めたいきなり日本記録を出した。 2018年の年に海外遠征をして世界のトップとの差を知らされ、その後の国際大会でも勝てず、本腰をいれるようになった。 現在、週4日練習、スイムは1回、1時間半から2時間くらい。その他にウエイトトレーニングなどを行っている。	中学、高校と聴眼者相手に練習し、一般の試合に出場。視覚障害者柔道を始める際も抵抗なく取り組めた。 始めた年に日本選手権で優勝、いきなり日本一になったことで優勝が生まれ、一時期、競技から離れた。 再開後、初の国際大会では初戦敗退。アジア大会では自分だけメダルを獲得できず、メダルへの思いが強くなった。
支援		勤務先	
将来ビジョン	パラリンピックを目指した競技継続ではなく、これからゴールボールを始めるといふ。競技を始めたい人もいない人たちのサポート役として、国内大会にも出場しながら、普及面で貢献したい。	パリパラリンピックまでは今のよう頑張りたい。その後のことは未定。 将来的には水泳に何かの形で関わりたい。指導者かパラ水泳を発信できる立場になりたい。現在地元で中学校の部活動指導員として指導や大会の引率をしている。	トップアスリートとしての競技力向上が見込める限り、パラリンピックは常に目指している。 クロスカントリースキーに取り組んでい。柔道と異なり、接触やそれに伴う怪我がないので、長く継続できると感じている。可能であれば冬季パラリンピックにも出場してみたい。
その他特記事項	競技に復帰した時は、自身がパラリンピックに出場したい、注目されたいという気持ちはなく、自分が頑張ること、関わることで周囲の人たちが幸せになってくれることが目的になっていた。その頃は、チームメイトの存在も重要だったが、体験会で参加する子供たちの存在や反応が大きなきっかけ理由になっていた。ゴールボールとの出会いにより自分の世界が大きく広がった。	水泳一家に生まれ、幼い頃から水に親しんでいた。スイミングスクールのコーチである父親や、元選手の母親、選手の妹、母親のことを語る祖父の影響を受け、水泳を小学校3年から本格的に始めた。障害を持つ一筋からのスイミングスクールを現在も拠点にできているというレアなケースである。	全盲の人にとって柔道の上達にはスキルの言語化が必要であり、自身の主観的事実を指導者の客観的事実をすり合わせてテキスト化する作業に、自らの身体を研究材料にしながら取り組んでいる。

項目	23-G	23-H	23-I
調査年度	23	23	23
識別記号	57	58	59
生まれた年	1973	1996	1988
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	8	0	0
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通	普通→特支
スポーツキャリアパターン	B6	A1	A1
主実施競技 ※2	バイアスロン、クロスカントリースキー	水泳	水泳
パラスポーツ開始年齢 ※3	21	9	小学校4年生
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	盲学校時代のW先生(日本障害者スキー連盟のアドバイザー)	母親(障害者スポーツに関する情報を持っていた。プールまでの送り迎えをしてくれた)	高等部から進学する盲学校のT先生
パラスポーツ開始場所 ※3	T短期大学	S県障害者交流センターのプール	地元のスイミングクラブ
パラスポーツ情報提供者 ※3	盲学校時代のW先生(日本障害者スキー連盟のアドバイザー)	母親	高等部から進学する盲学校のT先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		母親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	ヘッドコーチAさん ガイドのKさん	パラ水泳選手のSさん	コーチ、タッパー
パラスポーツ継続状況	雪で濡れるトレーニング環境を求め仕事をやめ練習に集中したが費用が底をついた。H社にスキー部が設立され、障害者のフルディックスキー選手が複数所属したことで、トレーニング環境やサポート体制が整い、金銭的な負担をする必要がなくなった。	高校に入ってからほぼ活動で障害のない生徒と一緒に練習するようになった。自分からまわつていけるレベルであった。リオ大会は選手になれず、東京大会に出場。この間クラスや泳法の変更も直置した。 現在はNTCで月、火、水、金、土が練習日。朝8時半から12時～12時半まではプールにいる。昼食後、基本的にはウエイトレトレーニングをしている。	就職後はフルタイムで仕事をした後、障害者スポーツセンター等で練習していた。その後転職し、当初は午後練習していたが、のちに競技に専念できるようになる。 今年からパラリンピアンやオリンピックの指導経験のある新たなコーチに師事し、タッパーはさらに協力が強くなっており、チーム体制でシフトを組んで練習している。このようなチームメンバーがいるので競技が継続できている。
支援	勤務先	公的機関、スポンサー	勤務先
将来ビジョン	するスポーツとしては、伴走をお願いして走っている。仕事としては、主に障害者スキー連盟の理事。フルディックスキー指導員として普及にも携わっている。アシスト発掘だけでなく、ガイド発掘と、スタッフを増やすことである。	現在は2024年のパラリンピックを目指して集中している。 その後のことまではわからないが、今後ライオンイベントで子供ができるなどの大きな出来事や、水泳に100%力を注ぐことができなくなる状況になった時は、引退についてシビアに考えるかもしれない。	競技の第一線は来年のパラリンピックで終えたい。 その後は視覚障害の子供たちが水泳を楽しむ機会をつくると同時に、選手たちの競技環境づくりを進めていきたい。 競技引退後はフルタイムで働きながら障害者の雇用促進に関わりたい。
その他特記事項	引退となって盲学校に転校した後も、要所所で重要な他者との出会いがあり、長野パラリンピックの開催が決定したことで、バイアスロンという新たな競技環境へと進んでいった。さらに企業がパラアスリートをサポートする体制ができたことで、金銭的な負担を減らすことなく競技に専念することができた。 引退後は結婚、出産を経て、子育てと共に日本障害者スキー連盟で裾野を広げる役割を担っている。	現在企業で週半日から1日ではあるが、会社で他の社員と一緒に働いている。自分の気に入ったブランドの会社なので引退した後も同じ会社で働きたいと考えている。	3歳から水泳を始めて、小学校4年生から障害者水泳の大会に出場するようになった。中学生までは地元のスイミングクラブで活動し、高校から地元を離れて他校の盲学校に進学し、水泳部で活動していた。

項目	23-J	23-K	23-L
調査年度	23	23	23
識別記号	60	61	62
生まれた年	1997	2002	1998
性別	女	男	女
居住地域	関東	関西	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	その他	選手雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通→特支
スポーツキャリアパターン	A5	A1	A2
主実施競技 ※2	アルペンスキー	卓球	ゴールボール
パラスポーツ開始年齢 ※3	19	小学校5年生	16
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	N大学の障害者スポーツ専門のN先生	女子日本代表選手であるA氏 パラ卓球男子日本代表のB氏	(中学校の時に卓球なども経験している がここではゴールボールに関して) 顧問T先生 チームメイトのTさん
パラスポーツ開始場所 ※3	海外遠征(2016年、ニュージーランド)	地域の卓球クラブ	T大学附属視覚特別支援学校
パラスポーツ情報提供者 ※3	N大学の障害者スポーツ専門のN先生	日本代表選手であるA氏・B氏	顧問のT先生 チームメイトのTさん
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		両親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	・なし	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	弟、全日本チームのコーチのJさん、大学の先輩でアスリットトレーナーなどをしているKさん、日本代表チームのメンバー	両親	ゴールボール代表監督Jさん
パラスポーツ継続状況	8月～12月中旬までは海外遠征が断続的である。1月に入るとワールドカップ。その後4月のシーズン終了までは国内と海外の合宿試合が複数回。 シーズン終了後は国内でNTCを利用してトレーニング。今は年後に2時間のリハビリ、2時間のウェイト、1時間半の有酸素系トレーニングをしている。有酸素系はバイクを漕ぐとか、インターバル、低酸素室トレーニング。	中学校入学後、平日は毎日卓球場Cで活動し、土日は中学校の外部コーチから紹介されたクラブで練習。 高校進学後、平日は毎日卓球場で活動し、土日は自宅で練習。 大学進学後、平日は週1回程度大学の卓球サークル。2回程度高校時代の外部コーチと練習をし、土日は他の車椅子選手やコーチと練習。	高等部3年の時に受験で1年間部活動を休み、大学進学後は隣接するT技術大学のゴールボールサークルにて週2回程度競技を続けていた。 2016年7月のジャパンパラで注目され、その後強化指定選手となり、T地区と都内での日本代表としての2回点練習をしていた。
支援	公的機関、スポンサー	大学	勤務先
将来ビジョン	次のタイタミラノでのパラリンピックに集中。そのあとのことは決まっていないが、できれば37歳(ミラノの次の次の大会)までは現役でやりたい。 現在の会社は引退後も雇用してくれる可能性があるので、アスリートの人たちに会社の商品を通して貢献できることはないかと考えている。	2028年のロサンゼルスパラリンピックの出場を最終目標。その過程で、来年のバリの可能性が出てくれば、そこを目指していきたい。 大学卒業後は仕事と卓球の両立を目指しアスリート雇用は考えていない。引退後は卓球にこだわらず障害者スポーツ認知向上や環境改善に関わりたい。	T大学院院修了後、S社に就職(正社員)し、アスリート支援の会社方針のもと、全面的なバックアップがあり、アスリートとして2024年のパリパラリンピックを目指して競技を継続。
その他特記事項	スポーツ家で育ち、子供の頃から様々なスポーツを経験している。中でもラグビーが専門で他のスポーツはラグビーに生かすために実施したという。 精神的不調から大きな怪我を負ったが、これをポジティブに捉え、新たな可能性を本人が感じられるようになっていく点。アスリートとしての成長の途上だと言える。	小学校5年生頃からパラ卓球を始め、中学校2年生頃から国内外の大会に出場。中学・高校と卓球部と学外のクラブで活動し、自宅練習場も拠点となっている。 大学入学後は学内の卓球サークルと、パラ卓球選手との活動を進行して行っている。大学卒業後は、仕事と競技を両立しながら2028年のロサンゼルスパラリンピックを目指していきたいと考えている。	弱視という状況で育ったが、体を動かすことに対して積極的な姿勢があり、地方から都内へと自らの意思で活動の場を広げていった。 強化指定選手に選出されたことをきっかけに、様々な経済的・社会的支援を受けることができている。

項目	23-M	23-N	23-O
調査年度	23	23	23
識別記号	63	64	65
生まれた年	2001	1990	1986
性別	女	女	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	中学校3年生	0
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	特支
スポーツキャリアパターン	A1	B5	A1
主実施競技 ※2	ゴールボール	車いすラグビー	ゴールボール
パラスポーツ開始年齢 ※3	16	高校3年生	16
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国内上位	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	クラスメイトのSさん(現男子日本代表選手)	競技開始当時チームメイトであった、日本代表のW選手	学校の教員T先生
パラスポーツ開始場所 ※3	国立障害者リハビリテーションセンター	地元の車いすラグビーチーム	高校のクラブ活動(特別支援学校体育館)
パラスポーツ情報提供者 ※3	クラスメイトのSさん(現男子日本代表選手)	リハビリテーションセンターで声をかけられた選手	学校の教員T先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	I監督(女子代表監督) K先生(国リハ担任)	所属先企業、家族	ゴールボール日本代表選手
パラスポーツ継続状況	<p>障害者生活だったので体育館の使用が容易であった。朝食前後での朝練、昼休みもゴールボールの自主練習、放課後は部活や国リハで練習、授業以外の全ての空き時間はゴールボールに費やしていた。</p> <p>日本選手権初出場時から、パワーがある代表会席に声をかけられ、上を目指して、世界と戦ってこうと思った。</p>	<p>現在は週に3～4日程度チーム練習をし、それ以外の日は自宅でストレッチやトレーニング。</p> <p>練習は複数チームの合同練習はパラアリーナで行っており、移動に不都合はないが、平日夜のチーム練習は行けないこともある。</p> <p>国内大会は年3～4回あり、それ以外に各チーム主催のオープン大会が年3回程度実施されている。</p>	<p>入部して3か月で当時の日本代表と練習試合を行った。1点も取れずに負けて、日本代表の強さに衝撃を受けた。自分も代表選手のように強いボールを投げたい、強いボールを投げたいという思いが大きくなり、ゴールボールとのめりこんでいった。</p> <p>継続できたのは周囲のサポートがあったから、ゴールボールがあったから、現在の仕事にも就けている。</p>
支援	勤務先	勤務先	
将来ビジョン	<p>社社に所属し、パラアスリートが業務と両立して世界を目指すという部署で業務と競技を両立して世界を目指す。</p>	<p>チームの日本選手権出場が第一目標。個人としては強化指定選手への獲得を目指している。</p> <p>何歳までプレイ するという具体的な目標はないが、生涯スポーツとして体力づくりを兼ねてラグビーを続けていきたい。</p>	<p>いつまで現役が続けられるかわからないが、バリバリにピクに出場することが目標。</p> <p>引退後も、現在の所属先で勤務を続け、若い選手の指導やサポート、育成に関わってきたい。</p> <p>プレーヤーとしての経験の還元などに加えて、マッサージなどで選手の身体的ケアにも貢献したい。</p>
その他特記事項	<p>見えないことで劣等感を抱き、スポーツとは無縁だった幼少期から、盲学校で自分以外にも見えない人があること、見えなくても積極的に動くことができたと気づいた。</p> <p>ゴールボールを始めたことで、スポーツが運動が楽しいと思えるようになり、それに伴って性格も積極的に自分の意思で動くようになった。</p>	<p>中学校3年生の体育祭の時で頭眩を罹患し、3か月入院後復学し、卒業後約1年間リハビリ入院をした。</p> <p>障害受雇後、リハビリテーションセンターで選手から声をかけられて車いすラグビーを始めた。</p>	<p>仕事をしながらゴールボールを続けたい思いが強く、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゆう師の資格を全て取得し、所属している障害者スポーツ選手雇用センターと民間保険会社では現在も講演活動や体験会、ヘルスマネージャーとしてのマッサージ業務を行っている。いずれも引退後を見越し、自分が社会に貢献できる方策を常々考えている。</p>

項目	23-P	23-Q	23-R
調査年度	23	23	23
識別記号	66	67	68
生まれた年	2001	2003	2003
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	一般雇用	その他	その他
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支→普通	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A2	A2	A1
主実施競技 ※2	自転車(トライシクル)	ボッチャ	水泳
バラスポーツ開始年齢 ※3	高校1年生	15	11
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	全国出場	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	(最初経験したスポーツは水泳だが、ここでは自転車について) 現在のナショナルチームの監督	(最初経験したスポーツは水泳(療育として)だが、ここではボッチャについて) ボッチャ協会のスタッフ	様々なバラスポーツ競技の体験をさせてくれた県障害者スポーツ協会のMさん。送迎や様々なサポートをしてくれた母親
バラスポーツ開始場所 ※3	選手発掘事業 K陸上競技場～サイクルスポーツセンター	県立の障害者スポーツ体育館	Oスイミングスクール
バラスポーツ情報提供者 ※3	県障害者スポーツ協会のNさん	ボッチャ協会のスタッフ	様々なバラスポーツ競技の体験をさせてくれた県障害者スポーツ協会のMさん
バラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		母親	家族
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	ナショナルチームの監督やコーチまたチームの仲間 本人の雇用者としての母親		障害の特性に応じた指導をしてくれる コーチおよびトレーナー、練習場所への送迎をしてくれる家族
バラスポーツ継続状況	合宿中は午前中自転車練習、午後は自転車練習とウェイトトレーニング、合宿がない時は午前中練習、午後1時から6時半まで仕事、その後再度練習するような生活、週6日練習している。	中学校の時にバラスポーツ体験会でボッチャを体験。その頃、県にボッチャ協会ができ、声をかけてもらったのをきっかけに、ボッチャを始めた。 高校生となり、県立の障害者スポーツ体育館ができ、高校1年からちゃんと練習を始めた。	小学校6年生の時、障害者の水泳クラブチームに入会。当初は週1回程度練習に参加。 中学生からは、週2回程度、高校生では週5回程度練習。クラブにはコーチが在籍しており、専門的な指導を受けることができた。 現在、大学に在籍し、週6回練習を行っている。大学にプールがないため、県立プールとスポーツクラブを利用。
支援	公的機関		
将来ビジョン	今現在は、2028年のロサンゼルスパラリンピックには出場したいと考えている。その後のことはあまり考えていない。それよりも今は自先のパリパラリンピックのことを一番に考えている。	現在、社会福祉士の資格取得を目指している。 将来は障害児の就学や就職支援に携わりたい仕事をしたい。 ボッチャは大会でいい成績を残したいという女の子ではなく、趣味として続けていきたい。	パリパラリンピックに出場しメダル獲得を目指す。その次のロス2028パラリンピックも視野にいれている。 愛知県で開催予定の2026アジアパラ競技大会にも出場したい。
その他特記事項	母親が経営する会社に勤務しており、その上で競技継続に関して職場の理解も得やすいし、経済的な不安も解消されている。 特別支援学校でもっといろいろな競技が体験できる環境があると自分のような状況の人もスポーツに入りやすいと考えている。	障害のある普通の青年がやりたい仕事を続けていくという姿が非常に頼もしく、好ましく感じた。	様々なバラスポーツを体験することにより、自分に合った競技を選択することができた。しかし、小学校5年生までは体育の授業以外でバラスポーツに触れる機会はなく、情報もなかった。幼少期からバラスポーツに触れ、体験できる機会があればもっと早くバラスポーツを始めていたと考えている。

項目	23-S	23-T	23-U
調査年度	23	23	23
識別記号	69	70	71
生まれた年	1991	2000	2000
性別	男	女	女
居住地域	関東	東海	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	10	18	小学校5年生
障害内容	視覚	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン	B5	B5	B3
主実施競技 ※2	ゴールボール	卓球	卓球
パラスポーツ開始年齢 ※3	23	21	中学校3年生
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	国立障害者リハビリテーションセンターのゴールボール部のメンバー	殊上クラブの監督であったM先生、義理の兄	パラ卓球女子日本代表B選手、家族
パラスポーツ開始場所 ※3	国立障害者リハビリテーションセンター	知人の職場の卓球クラブ	アスリート発掘プログラム(パラ卓球)
パラスポーツ情報提供者 ※3	国立障害者リハビリテーションセンター		
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ		ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	東京パラリンピック後、会社に残ることを勧められた今の上司。 朝(晩)に迷惑をかけた分頑張っている姿を見せてお返しをしたい、そのことがモチベーションになっている	一緒に卓球をする役所のメンバー	コーチ、所属先企業
パラスポーツ継続状況	2017年、国リハを卒業と同時に現在の会社に選手雇用(正社員)として入社。 東京パラリンピックが終わり、引退したが上司のアドバイスもあり、会社には残った。引退後、育成コーチを1年間やった後、現役に復帰した。 合宿中は午前中練習、午後フィジカルトレーニングか練習、合宿がない時は午前中にNITC-イーストでフィジカル、午後練習がある時は強化拠点施設で練習。	車椅子になってから卓球を始めたので、それが生活リズムをつくっている。仕事が終わって卓球をすることが生活リズムなので、それがないと生活が崩れてしまう。 卓球を継続するにあたって、職場の理解があること、一緒に卓球をする仲間の理解があることが大きい。	高校では卓球部に入らず、パラリンピック卓球に専念、大学では卓球部に入り他の部員と練習した。現在はパーソナルコーチのもとではほぼ毎日練習をしており、1日2時間～3時間程度、マンツーマンの指導を受けて、さらに3時間程度、コーチの指導している他の選手たちとともにグループで練習を行っている。
支援			勤務先
将来ビジョン	選手としてはロサンゼルスパラリンピックまではやりたいと考えている。 最終的には代表チームの監督をやりたいと考えている。いつのこたになるか見通しがあるわけではない。	日本代表として国際大会に出場すること。その次は国際大会でメダルが取れる選手に、ロールモデルは同じクラスのCさん。昨年の全日本パラ卓球選手権大会で対戦し、オーラを感じるとともに憧れでもあり、そして勝つという競技へのモチベーションにもつながっている。	直近の目標は、10月末に開催されるアジアパラ大会での優勝。来年のパラリンピックについては、ダブルスでの出場を目指している。 何歳頃まで現役を続けられるかわからないが、今のところは2028年のロサンゼルスパラリンピックまでは競技を続けたいと思っている。
その他特記事項	専門学校に入学、就職するが、視覚障害の壁に当たり、4年間在籍した後、国リハに入学した。国リハに入ったことが転機となり、視覚障害を受け入れ、前向きな気持ちになった。	卓球を通した仲間との出会い、さらには初級障がい者スポーツ指導員の資格も取得することになる。卓球が生活のリズムをつづけていると言えるほど、競技環境、職場、日常生活が充実しており、日本代表として国際大会の出場、さらにはメダリストを目指している。	障害受後、中学校時代に日本代表選手との出会いでパラ卓球の世界を知り、その後大学等に出場するようになった。

項目	23-V	23-W	23-X
調査年度	23	23	23
識別記号	72	73	74
生まれた年	2000	1970	1969
性別	男	女	男
居住地域	東海	東海	北海道
調査時身分 ※1	選手雇用	その他	一般雇用
障害発生年齢	0	25	34
障害内容	肢体	視覚	肢体
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン	A3	B5	B6
主実施競技 ※2	卓球	サウンドテーブルテニス	車いすカーリング
パラスポーツ開始年齢 ※3	12	38	40
主実施競技の競技レベル ※2	国内上位	国内上位	国際出場
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	お互い本音で語り合える幼少期からの友達、障害をマイナスに捉えずプラスの方向に考えることを教えてくれた祖父、一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者	サウンドテーブルテニスに最初に参加した時の審判員(指導員)の方 S市の点字教室で視覚障害者協会の行事に誘ってくれた1人	車いすバスケ、スキーをやっていた車椅子メーカーの方(最初の競技車いすバスケに關して)
パラスポーツ開始場所 ※3	中学校の体育館	T市内の身体障害者福祉センターの体育館	K市の一般体育館(バスケ用車椅子が当時から10台くらい置いてあった)
パラスポーツ情報提供者 ※3	一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者		車いすバスケ、スキーをやっていた車椅子メーカーの方(最初の競技車いすバスケに關して)
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	ライブでもある同じクラスの選手、落ち込んた時などに相談に乗ってくれる両親、障害に応じた指導してくれるコーチ	一緒にプレーしている視覚障害の仲間 S市を中心に応援してくれるボランティア SSピンポンに関しては、協会の会長Mさん	地元でカーリングホールがあること、健常者と一緒に試合ができること。 選手権やパラリンピックといった目標の一つ一つが大きな動機付け、スポンサーとして経済的支援をしている企業。
パラスポーツ継続状況	大学4年生で出場した全日本パラ卓球選手権大会後に行われた選考会を経て、次世代育成候補選手に選出。 大学卒業後はT社に就職、クラブチームに所属し、日本代表を目指している。 一般の卓球大会をはじめ、多くの卓球大会に出場し試合経験を積むことにも力を入れている。	障害発生後、各種制度の中でサウンドテーブルテニスの権限を収集し、自ら仲間を増やしたり、卓球台の購入を要望したりするなどしてプレーの機会が徐々に増えた。2015年にSSピンポンという競技を始めた。これはSTTのルールを修正したもので、視覚障害のない人も一緒にプレーすることが前提。聴覚障害があっても参加可能。晴眼者のペアでのダブルも可能。現在、この競技の普及の中心人物である。	2007年1月にチームをつくり、翌年に初めて日本選手権に出場して2位。 2012年に新チームを立ち上げ、2014年秋に世界選手権に出場。2016年、2022年に日本で優勝してフィナンランドの世界選手権に出場。 現在、フレックス制で勤務。カーリングは週に1回〜2回の練習。現在車いすバスケケットボールを有酸素運動のトレーニングとしてやっている。
支援	勤務先		スポンサー
将来ビジョン	強化指定選手の特を獲り、国際大会に出場できる選手にならなう。	サウンドテーブルテニスでは全国優勝、SSピンポンを普及させたい。今後はSSピンポンに関してはスポーツ推進委員と連携して広めていきたい。 学校で運動はしたいんだけど苦手だったりする子供たちのためのレクリエーション的な部活動に入ってもらえたら良いと思う。そのための働きかけをやりたい。	車いすカーリングのチームはどことメンバーが集まらずに苦戦しているが、所属チームは若い選手を含めて5人揃っている。札幌パラリンピックの招致がなかった今、選手としてどこまで競技がカーリングがやれるかわからないが、世代交代していく中で楽になりたい。 競技の一端を違ったとしてもエンジョイカーリングをやっていると思う。
その他特記事項	SNSを使って、日頃の練習のことなどの配信を始めたところ、フォロワーが徐々に増えている。自分を応援してくれる人がいることがモチベーションアップにつながっている。	新しいスポーツSSピンポンを開発し、障害のない人とともにスポーツを楽しむだけでなく、一緒にスポーツを楽しむ仲間として視覚障害によりできない部分をサポートしてもらえたら、スポーツを通して「共生社会」の実現を実践していると言える。	障害を持つ前にラグビーをしており、そこで培われた精神力や体力が現在に好影響を与えている。K市はある意味カーリングの町で、有名チームの本拠地でもある。町全体がカーリングに関心を持って応援しており、行政や企業、大学などが車いすチームも同じように応援・支援してくれている。

項目	23-Y	23-Z
調査年度	23	23
識別記号	75	76
生まれた年	1998	1991
性別	女	男
居住地域	北海道	東海
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0
障害内容	肢体	肢体
障害程度	重度	中度
学校種別	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A?	A3
主実施競技 ※2	車いすカーリング	卓球
バラスポーツ開始年齢 ※3	中学校入学前後	24
主実施競技の競技レベル ※2	国際出場	国内上位
バラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	(最初の競技はチェアスキーだがここではカーリングに関して)カーリングに誘ってくれた、チェアスキーを教えてくれた人。送り迎えなどしてくれた両親	障害者卓球関係者
バラスポーツ開始場所 ※3	T町にあった旧カーリング場	障害者卓球大会(日本肢体不自由者卓球協会主催のジャパンオープン)
バラスポーツ情報提供者 ※3	近隣の車いす利用者	障害者卓球関係者
バラスポーツ開始場所へのアクセス ※3	両親	
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	・なし	・なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	カーリングチームメンバー(パラリンピック出場という目標)	中学校の時の卓球部のメンバー、他校のライバル、高校の先輩 大学卓球部のOB会長、大学クラブのメンバー他大学の選手 障害者卓球の役員の方さん
バラスポーツ継続状況	中学生で日本選手権、高校2年生で世界大会に出場、高校卒業後2年間専門学校に通い、様々な資格を取得。その後、地元医療機関からT町役場に転職。専門学校在学中に車の免許を取り移動の難易度がなくなる。現在、週2〜3回練習するが、リーグ戦中は週4回の時もある。	現在はローカルな大会を含めると月に1回くらい試合に出場している。ほとんどは障害者の大会。以前は週3回程度コンスタントに練習していたが、今は仕事が忙いこともあり、週1回程度、試合前に2回か3回無理して練習。ほとんど障害者のない人とやっている。
支援	公的機関	・なし
将来ビジョン	続けられるうちはカーリングを続けたい。札幌パラリンピックに出場するという夢もあったが大大会開催が難しい状況で、どこまで自分が続けられるかはわからない。できれば今よりもうまい選手になりたい。	今後も卓球を続けていく気持ちはあるが、トップ選手との差は歴然としていて、そこまでは行きつけない気がしている。自分の目標を設定してやっていた。今年の全国障害者スポーツ大会に出場し、非常に良い体験ができた。それまで断り続けていた県の障害者卓球協会役員の依頼を受けることにした。
その他特記事項	まずはカーリングがあったこと、スキーのような恐怖感もないこと、チームメンバーに温かく迎え入れられたことなどからカーリングを始めることができ、また、継続することができる。札幌でのパラリンピック開催が軽くなってきたことから、ややこの先の目標の掲げ方が定まっていない印象を受けた。	幼稚園、小中学校、大学と一般の学校に通学し、中学校の部活で卓球を始めた。障害者の大会に出るといふ認識は大学卒業までなかった。高校2年で一旦卓球から離れるが、大学に入って再開。その後障害者手帳を取得し、障害者卓球大会に出場したが自分より障害の重い選手に負け衝撃を受ける。全国障害者スポーツ大会で他の障害のある人たちと出会い、刺激を受け、競技を続ける一方で障害のある人の卓球の普及や振興にも携わろうと考えている。

■ 2024 年度

※1 調査時の雇用形態を示している過去に選手雇用があった場合も含む  
 ※2 スポーツキャリアバターンは、第1章第2節参照

項目	24-A	24-B	24-C
調査年度	24	24	24
識別記号	77	78	79
生まれた年	1999	1977	1970
性別	男	女	男
居住地域	関東	関西	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアバターン ※2	A3	A2	A5
主実施競技 ※3	水泳	射撃	射撃
バラスポーツ開始年齢	3	21	47
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際出場	国際出場
バラスポーツ開始時の重要な他者	父親	射撃(ビームライフル)を紹介してくれた運転免許試験場のスタッフ(自身も射撃選手)	大会を初めて見に行って、様々な情報をくれた人
バラスポーツ開始場所	父親がコーチを務めるスイミングスクールのプール	障害者対象のビームライフル教室を開講している1スポーツセンター	K県の1射撃場
バラスポーツ情報提供者	パラ水泳競技連盟の方	射撃(ビームライフル)を紹介してくれた運転免許試験場のスタッフ(自身も射撃選手)	大会を初めて見に行って、様々な情報をくれた人
バラスポーツ開始場所へのアクセス	両親	本人	本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	小学校は父親で、中学校は父親と自分と一目置いてくれていた後輩たち 高校も父親で、大学は障害があつて水泳部に所属していたNさん(よく一緒に練習をした)	S選手(大会でよく優勝していて、憧れの選手存在) 両親と家族、コーチ、会社の人たちの応援。夫は大会等に帯同してくれている。	一緒にピストルをやっている仲間
バラスポーツ継続状況	小学校5年の時にパラ水泳関係者と出会い、パラ水泳の大会に出場するようになった。 小・中と週3回のペースでスイミングスクールに通い、高校、大学では水泳部に所属。 東京パラリンピックの選考会を最後に水泳は引退。	2010年に実銃(エアライフル)の免許取得。2013年に初めて国際大会に出場し、40歳前後でライフル銃の免許も取得。 2017年にアスリート雇用でV社に転職。現在週3日は射場で練習し、ほかの日は自宅でミューラージョンの機械を使って練習。 メンタルトレーニングのコーチからオンライン等で指導を受けている。 ロサンゼルス大会を目指している。 現在は健常者の試合にも出るようになり、昨年は12回大会に出場した。	現在はK県の射撃場で練習をしている。最初のころは週に1回は行っていたが、最近ではそこまで行けていない。 射撃場に行くと撃つのも練習だが、現在は疲労が蓄積することもあり、撃つ練習は月に1度くらいに減らし、自宅でできる練習を行っている。 自宅ではインナーマッスルを強化する練習や引き金をスムーズに引く練習を週に1度程度実施している。 現在年6回程度は様々な大会に出場。
支援	なし	勤務先	なし
将来ビジョン	今すぐにはいかならないかもしれないが、10年後、20年後スポーツに関われる部署で仕事ができると考えている。またそういうことができないか模索している。	パラリンピックに出場すること、長く競技を続けることが目標である。年齢とともに体力は落ちてくる、しかし競技レベルは下げたくない、かといって障害のこともあり、体に大きな負担はかけたくない。そうした中でいかに続けていくかが課題となっている。	ロサンゼルスパラリンピックを目指す。そのためにも、5段(564点)をクリアしたい。当面は全日本パラ射撃選手権で3連覇をしたい。 競技の普及も考えているが、わずか5人なのでどうしていいかわからないのが正直なところである。 選手雇用も考えなくはないが今の安定した生活を捨てたく、踏み切れない。
その他特記事項	高校時はほかの水泳部員とともに練習したことでモチベーションが高くなった。また、様々な刺激を受けた。 大学時は競技レベルの違いから他部員と練習できず、一人であるいは、同じ障害の選手と二人での練習が多く、モチベーションの維持に苦労した。 障害のある選手にも障害のない選手と同じように大学から支援(練習時間増やプール使用、コーチ帯同など)があればモチベーションに好影響があったかもしれないと感じている。	障害特性からほとんど運動には縁のない生活が、ビームライフル射撃を知ったことでスポーツを行うようになった。 身体接触のないターゲット系の競技と出会えたことが競技生活への入り口。 きっかけが運転免許証更新時の担当者からの情報提供と、通える範囲に障害者を対象とした施設があったという偶然が作用したと考えられる。 障害者のアスリート雇用制度の恩恵。 長く継続できる競技特性があり、長く競技を続けることが目標となっている。	銃所持に関する様々な条件があり、それらをクリアすることで、銃の保持を維持し、選手を継続できている。 脳性麻痺という障害の特徴から体の動きに制限があることが疲れやすさや各種スポーツ、学校体育への参加に制限を加えていた。

※3 現在を含めパラスポーツとして主として取り組んできたもので、現在実施している競技と異なる場合もある			
※4 先天的障害者の場合は「なし」としている			
項目	24-D	24-E	24-F
調査年度	24	24	24
識別記号	80	81	82
生まれた年	2001	1986	1980
性別	男	男	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	3歳頃	0	0
障害内容	聴覚	聴覚	肢体
障害程度	軽度	重度	中度
学校種別	特支→普通	特支	普通
スポーツキャリアパターン ※2	A4	A2	A3
主実施競技 ※3	デフハンドボール	榎高跳び、サーフィン	パラカヌー
パラスポーツ開始年齢	21	17, 31	29
主実施競技の競技レベル ※3		国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	進学先の大学教授	高校の恩師H氏	日本カヌー連盟の知人、カヌー教室などを開催した際に、中学時代から健常者に交じってカヌーをやっていたことを覚えていてくれた。
パラスポーツ開始場所	進学先の大学ハンドボールサークル	通っていた高等ろう学校	戸田漕艇場
パラスポーツ情報提供者	進学先の大学教授	高校の恩師H氏	日本カヌー連盟の知人
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	本人	妻・兄
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	進学先の大学教授N1氏、大学女子ハンドボール部OGで日本ハンドボール協会デフハンドボール専門委員会のN2氏、デフハンドボールGKのM氏、レジェンド的存在の選手T氏	ビデオを撮ったり相互にアドバイスした大学の友人と、技術に関して指導を受けたりアドバイスを求めた先輩Kさん、競技環境整備のアドバイスをいただいたY大学の指導者Hさん	兄と妻、舟を水面まで運んでくれて、移動のサポートをしてしてくれる。兄はカヌースプリントの経験者、妻は水上支援するためにカヌーを漕げるように訓練してくれた。
パラスポーツ継続状況	高校でハンドボールを始め、大学3年生でデフハンドボール日本代表チーム設立を目指して再開。現在メンバーが20名となり定期的に練習ができるようになった。月に1回の合同練習と週に1回のT地区での練習を継続してきたが、練習拠点となる場所がまだない。 2024年度の東京都社会人ハンドボールリーグに「デフハンドボールクラブ」として加盟、チームの強化を図り東京2025デフリンピックでプレーすることを目指している。	2003年から榎高跳びを専門とする。2009年から3大会連続デフリンピックに出場し2017年国際大会入賞後引退。ろう学校の指導者としても活躍。2018年、幼少期に経験したサーフィンを始め、2021年にはデフサーフィン選手として、聴者の大会にも出場。波がある時は、早朝に波に乗ってから出動するという生活をしているが、当面はサーフィンを極めるために継続したいと思っている。	2010年にリオパラリンピックの実施競技にカヌーが加わる可能性が高まり、パラカヌーを始めた。 2027年に延期されたワールドマスターズゲームズ関西への出場を目標に競技を継続している。 パラカヌーはモチベーションが続く限り継続していく。
支援		なし	勤務先
将来ビジョン	東京2025デフリンピックで日本代表としてプレーすることが目標。 東京都社会人ハンドボールリーグの4部に「デフハンドボールクラブ」として加盟し試合経験を重ねることを目指して準備を進めているが、経済的な支援が不足しているため、スポンサー等についても探していく必要がある。	サーフィン検定で2級の取得。 指導者として、ろうの子もたちのスポーツ環境を整えたいと思いNPO法人の立ち上げ構想を持つ。今は資金持ち出しなので助成金の獲得ができればいい。 今後も一生涯、何らかのスポーツをしていると思う。スポーツの楽しさをろうの子どもたちに伝えて経験してもらえるような存在になればいい。	自分が納得できるまでパラカヌーができれば競技は引退して、指導者として活動していきたいと考えている。パラカヌーでは、障害者が障害者をコーチングするスキームができていないので、自分がその道をつくってきたい。
その他特記事項	デフスポーツを継続するためには、国内に潜在しているデフプレーヤーと指導者、専門競技に精通した手話通訳者、支援者などが有機的に連携していくことが必要である。 小学校6年生ですでに160cmを超え、中学校で180cm、現在は192cmという体格に恵まれたことも、競技スポーツへのモチベーションにつながった。	最初からデフリンピックを目指していたわけではなく、榎高跳びがデフリンピック種目だったということで、デフリンピックにも出場した。 榎高跳びの競技特性に、短距離走や跳躍と器械運動で培った空中姿勢や空間把握能力が適合した。 幼少期から体を動かすことが大好きで、身近な環境としてスポーツがあったことや高い身体能力での成功体験が競技スポーツへの誘いとなっていた。	先天性の障害であるが、10歳から健常者に交じってカヌーを始め、高校では県代表としての団体出場、大学ではインクルーシブ出場と、下肢障害がある中でも、全国レベルで競技に取り組んだ。 リオパラリンピックでカヌーが競技に追加されることが決まってから、パラカヌーの日本代表選手になる機会を獲得。

項目	24-G	24-H	24-I
調査年度	24	24	24
識別記号	83	84	85
生まれた年	1964	1995	1981
性別	女	男	男
居住地域	関東	関東	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	10	0	0
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン ※2	B1	A3	A4
主実施競技 ※3	パラ馬術	パラ馬術	視覚障害者柔道、グランドソフトボール
パラスポーツ開始年齢	47	20	21～22、30～31
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際出場	国際入賞(柔道)
パラスポーツ開始時の重要な他者	夫と英代表のソフィー・ウェルス選手	アスリート雇用で採用してくれた企業	盲学校の柔道が専門の先生
パラスポーツ開始場所	体験から受け入れてくれた乗馬クラブK	S乗馬クラブ	盲学校の体育館
パラスポーツ情報提供者	夫	S乗馬クラブの指導者(パラリンピアン、自身は脊髄損傷で車いす利用者)。	盲学校の柔道が専門の先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	指導者	親、特に父親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	家族の理解、夫の後押し、所属先会社、受け入れてくれる乗馬クラブ、応援してくれている関係者の皆さん	S乗馬クラブの指導者(パラリンピアン、自身は脊髄損傷で車いす利用者)	視覚障害者柔道、盲学校の柔道専門のS先生、町道場の先生、練習仲間、練習場への移動を担ってくれた親、特に父親。 /グランドソフトボール:盲学校の時の友達
パラスポーツ継続状況	44歳で乗馬を始め、47歳でパラ馬術の大会に出場、2016年強化選手、2018年度東京アスリート認定選手に選出。パラリンピック出場を目指した。 2017年より契約社員となり、出社は月に1回。週3日から4日は乗馬クラブでのトレーニング。ほかに、ビデオ分析や馬学、コンディショニングトレーニング。 パリパラリンピックを目指すため、オランダでの強化レッスンを昨年9月から月に1回。12月に国際大会出場。	大学3年時に、東京2020パラリンピックへの参加を考え乗馬でパラリンピックを目指すそうと決意。パラリンピアンが教えてくれるS乗馬クラブに入り、指導者との共同生活を始め、食事の提供、車による移動支援も受けている。 ジュニアの選手と馬を共有する機会も多く、英語が堪能なことから、海外の大会では選手兼通訳をすることもあり、競技者であると同時に、サポート役を務めることが年々増えてきている。	盲学校で21～22歳の時、視覚障害者柔道大会に出て準優勝した。22～23歳の時初めて国際大会に出場し、2007年国内大会で優勝し、世界選手権で入賞した。2008年の北京パラリンピック出場後は大きな大会には出場せず、32～33歳で引退した。 30～31歳でグランドソフトボールをやっていた盲学校時代の友達と誘われて始めた。現在は週1回練習をして全国障害者スポーツ大会に出場した。
支援	勤務先/公的機関	勤務先	公的機関
将来ビジョン	パラリンピック出場を目指し、目標にはまだ遠いので近づくように努力したい。通常レッスンは継続し、半年に1回はオランダでの強化レッスンや遠征の予定。 ホースセラピーや競い、乗馬のサポートをしている。いろいろな人に馬に乗ってほしいと思っている。 馬術によりスポーツの楽しさを知り、馬術以外にもスポーツを探したい。	今後は、選手を継続しつつも、後輩への支援をしていく予定である。 自身がホースセラピーを体験したことでパラ乗馬に興味を持ったように、まずはホースセラピーを体験できる機会を増やして視野を広げる活動にも携わっていくと考えている。	柔道も体が動くならもう一度やってみたいと思うこともあるが、難しいと思う。グランドソフトボールは体が動く限り、続けていきたい。
その他特記事項	障害は、受傷部位を隠したいもの、見られたくないものとして存在した。特に着替えが阻害要因となって、学校における「体育」は、する対象ではないと捉えられてきた。しかし本来体を動かすことは嫌いでなく、環境が整えば、趣味として、さらには競技としてスポーツができることを体現している。 パラ馬術は、サポートがあっても継続できている。場所によっては手で乗るのは怖いというクラブもあるので、受け入れてくれる乗馬クラブでないと厳しい。	以前、ホースセラピーを体験していたことで乗馬への抵抗感がなくなっていた。 パラ馬術に挑戦しようと思ったタイミングと、東京2020パラリンピックに向けてアスリートを支える企業が増え、実績ゼロの状態でのアスリート雇用契約を結ぶことができた。	視覚障害者が進む前に柔道を始め、そのことから障害のない柔道関係者と接していたことが視覚障害者柔道として柔道を行う時の理解が得やすくてスムーズな移行ができたと考えられる。 視覚障害者柔道、グランドソフトボールとも盲学校を起点としたスポーツの取り組みであり、視覚障害者のスポーツ実施にとっても盲学校は大きな影響を及ぼしている。

項目	24-J	24-K	24-L
調査年度	24	24	24
識別記号	86	87	88
生まれた年	1976	2003	1974
性別	男	女	女
居住地域	東海	関東	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	その他	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	視覚	肢体	聴覚
障害程度	軽度	重度	重度
学校種別	普通	普通	特支→普通
スポーツキャリアパターン ※2	A5	A2	A1
主実施競技 ※3	グランドソフトボール(視覚障害者野球)	車いすバスケットボール、カヌー、陸上	競泳
バラスポーツ開始年齢	34	大学1年、小学5年、中学1年生	25
主実施競技の競技レベル ※3	国内上位	国際入賞	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	盲学校1年生の時の担任教師	車いすテニス:両親/陸上:両親/カヌー:区長、K区職員でパラカヌーの選手/車いすバスケ:元車いすバスケ日本代表選手Nさん	ボスターにあった「障害者募集中」の文字、障害者水泳クラブの仲間
バラスポーツ開始場所	盲学校のグラウンド	車いすテニス:C県K市のテニスクール/車いすバスケ:自宅近くの簡易コート	S市民スポーツセンター
バラスポーツ情報提供者	盲学校1年生の時の担任教師	父親(障害者スポーツに関する情報をインターネットやメールマガジン障害者スポーツセンターの掲示などから得ていた)	障害者水泳クラブの仲間
バラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	父母	本人
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	なし	なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	チームの仲間	両親、元車いすバスケットボール選手Nさん	Jアスレティッククラブの仲間、ろう者スイマーYさん、Jスイミングクラブの仲間
バラスポーツ継続状況	盲学校卒業後、2011年(34歳)、盲学校1年生の時の担任の教師にグランドソフトボールを見学に来ないかと誘われ見学に行き、そこからグランドソフトボールに関わるようになった。その年の全国障害者スポーツ大会に出場し優勝した。現在、週に一度、日曜日に休憩時間を含めて6時間くらい、ほぼ県の障害者福祉センターのグラウンドで練習をして、年に7回くらい大会に出場している。	幼小期に車いすテニス、チェアスキー、カヌーを始め、中学では、陸上とカヌー、水泳が中心だった。車いすバスケは小学3年生の時初めて体験し、高校2年生ごろチームに登録するようになった。現在は車いすバスケが中心でのトレーニングとして陸上競技をやっている。車いすバスケの練習は週に4回程度、陸上競技の練習は週に1回程度、自宅でローラーを使ったり、陸上競技場に行ったりしている。	水泳を始めたら、泳げるようになることとタイムがよくなるのが楽しくのめり込んだ。よりレベルの高い大会を目指すために、仕事終わりに遠方まで運転して練習に行く毎日を送った。障害者水泳クラブには多くのろう者と知り合うことができ障害者の大会とマスターズのどちらか月に1回出場している。6年前に結婚し、昼間の時間帯にマスターズ同好会メンバーと練習し、マスターズ大会一本に絞って出場している。
支援	公的機関	公的機関	
将来ビジョン	体が動く限りはグランドソフトボールを続けていきたいと考えている。競技が残っていればという前提だが、指導者になろうということも考えていない。みんなとわいわいやればいい。	車いすバスケットボールに関しては現在、次世代カテゴリーに在るが、その上のハイパフォーマンスカテゴリーに入り、パリンピックに出たいと考えている。これが現在スポーツを続ける上でのモチベーションになっている。将来的にはパラスポーツを続けながら仕事ができる環境があればいいと思う。	マスターズ登録(100歳登録)をしているので、いつまでか環境が許せば泳ぎ続けたいと思っている。
その他特記事項	遠近感がわかりにくいことがあるが、車球やそのほかのスポーツを経験していたことで、そのこととどう対処すればいいのかということは身についたと考えている。できるだけ長く続けたいが、盲学校に行く生徒が少なく、選手数が減少してきており、競技が存続するか一つの課題となっている。	車いすテニスに始まり、陸上やチェアスキー、カヌーや車いすバスケットボールなどを経験してきた。東京でパラリンピックが開かれることが決まってから、バラスポーツに関する様々な情報が増えたり、体験会が増えたり、カヌー会場が近かったりしたことがポジティブに影響している。またパリンピック開催を機に設けられた助成金制度の対象にもなっている。両親の強力なサポートがスポーツ実施の後押しとなっている。	学齢期はスポーツとは無縁であったが、25歳の時にたまたま出かけた地元のスポートセンターに掲示されているボスターを見ていた時に、「障害者募集中」という文字が目に入り、それが契機で水泳を始めると夢中になり、競泳選手として大会に出場するようになった。水泳を通して人生のパートナーとも知り合うこととなり、生活環境は変わったが、これからも水泳人生は続いていく。

項目	24-M	24-N	24-O
調査年度	24	24	24
識別記号	89	90	91
生まれた年	1991	1975	1990
性別	男	女	男
居住地域	関東	関西	関西
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	1歳3か月	0	2
障害内容	視覚	聴覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支	普通	特支
スポーツキャリアバターン ※2	A2(先天扱い)	A5	A1
主実施競技 ※3	ブラインドサッカー、ゴールボール	バドミントン	陸上競技
バラスポーツ開始年齢	小学校5年、高校1年	21歳ごろ	中学校入学後
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	地域	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	小学校5年時の担任の先生	幼馴染み、交際しているパートナー	小学部の担任の先生、視覚支援学校の陸上部の先輩
バラスポーツ開始場所	他県の小学校のグラウンド	近隣市の障害者スポーツセンター	在学していた視覚支援学校
バラスポーツ情報提供者	小学校5年時の担任の先生	幼馴染み	視覚支援学校の陸上部の先輩
バラスポーツ開始場所へのアクセス	小学校5年時の担任の先生、父母	本人	
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	ブラインドサッカー：当時同じチームで代表チームに入っていたT選手/ゴールボール：監督の先生/家族	交際しているパートナー(デフの選手)	ガイドランナー、妻
バラスポーツ継続状況	小5でブラインドサッカーを始め中3で日本代表入り、高校の時にゴールボール部とバドミントンに入り土日はバドミントンをやっていた。 高校3年(2009年)の時にゴールボールの日本代表チームに入り、以降2014年までゴールボールに専念。 2015年にブラインドサッカーに戻り自分のチームを立ち上げ、2022年に日本代表チームに復帰。2023年にパリパラリンピック出場権を得た。	幼馴染みからの声かけがあり、交際していたパートナー(学校の後輩)がたまたまバドミントン経験者であったことからバドミントンを始めることができた。現在の障害者バドミントンクラブに入り、20年以上活動を継続。 現在は週に1回クラブの練習に参加し、コロナ禍以後は、年4回程度大会に出場している(全国ろうあ者体育大会や日本デフバドミントン選手権、各地域のクラブ主催の交流大会等)。	高等部時代に本格的に陸上競技に取り組み、大学には陸上部がなかったため、一年かけて活動拠点を作り、複数のマラソンクラブにも所属し、ほぼ毎日練習。就職後、国際大会に出場し、東京2020パラリンピック出場を目指すも叶わず、同年に引退。 今後は、趣味として、走りた時に走ることができればと考え、現役時代のガイドランナーとは今でも一緒にジョギングをしている。
支援	勤務先/公的機関		なし
将来ビジョン	自分のチームを立ち上げた時からブラインドサッカーの普及や選手育成に関わりたいと考えていた。 トップ選手になるためには小さい時から競技を知り、親しみ、技術を身につけることが必要。そのためににもブラインドサッカーに関する情報に触れる機会、競技できる場が必要だと考えている。	バドミントンは激しいスポーツなので、無理をすることなく健康第一でできる範囲で続けていきたいと思っている。 来年日本でデフリンピックが開催予定となっており、これからデフリンピックを目指す、もしくはバドミントンを頑張っていきたい人のサポートをしていきたいと考えている。	旅行やアウトドアの活動が好きだが、視覚障害がありなかなか外出できない、趣味の活動が楽しめないという人たち向けに、環境づくりや情報発信をしていきたいと考えている。
その他特記事項	体を動かすことが好きだったこと、ブラインドサッカーの情報を得たこと、高校時にブラインドスポーツの部活があったことがスポーツキャリアに影響を及ぼしていると考えられる。 日本ブラインドサッカー協会は、バラスポーツ競技団体のマネジメントに関して日本でトップの競技団体であり、競技団体の着実な発展と成長が選手の境遇や競技強化に影響を与えている。	小学校時代はバスケットボールに取り組み、中学校、高校は軟式テニス部で活動していた。 バドミントンだけでなく、バレーボールや卓球等、聴覚障害のある人のスポーツ参加が少なくなっており、どうすれば参加してもらえるのか、これから考えていきたいと思っている。 他競技の関係者と相談をして、複数種目を同時に体験できるような機会を作りたいと考えている。	子どものころから体を動かすことが好きだったが、水泳が苦手だったことが後に陸上を始めたくさっけして影響。 地方の学校では指導できる先生がおり、生徒数が少ないため部活動自体がないという状況があるが、部活動の指導者がいて、一緒に走る仲間がいるという環境がとても大きかった。 スポーツのためには、健常者のサポートが必要であり、スポーツをしたい視覚障害者とサポートしたい健常者をつなぐシステムがあればよいと思う。

項目	24-P	24-Q	24-R
調査年度	24	24	24
識別記号	92	93	94
生まれた年	1983	1973	2002
性別	女	男	女
居住地域	関東	北海道・東北	東海
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用	その他
障害発生年齢	5	29	1歳半
障害内容	視覚	視覚	聴覚
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	特支
スポーツキャリアパターン ※2	B5	B5	A1
主実施競技 ※3	社交ダンス、ブラインドダンス	視覚障害者マラソン	水泳(バタフライ)
バラスポーツ開始年齢	33	33	5
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際出場	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	視覚障害者の社交ダンスの存在を教えてくださいました友達、一緒に体験に参加した全音の方、ブラインドダンスサークル代表M氏	トリアスロンをしていた寄宿舎指導員の女性教員、理療科教員養成施設時代の同級生でブラインドランナーのO選手	地元Sスイミングの店長、母親、姉、妹
バラスポーツ開始場所	Hブラインドダンスサークル	盲学校のグラウンドや盲学校周辺の歩道	地元スイミングスクール
バラスポーツ情報提供者	視覚障害者の社交ダンスの存在を教えてくださいました友達	トリアスロンをしていた寄宿舎指導員の女性教員、理療科教員養成施設時代の同級生でブラインドランナーのO選手	母親
バラスポーツ開始場所へのアクセス			母親
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	ポジティブ	なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	指導者の Tさん、ペアのパートナーのNさん	ブラインドランナーのOさん、日常的に一緒に練習しているHクラブのランナー	Sスイミングの選手コースを教える立場の1先生、母親、聴覚障害者に理解のあったKスイミングのNコーチ、長いスパンで目標設定してくれた有料の個人コーチA氏
バラスポーツ継続状況	偶然近くにブラインドダンスのサークルがあり、体験に行き入会した。ダンスを始め半年ぐらいで大会に初めて出場して以降、ブラインドの大会には継続して出場している。サークルが「自由練習」として部屋を確保してくれている枠があり、その時に行って練習している。ほか、先生の教室に通い2回くらい通っている。レッスン自体は1時間弱で、トータル3時間程度の練習をしているが、ちょうどいい。	34歳のころ、視覚障害者のランニングチームに参加するようになり、同年初めてフルマラソンの大会に出場した。2010年にはブラインドマラソンの強化指定選手となり、強化合宿の費用がかからなくなった。2011年ころ一般のランニングクラブに入り、室内の400mトラックで練習し、走力の高い人に伴走をお願いもした。2023年の引退後も引き続きランニングを楽しんでいる。	小学部6年で日本デフ水泳選手権大会に初めて出場。中学2年生の時に自宅から近いスイミングに移籍してから多くの大会に出場。中学3年生の時に障害者チームに入り、様々な障害者を持った人たちと一緒に練習を始めた。高校の時にKスイミングに移籍、障害者の2スイミングクラブも並行して在籍。現在、大学の水泳部メインで活動。有料の個人コーチA氏の指導は、大学3年の春まで。
支援		公的機関	
将来ビジョン	社交ダンスにはクラス分けもないので、全音と弱視の人が一緒に戦わなくてはならない。パートナーが見つからないと大会に出ることができないので、聴眼者に視覚障害者でできるということを知ってもらったために聴眼者の大会にも出て戦ってほしいと考えている。	トップ選手としては引退した今、今後は楽しくランニングを続けていきたいと考えている。盲学校の生徒や視覚障害者の人、若い世代にスポーツをする楽しさや、目標に向かって努力することの大切さを伝えたい。	大学卒業後は地元県の県内に残りプールで練習しようと思う。アスリート雇用で企業に就職して引き続き選手を続け、東京デフリンピック、3年後の世界大会、4年後のアジア大会、5年後の次のデフリンピックに出場したいと考えている。
その他特記事項	幼児期から弱視であり、学齢期には体育やスポーツでよい思い出がなかったが、大学で視覚障害者向けのスポーツを経験したことにより「見えなかったからできなかった」だけでなく、そんなに極端に運動神経が悪いわけでもなかったと思えるようになり、自分も意外でできると感じられたことがスポーツへの誇りとなった。	視覚障害者となり、一人で様々なことができなくなった時にマラソンと出会い、少しずつ記録がよくなることで自己肯定感が高まった。その点でスポーツの存在が大きな意味を持っていた。インタビューの少し前に、マラソンへのきっかけを作ってくれた女性が現在住んでいるオーストラリアのゴールドコーストのマラソン大会に出場し、トップ選手時代には味わえなかったマラソンの楽しさを味わってきた。	幼少時には顔に水がかかるのも苦手だったが、父親に海に何度となく連れていってもらい泳げるようにならなうと考えてようになった。5歳のころ、スイミングスクールに入るにあたっては障害に対する理解のなさから3か所で断られるが、理解のあるクラブに入った。高等部の時にKスイミングのNコーチに出会って初めて聴覚障害のことを理解して教えてもらった。

項目	24-S	24-T	24-U
調査年度	24	24	24
識別記号	95	96	97
生まれた年	1987	1992	1989
性別	男	男	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	15	0	16
障害内容	視覚	聴覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン ※2	B2	A3	B4
主実施競技 ※3	ローイング、クロスカントリースキー	デフラグビー	パラ水泳、ブラインドダンス
パラスポーツ開始年齢	29、31	高校3年合宿	29、27
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	視覚障害者柔道：大学のクラスメートの柔道選手／ローイング：大学院進学先の大学ボドクの知人	デフラグビー発起人のOさん	パラ水泳：SNSを通じて知り合い、パラ水泳のクラブなどを教えてくれた人／ブラインドダンス：フラインドダンスパーティーに誘ってくれた視覚障害者
パラスポーツ開始場所	柔道：TI大学／ローイング：東京都パリンピック選手発掘プログラム	デフラグビー：全国合宿	水泳：T障害者スポーツセンター／ブラインドダンス：ライオンズクラブのパーティー
パラスポーツ情報提供者	視覚障害者柔道：大学のクラスメートの柔道選手／ローイング：東京都パリンピック選手発掘プログラム	デフラグビー発起人のOさん	水泳：SNSを通じて知り合い、パラ水泳のクラブを教えてくれた人／ブラインドダンス：パーティーに誘ってくれた視覚障害者
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ネガティブ	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	ローイング：よきライバルであった視覚障害者があるローイング選手／クロスカントリースキー：選手兼コーチのガイドの方	現在働いている法人W	近くで活動しているパラ水泳のクラブにいたAさん、オリンピックレベルの指導者N1さん、N大学のN2先生、Fさんなどのコーチ陣とタッパのKさん
パラスポーツ継続状況	20歳のころ、視覚障害者柔道を始めて7～8年継続。28歳で東京都の選手発掘プログラムに参加し、ローイング競技から声をかけられ本格的に開始。最初は仕事をしながら深夜練習をしていたが1年くらい経って東京パラに向けて仕事を辞し、アスリート雇用で現在の企業で競技を続けている。 ボートの単一動作の回復だけでなくクロストレーニングの重要性を知り、冬季はクロスカントリースキーのトレーニングを始めた。	ラグビーの強豪大学でトップレベルのラグビーと向き合い公式戦出場を果たした。大学4年間で「ラグビーはやり切った」と思い、第一線から離れ趣味程度で楽しむと思った。 卒業後に一時休止していたデフラグビーでの活動を再開、世界大会で日本代表キャプテンを務め、普及や強化活動に取り組んでいる。現在はW法人に所属し、子どもたちにラグビーの指導もしている。	2015年に、選手雇用で転職。2017年に都内大学院に進学し、奨学金や各種補助金で金銭的に楽になる。コロナ禍は、地元へ帰る高校時代の仲間の手伝いでプールを使ったり、自宅の庭に小型プールを設置して練習した。 東京パラ後、スペインに練習拠点を移す。日本とのスポーツに対する価値観の違いに刺激された。パリ大会が近づき、タッピングの連携のことなどもあり、練習拠点を国内に戻した。
支援	勤務先		公的機関
将来ビジョン	ローイングと並行してトレーニングとして始めたクロスカントリースキーを現在メインとしている。ローイングはロサンゼルス大会で新クラスができてチャンスがあればという意識は、スキと重ならないところで練習や合宿に参加し、競技活動は続けているが、スキーをメインでやる上で、フィジカルトレーニングの一環という位置づけで継続していく。	強化の面では、世界大会優勝が優勝ができなくてもそこに挑む姿を多くの目で見せること。育成世代には、デフラグビーで頑張っている姿が刺激になる、明るく未来があることを伝えたい。 デフラグビーを何をもって広めたいことになるのか考えた時、最も難しい課題である「デフラグビーのアジア大会を開催すること」、これが最大の目標である。	トップ選手としていつまでやれるかわからないが、2026年アジアパラ大会までは競技選手としてやりたい。 今後、ブラインドダンスの競技会に出るなどしてもう一度ダンスを本格的にエンターテインメントとしてやってみたい。 ライフワークとして「非認知教育」に取り組みたい。頑張ること自体楽しいというマインドセットを普及させたい。
その他特記事項	代表になるチャンスがあることを知り、本気で競技スポーツと向き合うことができ、障害をアラムと捉えることができたという意味でパリンピック、パラスポーツとの出会いは障害受容への大きなきっかけであった。 研究職としての専門性が競技継続に影響している。自ら調べたクロストレーニングの一環としてローイングとクロスカントリースキーを行うことや、目標値を計算し具体的な計画のもとでも実践することでモチベーションを高く保っている。	自らが積極的に切り拓く姿勢があった。これは両親や姉の影響が大きい。父や姉から勧められた「三国志」「キングダム」「シャウト」などの漫画は、日常で聞かれぬ「見える会話」を学ぶことも多く言葉の獲得や競争心を高めるのに大きな影響を受けた。 大学の監督から「ユーモアがない」「わかつたふりをしない」と言葉をかけ、字幅付きでお笑いのテレビ、オウチやサンドウィッチマンを見てユーモアを学び、監督からは人生哲学を学んだ。	水泳、競技ダンスともパラ競技として取り組む前に本格的に行い、その後パラスポーツとして実施している。 世界トップクラスの成績を持つが、勝利がすべてではなく、努力することを楽しむというマインドを持っている。 パリンピックを目指す期間に日本のパラスポーツ環境が激変する期間が重なっており、NTCイーストの完成や各種制度や補助金の恩恵に与られている。 将来的には、他競技にもう一度シフトしていきたいという展望を持っている。

項目	24-V	24-W	24-X
調査年度	24	24	24
識別記号	98	99	100
生まれた年	1983	1991	1992
性別	女	男	男
居住地域	関東	関西	関西
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体・視覚	聴覚	聴覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支	特支→普通	特支→普通
スポーツキャリアパターン ※2	A2	A3	A2
主実施競技 ※3	水泳、陸上、パワーリフティング	バドミントン	デフバレー、デフビーチバレー
バラスポーツ開始年齢	13、15、39	大学1年	12、20
主実施競技の競技レベル ※3	国際出場	国際入賞	国際入賞
バラスポーツ開始時の重要な他者	陸上:学校の先輩(車いすマラソンに出席)、マラソンに出席していた年長の車いす利用者/パワーリフティング:公共施設のジムに同行したガイドヘルパー	聴覚障害のある大学の先輩	デフバレー:中学部の担任であった体育の先生/デフビーチバレー:友人(2014年時)
バラスポーツ開始場所	陸上:障害者スポーツセンター/パワーリフティング:公共施設とレンタルジム	大学の先輩が立ち上げたデフバドミントンクラブ	デフバレー:O市立聖学校中学部/デフビーチバレー:桜ノ宮ビーチ
バラスポーツ情報提供者	陸上:学校の先輩、マラソンに出席していた年長者/パワーリフティング:ジムに同行したガイドヘルパー	聴覚障害のある大学の先輩	デフバレー:中学部の担任であった体育の先生、デフ日本代表監督
バラスポーツ開始場所へのアクセス	ガイドヘルパー		
バラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
バラスポーツ継続時の重要な他者	パラ陸上:障害児のスポーツクラブの代表者(パラリンピアン)/パラ・パワーリフティング:ガイドヘルパーとパラ・パワーリフティング連盟のコーチを兼務している指導者	家族、競技活動を支えてくれる人々	デフビーチバレー:妻(元デフバレーボール日本代表)、デフビーチバレーボール協会の理事長であるU氏
バラスポーツ継続状況	13歳から水泳大会に中高と出場。陸上は15歳から、車いすマラソンから始めたが視覚障害の影響で困難を感じ、徐々に距離の短い種目を選択、視覚障害がある中で肢体不自由のクラスで競技を続け全国大会に出場。 パワーリフティングは39歳から。徐々に重いバーベルを上げられるようになった。連盟の関係者が運営するジムに入室し、アジア・オセアニア大会にも出場して自己記録を更新。	大学1年時に初めてデフバドミントンの大会に出場。大学の先輩が立ち上げたデフバドミントンのクラブに月に2回程度参加した。2年からは日本代表になり、国際大会に出場した。 大学を卒業してから6年ほどは、仕事の後ほぼ毎日、複数の社会人クラブで練習した。結婚を機に関東から関西へ引っ越した。仕事と子育てを両立しつつ週1、2回2つの社会人クラブ、2つの大学を拠点として競技を継続。	聖学校中学部でバレーボールを始め、B高等学校進学後は関西のデフバレーボールチームSに所属。高校、大学と2度のデフリンピック参加を果たす。大学卒業後はO市役所に勤務しバレーボールとビーチバレーボールを並行して行っていたが、2018年にT株式会社転職後はビーチバレーに専念し、ビーチバレー日本代表として、またデフビーチバレー日本代表として活躍している。
支援	勤務先	勤務先/公的機関	勤務先
将来ビジョン	定年までパラ・パワーリフティング選手としてデフリンピックを目指して活動していきたい。	競技を続ける中、選手として人として成長させてくれた家族や仲間との大切さに気づく。2025年のデフリンピックに集大成として出場し、メダルを獲得することで、応援してくれた人に感謝の気持ちを持って伝えたいと思っている。デフリンピック後のことは現時点で明確になっていないが、次世代の選手を育成していきたいと考えている。	公務員と民間両方を経験した教師はなかなかいないと思っており、教師になるのも選択肢の一つ、さらに上を目指すために、競技と向き合う時間をより確保できるアスリート社員も射程内である。デフビーチバレーの選手が健常者の試合で活躍することで、デフスポーツの認知度と競技力も高まる。現在の自分たちが健常者の大会で結果を残し、デフビーチバレーボールの存在を知って応援してもらえよう頑張っていきたい。
その他特記事項	肢体および視覚の重複障害であるが、単一障害のクラス分けに合わせ大会に出場するため、不利になる。 肢体不自由、視覚障害のどちらの障害特性も理解している指導者は少ない。 肢体不自由者のスポーツ指導者の経験はあるが、視覚障害には知識がなかった指導者が、視覚障害についても勉強して知識を得てくれたため、効果的な技術力向上につながり、パワーリフティングをやる際の不安が解消された。	聴覚障害のある人がもってスポーツを楽しむためには、コミュニケーションのサポートが一番大事であると思う。バドミントンの練習時に、手話通訳等がなければ、具体的な技術、それに関わる動きが理解できない、指導者の動きを真似するだけでは技術向上につながらず、楽しさを感じることができない。活動時に情報保障がなされることで、いろいろなスポーツにもっと多くの聴覚障害者がアクセスできると思う。	ビーチバレーボールは砂の上で動くため、高い身体能力が必要であり、コミュニケーション能力や人間力を備わっていないとチーム作りもうまくいかない、様々な要素が求められるので簡単ではないが、ビーチバレーボールでの学びが自身の成長を助長しているのは間違いないと感じている。

# 書籍及び調査報告書のデータについて

本書籍のデータは当財団ホームページにて公開しています。

本書籍のPDFデータの他に、過去の報告書データ及びシンポジウム、他イベントのデータも掲載しています。

ホームページアドレスはこちら ⇒ <https://www.ymfs.jp/survey/>

## スポーツ振興のためのデータ集

- 調査研究活動 -

ホーム > スポーツ振興のためのデータ集

### スポーツ振興のためのデータ集

2024年度	▼
2023年度	▼
2022年度	▼
2021年度	▼
2020年度	▼

ヤマハ発動機スポーツ振興財団では、事業活動を通じて発見・顕在化した各種の課題に着目し、調査研究活動を行っています。調査研究によって獲得した知見やデータは各種事業活動に反映するとともに、報告書の発行やシンポジウムの開催によってひろく社会に発信しています。

### 調査研究報告書

障害者スポーツ

トップスポーツ

その他

年度	調査研究報告書
2024年度	障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究 - 障害者スポーツ選手のキャリア、TV放送、選手認知度に着目して -
2023年度	障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究 - 競技団体の変遷、大学の現状、ユニ★スポ体験の効果、選手のキャリアに着目して -
2022年度	障害者スポーツを取り巻く環境について（速報：2022年9月） 障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究 - 選手のキャリア、TV放送、選手認知度、テレビ中継放送、ユニ★スポ体験の効果に着目して -
2021年度	障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究 - 障害者スポーツ選手キャリア、テレビ放送、選手認知度、ユニ★スポ体験の効果に着目して -
2020年度	障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究 - 障害者スポーツ選手キャリア、コロナ禍の影響、ユニ★スポ体験の効果に着目して -
2019年度	障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究 - 地域現場、障害者スポーツ選手キャリア、大学に着目して -

## 障害者のスポーツキャリアを考える

100人のインタビュー調査から見てきた選手の実態と特徴的な事例

2026年3月発行

発行者 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団  
Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)  
〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500  
TEL 0538-32-9827 FAX 0538-32-1112

印刷・製本 笹徳印刷株式会社

ISBN 978-4-9910824-7-4

© ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しを YMFS にご送付ください。



公益財団法人  
**ヤマハ発動機スポーツ振興財団**  
Yamaha Motor Foundation for Sports

ISBN 978-4-9910824-7-4